

処女の書

杉田直樹 著

日本學藝社刊

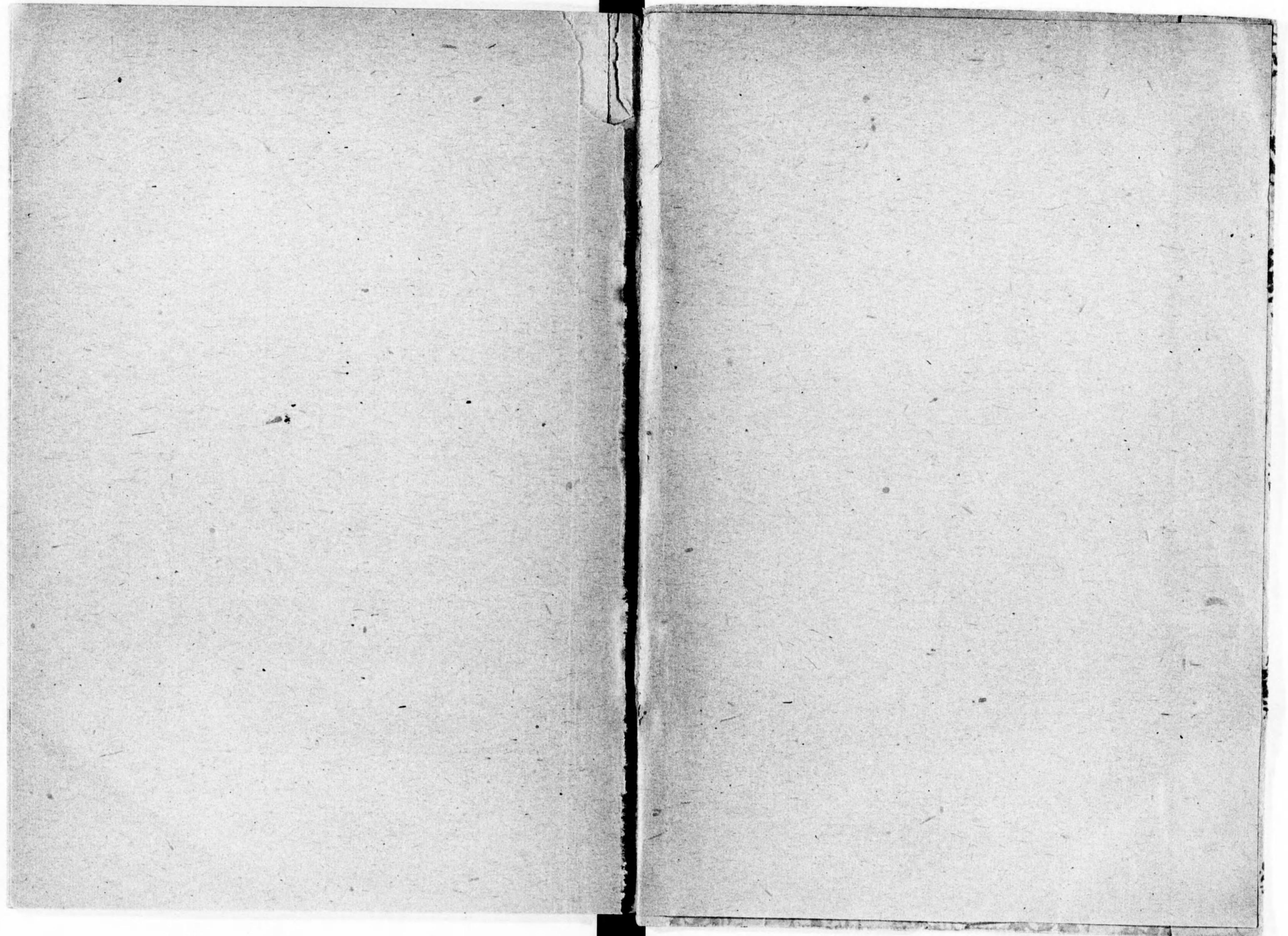
492
d
66

Ⓢ



始





處女
の
書

名大教授
醫學博士

杉田直樹著



日本學藝社刊

2

492
66



136859

自序

今日このごろ、若い男女の風紀が段々軽く見られるようになり、暗い生活に墮ちて行く女性の例が屢々私共の耳に入り目にふれるにつけて、前途ある無垢の處女のため、ころばぬ先きの杖代りに、性的啓蒙の一言を致しておくのが老人の義務だと考えつきました、今迄に女子青年學級などのために講述して参りましたことを、筆にうつして、世の處女諸嬢の座右に贈ることに致しました。今迄の性教育の書とは違ひまして、皆様の理智に訴えることばかりを述べまして、少しも好奇心をひき興味を起させるという記事はこの書にはありません。あまりに平凡な講釋のみではありませんが、そこに今後の我國のよき女性の道義と、楽しい幸福な、しかも正しい生活との指針となることを念願いたしました、その平凡なうちに力強い若い女性の

自覺をよびさまそうという氣持で、しんみりと執筆した次第であります。處女の讀本とは云いながら一般の娘をもつ母親たちもよんでいただきたいと思います。

昭和二十三年九月

杉田直樹

まへがき	三
序	四
今迄の女性の生涯	四
今後の女性の生き方	五
女性の天分	一九
性器についての常識	三三
卵子の行くえ	三四
妊娠のこと	三六
思春期の身體變化	三七
受胎の現象	三九
處女	三一

愛慾の意識	四九
春のめざめ	五一
エロチシズム	五三
交際のこと	五四
媚態	五六
初恋	五七
戀する者	五八
戀愛の本義	五九
相愛の法則	六一
戀愛の心理	六五
戀愛至上	六八

自然攝理の妙	三三
誘惑の警戒	三四
男子の無責任	三五
虐げられた女性	三六
賤業婦	三八
運命の岐路	四〇
眞の相愛	四〇
人生の半面	四二
女性の特性	四四
親友	四六
化粧虚飾	四七

嫁入前の危機	七二
結婚の目的	七五
家族制の習俗	七七
家庭に於ける修養	七九
結婚生活の特殊性	八〇
結婚の儀式	八二
初夜	八五
新婚の神秘	八七
妻の任務	八九
友愛と戀愛	九〇
貞操	九二

産兒制限の心理	一〇〇
社會道德と産制	一〇一
月經の生理	一〇三
月經の症狀	一〇四
月經に関する迷信	一〇五
月經の處置	一〇六
月經の衛生	一〇七
性病の慘害	一〇八
女性と性病	一一〇
性病の豫防	一一二
疾病の遺傳	一一三

遺傳の法則	118
優生學	118
配偶の選擇	118
血族結婚	110
母性愛	111
女性の冷淡	115
家庭の悲事	117
深い愛の交換	119
魅力は技巧の變化	121
夫婦間の氣位	124
女性ののろい	125

心身の活動力	147
婦人の美容	149
美の標準	151
均齊美	152
爽快美	153
理性美に眞愛美	154
季節と婦人	156
春と夏の婦人	157
秋と冬の婦人	159
更年期	161
いわゆる老婆心	163

老	年	期	………	一六四					
離	婚	………	一六六						
夫	婦	の	倦	怠	期	………	一六九		
夫	婦	間	不	和	の	因	………	一七〇	
獨	身	婦	人	の	精	神	病	………	一七三
老	嬢	の	心	理	………	一七四			
同	性	愛	の	感	傷	性	………	一七六	
レ	ス	ビ	ア	の	愛	………	一七八		
結	び	………	一八二						

處女 の 書

杉田直樹

——若い女性の性教育のために——

女性の世界が開けて参りました。教育においても職業においても、社會的の生活においても政治的の活動においても、女性は男性と相い伍し相い提携して、全く同格同様でその能力を發揮することが出来るような世の中になつて参りましたにつれ、性的生活におきましても、もう男性に隨從して、女房が亭主に養つて貰うという時代ではなくなりました。今後の女性は少女の頃からはつきりした自覺をもつて、男性にだまされたり、弄ばれたり、又男性と争つたり、怨んだりすることのないよう、男女生活に就いての正しい知識と見解とを持たねばなりません。私のこのお話は老人の眼から見た女子性教育論に過ぎませんが、今日の女性の自覺を促す上に、最も切實と考へますすべての性知識の方面についての、啓蒙的な叙述を、及ぶ限り丁寧に試みて見たものに外なりません。

今迄の女性の生涯

今迄の封建時代の我が國の婦人の一生ははかないものでありました。その一生を考へて見ますと、

生れて、食うて、育つて、きりようもよく、行儀作法も正しく、一通り茶の湯、活け花のたしなみも出来まして後、さて望まれてお嫁に行くとなりますと、もう御振袖を着て芝居見物もならず、世帯じみた生活にあくせくと家事に明け暮れ追い廻されることになります。そのうちに子供が出来るともうなりふりにも構つていられず、ひたすら夫と子供との間に埋もれて、楽しみよりもむしろ苦勞の方が多い日数が、長く／＼果もなく、倦怠するまで續くのであります。自分の身が老いを感じて來ましても、年頃まで育て上げた息子や娘が思うように孝行をしなくてもくれず、惱みのうちに先立つ夫に死に別れ、やがてわびしく自分の心も朽ちて行きます。この世に残したかたみは、はかなかつた過去の思い出と、不肖の子二人三人のみ。これが普通女二代の平凡な生き方なのであります。しかし果してそれでよいものでしょうか。

今迄の人達は、「世間はこういうもの」と漫然考へてあきらめていました。それで女一代の責任も義務もはたしたのでした。所詮女と生れた者の、この世間における役目としては、年頃において三國一のよい婿がねを迎え、夫婦の間に玉のような子供をなるべく澤山にもうけ、これらの子供を及ぶ限りよく育て、それを二代目の世間へひき渡して自分は世間の舞臺を退き、苦しまずにあの世へと引き

下ることあります。小さい時にお行儀を習うのも、赤い着物を着飾るのも、又お化粧に浮身をやつし、媚や愛嬌をふりこぼすのも、つまりはよい男の眼について嫁に望まれたばかりの支度に外なりません。嫁入つてからも身だしなみに心を碎き、自分の日一日と容姿の衰えて行くのを悲しむのも、つまりは夫から倦かれまい、男から見捨てられまいとの心遣ひに外なりません。母が自然と子に甘いのも、末はこの子に寄りかゝろうとの下心からと云えば云われもしよう。昔からの教えに「女は三従」と云つて、小さい時は親に従い、壯んな時は夫に従い、老いては子に従うというのが習いで、つまり夫あつての妻なのでありまして、妻あつての夫ではありませんでした。誠に女一代はつまらない宿命をもつて生れて来たものであります。

今後の女性の生き方

しかし太平洋戦は女性にも一新時代をもたらしました。御承知の如く我が日本が更生して民主的國家に改まると共に、女權はにわかには擴張強化せられまして、女性は男性と凡ての點において同格となり同格となり、その運命もまた男女同じ道を歩むということになりました。三従の教えは抛棄せら

れ、新しい覺悟が女性に要求せられることになりました。女性も社會に對し独自のしかも重大な使命をもつようになり、男の生活の犠牲となつて男に仕えるのが、決して女の職責の凡てではないことになりました。しかし今迄の女は男に従屬して來ましたので、男の方でもその代償として女を庇護し、これに着飾らせて、芝居三昧の快樂をさせて來たのでありましたが、これからは男に頼らうとしない女を、男は決して樂に遊ばせておこうとは致しません。これからの自覺した女性は自分の手一つで自分の日々の糧をかき出し行かなければなりません。働かない者は食うことを許されません。そこで今日以後の婦人は自力で生活するだけの技能と精神力とを持たねばならなくなり、當ようが、しかし世間において、そんなに急激に男女間の生活均衡が變動することはあります。當分は男女双方から民主主義に合うように歩み寄つて、やがて男女相協力して新しい意義のある幸福な社會生活を創り出すように努力しつゝ、進んで行くことになるのではありますまいか。

しかし生物學的に見て男女の身體構造やその心情の特質がそれ／＼生來異なつてゐる所から、何處迄も男女において、その使命が異なつてゐるものと考えられます。即ち女においては子を生み子を育て、民族の後繼者をよく作り上げて行くことがその最大唯一の任務なのであります。従つて社會的活

動、文化の進展、生活の闘争は、男子に一任して、婦人はその闘う男子に糧と衣と安慰とを與えるために家庭を守るのが本分であります。文化だ職業だ、藝術だ政治だと云つて出しや張るのは、たとい女性にも許された権利だとは云え、女の生理的特質としては、柄に合いません、それは幸福なるべき女性生活を自滅へ導く道程だと云つて、生物學者は警告しています。しかし人間はなるほど生物の一種には相違ありませんが、今日ではもう一般生物と同列に止まつてゐるものではありません。生物より出でて生物を抜いている超生物なのであり、いな、超人さえも存在するのであります。生物界の通則を以てこれからの人間までも律しようというのは誤りでありましょう。そう考えますと、生物學はどう説きましようとも、これからの女性は何も男子に頭を下げて扶養して貰わなくともよろしい、子供など生まないでもよろしい、學問を勵み技能を磨き、今迄壓迫されていた力を反撥して強く自分で生きて行かなければなりません、獨立せよ、自活せよ、職業を得よ、そうして社會における女性独自の生活權を獲得せよと叫ぶ者もあるのであります。それもよろしいでしょう。しかしそれでもつて、人類が一代限りに絶滅してもよろしいのでしょうか。一體女性が社會へ進出して男子と共に政權を争うとしても、男はさりとて直ちに女性に代つて子供を生んだり哺乳したりすることは、生理上全く出

來ないことでもありますから、生理上の職責は、どうしてもその生理機能に適合した器官をそなへてゐる者が營んでくれない限り、他の者が誰でも代りが勤まるというものではありません。即ち女性の心身の生理上心理上の特質というものは、どこ迄も女性の天職として、女權の問題の如何にかゝらず、男性の特質と相對應して、獨自のはたらきをして貰わねばなりません。そこに本當の女性の特權と特務とが存するわけであります。

女性の天分

女性には女性特有の身體器官とその生理機能とが存在している以上、その特有のはたらきを完全に營むものが第一の努めです。その上で、更にその餘力を以て、何の技藝をしようとするか、何の職業に従おうと、それは御隨意のことでもあります。しかし天與の職責を捨てて了つて、代りの誰にでもつとまるような仕事に専心されてしまったのでは、始めから天與の機構なるものが意味をなさなざることになります。壁を塗らそうと思つて頼んで来て土やらコテやらをあてがつておいた左官が、壁を塗ろうともしないで、その土で床を作つたり、そのコテで釘を叩いたりしたのでは、始めから雜作を頼んでおいた

大工の方は自分のすることに迷つて了いましょう。つまり左官も大工も双方がその持前の仕事が出来なくなつて了います。

人間は生物の一種であり、而も高等な生物である以上、まず生物としての任務をすのかり果した上の餘力を以つて、超生物的理想を遂うことに致したい。治療醫學は病理學の應用であります。先ず病理學に精通した醫師でなければ本當の治療効果を擧げることにはできません。病理學を超越していきなり治療を施そうとしますと、非醫者の無鐵砲な療法と同様、病氣を一層悪くして了うのが落ちてあります。まぐれ當りはそういつもあるものではありません。二三の幸運な女流理想家が、男子を向うに廻して女性の獨立について大氣焔を吐いているにもせよ、これが萬人平凡の凡ての女性を皆理想家扱いされたのでは困ります。人生においては奇蹟をたのむことは出来ません。又いつも偶然の僥倖を望んではなりません。

そこで私は現代の若い乙女達に向つて理想を説くことをしばらくやめまして、まず生物として——と申しては失禮ですから、まづ人間としての女一代の平凡な任務を講釋して見たいと思つてあります。この平凡な任務を果たした後に、それ以上いくらおえらくおなりになるうとも、それは結構なばか

りで少しも世間に差支えはありません。「娘よ、先づ女たれ。」これがこれからの講義の序言であります。

女性と男子とは、その身體の上に解剖學的生理學的に著しい生れ付きの相違があると等しく、その心性の上にもまた著しい特性の相違があるのであります。その機微な女性の特質は、到底私共男子の分際では徹底的に分るものではありません。今戀愛をしている最中の青年は意中の處女を神の如くに禮讚して、これほど清い尊い存在は天にも地にも他にはないと心から信じています。然るに一度女に裏切られた経験のある男は、やたらに女にケチをつけ、もうどんな女をも信用しようとは致しません。ショーペンハウエルのような哲學者は——冷靜なること灰の如しとたとえられるほどの哲學者であり乍ら、尙不當に女を罵倒しています。「女ほど、胴が長く脚が短くて、姿の醜くいものはない。それを世の男達が美しいと云うのは、男が性欲に眼をくらまされてるからである」とまでくさしています。これもこの人が或女にだまされた餘憤だと考えますれば、公平な批判だとは評せられません。とかく女を男に批判させますのは、その男の女に對する經驗如何を聞くようなものでありまして、決して科學的嚴正ということを期待し得られないかも知れません。

單に自家經驗のみによつて女性を觀る批判が誤つてゐるということは、常識的に誰にも分ることであり、私に説く所は主として經驗によらないで、科學に據ります。しかしそれでも女性の身體や精神の特性を、あまりに性的に色づけて誇張して眺めてゐる嫌いがまゝ起るかも知れません。しかし私は決して女性を性的立場のみから眺めて説こうとしてゐるものではありません。

性器についての常識

卑俗な書物には好笑的に性慾の解説やら、甚だしいのは性器の解剖まで物々しく述べてゐることがありますが、女性のことは、女性自身のものなものですから、既に年少ない頃から常識として分つてゐられることと私は信じます。そこで性器構造上のことはこゝには一切省筆しまして、女性獨得の生理的任務である受胎妊娠のことについて女性心理の構述上大切な要點だけをぬいて申し述べることに致しますが、子宮という器官はその壁が厚い筋肉層から成つてゐまして、處女の子宮口徑は辛うじて直徑一耗位に過ぎません。この口は腔のつき當りの所に外口が開いてゐまして、この口から子宮頸管となつて子宮體の内部まで腔がつゞいてゐます。子宮體腔に至つて幾分廣くはなりますが、處女におい

ては尙甚だしく狭いのであります。しかし一方妊娠した者では産後に子宮が收縮しましても、多少廣い腔をそこに遺殘してゐますが、それでも妊娠してゐない平時には、子宮底の幅廣い所でもその直徑は一耗に充たない位なのです。その子宮底——名は底といつても入口が下方に向いてゐますから底が上の方であります。その底部から左右へ輸卵管という肉の厚い、管腔の直徑一耗位の長い管が出てゐて、左右の側腹部内面に沿い、彎曲して走つてゐます。その外端は喇叭のように廣がり、しかもその邊緣は采配のように切り込みが澤山出來てゐて、房のようになつて下腹部の腹腔内に懸垂してゐます。そうしてその喇叭の開いたような形の部分でもつて、漏斗のやうに、卵巢を抱き込むやうな風になつてゐます。

卵巢はその表面にやたらに皺のあるクルミ狀の器官でありまして、その名の如く人間の卵子を作り出す所であり、女性の生殖機能にとつて最も重要な器官であります。しかのみならず、この器官からは卵子ばかりでなく、いわゆる女性「ホルモン」が生産せられるのであります。この女性「ホルモン」は女性特有の豐艶な體格を構成し、且女性特有の從順優雅な心性をつくるものとなる成分でありまして、後に詳しくお話し申します。斯う考えて來ますと、女性の卵巢こそ、その女性の一生のみな

らず、人生、社會にとつても甚だ大切な生理的、心理的、文化的の意義をもつてゐる器官なのであります。そして成女の卵巢の表面には、皺ばかりでなく、無数の半透明な小豆大のイボくが見られます。これを濾泡と申しまして、その中に卵子が一つずつ藏されています。卵子はその大きさは十分の二耗位で、雲丹の卵の粒々の一つ位に相當し、注視しますれば肉眼でも辛うじて認められます。婦人一代の間には、この卵子を左右の卵巢の中で三萬乃至四萬個も發育させることが出来るのでありますが、それが皆この世へ出て来るわけではありません。その一個の卵子を藏した濾泡が約四週間毎は一つずつ（即ち月經に關聯して）内部の液を増して來て張り切つて破裂し、その破裂する時の力で卵子を卵巢外に弾き出すのであります。弾き出された卵子は喇叭管の采配の中へ落ちます。破裂した濾泡の痕は漸次癍痕のように治つて皺になつて了います。その間に又新しい濾泡が大きく發育して來るのであります。

卵子の行くえ

喇叭管の采配の中へ落ちた卵子は、粘膜面の粘液に捕えられましてその壁にひつつきます。その壁

には「ピロイド」のようにほそい毛のようなものが生じていまして、それが枯薄の風になびくが如くに子宮の方へ子宮の方へと自發的にいつも動いています。それによつて卵子は靜かに輸卵管の中を子宮の方へ移動されて行くのであります。子宮へ入つた卵子は更に子宮粘膜を他動的に下方へ徐々に動かされて行きまして、子宮頸管を経て子宮口から腔内へ出で、そのまゝ外部へ排出されて了うのであります。しかし萬一この卵子が輸卵管を通つて子宮内へと旅をして行く間に、腔の方から子宮口を通り、子宮頸管から子宮體腔へ、更に喇叭管内へと泳ぎ上つて來た男性の精子に出會いますと、その精子の一個が卵細胞の内へ入り込みまして、こゝに受精現象が起るのであります。

卵子と精子とが合體したものを胚子と申します。胚子は外觀上初めは卵子と全く同一であります。これは段々と生長する可能性をもつています。卵子の受精の機會を得なかつたものは、そのまゝ排外されて死滅して了います。受精をしました胚子は、こゝに新しい個體が芽生えたのであります。これから妊娠が始まるのであります。卵子は一旦一個の精子をその細胞體内に受け入れますと、直ちにその卵細胞の被膜が急に硬くなつて來まして、もう他の精子が同じ卵細胞の中へ入り込むことの出来ない状態になります。つまり異なつた種がまじつて入り込むことが出来ないようになるの

であります。そのためいみじくもこの被膜には貞操膜と名付けられたのであります。

妊娠のうと

胚子が生じまする頃には、濾泡内の内分泌の影響によりまして、子宮内面の粘膜には充血が起つて参り、その粘膜は肥厚して面が粗くなり、胚子はそこへ附着してしまいました。もはや腔内にまで動かされて落ちて了うようなことはなく、受精した胚子は子宮内壁の一部へ壁着します。その部の子宮粘膜は段々と變化して、胎盤が発生し、その胎盤に集まる血液に養われて胚子は益々生育して参るのであります。これが妊娠という現象であります。この妊娠は子宮腔内で起るのが常であります。時として精子が輸卵内へ泳いで行き、偶々輸卵管内を通過しつゝある卵子と合體しまして、胚子が輸卵管壁に附着し、こゝで胎盤を作つて生育を始めるようなことが時々あります。しかし子宮内とは違つて、輸卵管ではその壁が肉厚ではありませんが、直径僅かに一耗にも充たない細管でありますから、そうく胚子の發育に應じて擴大して行くことは出来ません。これを子宮外妊娠又は輸卵管内妊娠と云ひまして、早晚輸卵管を破裂せしめて重大な内出血を起さしめ、甚だ危険な結果を招くに至

るものであります。

妊娠の期間は云う迄もなく二百八十日即ち四十週、俗に云う十ヶ月に亘るのであります。その間に、始め直径十分の二耗に過ぎなかつた小さな胚子は、生育をつよけまして、遂に身長五十糎、重量三疋を標準とする「成熟した胎兒」とまで大きくなり、期の満ちた時には、陣痛と共に子宮壁の強力な間歇性の收縮が始まり、こゝで胎兒は頭を先にして子宮頸管を開き腔を壓排し、袋の底からおし出され揉み出される肉塊の如くになつて、この世の風に當てられるべく、母體から離れて生み出されて來るのであります。これが分娩であります。

思春期の身體變化

以上が生殖機構の大略であります。今更ならず近代の若い女性は、くわしいことを既に御承知のことでありましょう。幼兒の頃にはまだ機能が備わつていませんが、思春期になつて卵巢の排卵作用が始まつて來まして後に、始めて受精が可能となりますことは上記した通りであります。この排卵作用の始まる時期におきまして恰も月華が開き、性器の著しい發育變化が起つて参ります。尙乳房の急

激な發育、副毛の發生、全身皮下脂肪の増生、頭髮の急に長くのびて來ること等の、いわゆる思春期の身體變化が起るのであります。それと共に處女はその容姿に何となく魅惑的の美しくさを加え、且精神的にも生々とした理智と感情とがあらわれて、何となく世の中を明るく思わせ、これに接する男子の心持をなごやかにいたし、その心をひきつけて已まないものであります。性機能の成熟したことは、その外貌容姿の女らしさを加えたことによつて直ちに認知し得られるのであります。

しかし斯く心身の女らしさを得る發育の凡ては、卵巢の「ホルモン」の内分泌によつて支配せられているのであります。即ち前記した如く卵巢の組織細胞の産出する女性「ホルモン」が血液の中へ流れ込んで全身を循環します間に、性器の各部や乳腺や毛根や皮下組織や、腦細胞や、その他あらゆる身體器官に發育刺激が與えられ、女らしさの完成を得させるのであります。若しも幼少の時からその卵巢に疾病がありますか、又は手術でこれを除いて了いますと、少女は永久に少女の状態に止まつていまして、年をとつても女らしさが現われて來ませんし、心理的にも性愛を解するに至りません。老年になりました卵巢の自然的退行のために經盡期に達しまするか、又は手術などで卵巢を剔出してありますと、既に壯年において女らしさを獲得していたにもかゝらず、その以後は體格が急に遅まし

くなり、鬚などが生えて來、氣性も亦粗くなつて來まして、女らしさの特徴を失つて行き、男性的の傾向をとつて參るのであります。つまり女の女らしさを得且これを保持して行きますのは、たゞこの卵巢の内分泌物の作用一つによるのであります。それ故卵巢の製劑をば、卵巢機能脱落者に内服又は注射で與えますると、その脱落症狀を治すこともできますし、男子の性質粗野な者にこれを與えますると、幾分男らしさを失つておとなしくなるとも云われています。女の特徴を形造る中心の力は卵巢にあるのであります。卵巢を失つた女子は、睾丸を失つた男子と同じく、性の世界には何の資格もないものになつて了うのであります。

受胎の現象

婦人が受胎するためには、その卵子と男性からの精子とが相合體しなければなりません。それがためには、先ず健やかな精子を子宮腔内に受け入れなければなりません。精子は云ふ迄もなく男子の睾丸の中で作られるもので、丁度卵巢から卵子が排出せられるように、精子は多量に睾丸内に發生して精囊という器官の中に貯えられています。

印ち女子は腔内にその精子を受け入れなければ受胎は出来ません。しかも精子を受け入れましても、丁度その折に、子宮内又は輸卵管内に卵子が到来していなければ、受胎現象は起りません。卵子が子宮内に來ていても、よほど運がよくないと卵子と精子とが適當に出會うことができないで、受胎せずには卵子はそのまま排外されて了うことが多いのであります。つまり受胎、妊娠ということは、かなり稀に起る偶然の出來事と考えなければならぬのであります。

そこで受胎行爲の行われますには、まず性器に特別の準備が出來ていなければなりません。これは器官の刺戟又は精神的の色情發動によつて起るのであります。婦人から發動して性的の暴力行爲に出ることは絶対にあり得ないことですが、婦人が男子の暴力の犠牲になるといふ危険は、ないとは云われません。婦人の意志に反し暴力を以て男子から接觸を強行せられました場合は、法律上被害者たる女子からその男子を相手取つて告訴しこれに刑法上の罪を負わしめることが出來るのであります。つまり法律は、男子に對して處罰を以て臨み、かゝる無體の行爲を行わないように警戒し、以て婦人を保護することになつてゐるのであります。しかし不幸な場合には、闖入した暴漢又は強盜等によつて婦人が強姦せられ、たゞ一回の接觸によつて受胎妊娠せしめられたというような事例も、往々世間

に聞き及ぶ所であります。

處女

また性的の體驗のない少女を處女と申します。男で處士などと云いますのはまだ仕える君主のない者と呼んだのでありますが、處女とはつまりまだ定まる良人のないという意味なのであります。しかし生理的には許嫁の人があつてもまだ肉體的の性的經驗のない少女を、廣く處女と呼ぶのであります。が、處女の特徴としましては、まだ男子に接觸しないために腔口の半月狀の處女膜が完全に保持せられてゐる筈であります。しかし處女膜には人によつていろいろの變形があるのであります。中には始めから一向目立たないほどのものもありまして、單に處女膜の存否のみを唯一の證據にして處女か否かを判定しますとすると、往々間違ひを起すことがあります。又處女期においても、月經時の手當などのため、又過度の運動殊に乗馬等のためなどで、處女膜の偶然破れるような場合も屢々あるのであります。

自然の攝理の妙

何としても性行爲は婦人にとつては上記の如く重大な意義のあることでありまして、萬一迂濶な間に受胎、妊娠をするようなことがありましたならば、己れの身體上に分娩、授乳迄の苦しい體驗を味わなければならぬばかりでなく、若しそれが正當に許された夫婦以外の關係でありましたならば、ことによるとその不品行を敢えてした婦人は、家族や社會から爪弾じきせられて、その社會における生活上の名譽を全く失つて了うようなことさえも珍らしくないのであります。正當の夫婦であつてさえ、近代人は妊娠、分娩、育児等の苦勞を厭うようになりませんでした。受胎の結果として婦人にとつては餘りにも片手落ちな苦痛の負擔が與えられる事實を既に知悉している女性達は、決して受胎を喜びません。むしろ受胎をしないよう避妊の手段を講ずる用意さえするものが、今日では實に少なくないであります。

しかし自然はその至妙な機構によりまして、生物の種族の繁殖を望んでいるのであります。人類も益々「生めよ、殖えよ」の神の御心に沿ひ、本能的に生殖に従うべき運命におかれていたのであります。と申しますのは、性慾發動には男にも女にも、絶大な精神的緊張と或肉體的緊張とが伴うように拵えられてありますので、色情が起りますと、男子の側に特異の緊張が生じ、又女子側に於いても同様に或瞬間に特異の感情が起り、子宮口の附近に子宮體筋肉の運動が起るのであります。これが即ち自然の攝理なのであります。受胎を遂げさせようという生理的機構が自然に備わつてゐることを證するものであります。

しかし一般の人々は平生自覺的に受胎妊娠を目的として性生活をしてゐるものではありません。たゞこの特異の快感感情を得んがために性行爲が行われているのであります。それ故特に受胎、妊娠を欲するときにはこれを生殖慾と呼んで、區別して考えています。人生の實際問題から申しますと、性慾の衝動が人間の行動を支配する力強い當面の刺戟となつてゐるのであります。性的興奮の衝動にとらわれている男女は、その瞬間には生殖のことなどは少しも考慮に上せては居りません。色を漁るもの、戀愛に酔うもの、それはたゞ性慾にとらわれているだけであつて、少しも生殖を欲するという意識はありません。しかし實はそういう風に迷わせておいて、知らず／＼の間に生殖の効果を擧げさせるように、自然の攝理は無智な人間をだましてゐるのであります。若し近代人のよう

に始めから性の知識をもつていて、性行爲に伴う幾多の女性側の危険な出来事を警戒するようになり、これが全人類に及んで、凡ての婦人が避妊の手段を講ずるようになりましたならば、人類は遂に滅亡せねばならなくなるではありません。現にそういう性知識にめざめた婦人の多い文明國におきましては、段々人口の減退して行く事實について、非常に驚愕して心痛しているほどなのであります。

誘惑の警戒

昔からの眞面目な人間にとりまして、この猥らな感情の欲求を警戒させます手段としましては、本能として、若い男女に性の方面に關する事柄に對して強い羞恥心が與えられているのであります。又人爲的のものとしましては、社會の風習道義の上から、性道徳についてきびしく戒められているのであります。殊に東洋では男女七歳となれば席を同じうせしめないというほどであります。殊に娘をもつ親としては、心なき男の誘惑に對して嚴重な監視の眼を光らせますと共に、娘自身にも獨得の云いふくめをしまして、性知識を遮斷し、且決して男子を近づけしめないように骨を折つて來たのであります。その當時の性教育としましては、たゞ娘に「男を恐れよ」「若い男と親しむのははしたな

いことだ」と呉々云いきかせ、たゞ世間世間といつて世間にかこつけて娘を退嬰的のものに致し、これを警戒するの餘り深層に籠居せしめて、男というものをひたすら知らしめないようにとのみ専念したのであります。従つて娘が年頃になりました、これから正しい道によつて男と婚姻し、一家の繁榮をはからねばならないという時期になりましたも、さて男に對する何等の豫備知識ももつていませんために、却つて男に對して何等の影響をも及ぼすことの出来ないような、弱い／＼女になつていり外に仕方がなかつたのであります。

男子の無責任

男とはどんなものか。こゝで處女に對する男の誘惑について一言述べる必要があると思ひます。男は體力もすぐれ、氣性も荒い。或一定の年齢に達しますと、相愛の相手として熱心に女性を求めて參ります。しかしこれは女性の人格を重んじてこれを生活の伴侶として求めるというのではありませんで、たゞ瞬間的に人間本能の實感をむさぼりたいためにのみ女性を求めるのであります。それによつて男性は何等それにつゞく責任も苦惱も感じていません。即ち男は受胎、妊娠という如き身體的

な苦惱を直接に負わねばならない危険もなく、又これによつて女のように處女性を失つて結婚その他習俗上に不幸の責をとらねばならないという心配もありません。全くふしだらに放し、性行爲については口を拭うて知らぬ顔が出来るような、生理的並びに倫理的の自由をもつていたのであります。しかしこれは實はずつと以前の時代に、男性が社會の凡ての權力を支配し、女性を從屬的のものと見ていた當時の習俗上の遺殘に外ならないのであります。自覺ある人士は、現代のように、女權を男子と同等と見て、男子の性的無責任に對して女子に對すると同等の制裁又は自制を促そうとして、いますことは、新民法の規定や新刑法の姦通罪除去という如き事實に見ましても明らかであります。しかし風俗上においても今尙過渡期に屬して、不心得な男性が屢々女性を凌辱し、その權利をふみにじるようなことがありますのは、まことに悲しいことと申さねばなりません。

虐げられた女性

とにかく現代の不心得な男子は、誠に女性を放肆行爲の對象として虐げることにして、重い責任感をもつておられない者が多いのであります。その實害を受けるものは、一方的に女性ばかりな

のであります。しかし女性といえども亦本能をもつて、それは事實であります。それ故男性に對して多少はあこがれの心持を持つて、従つて、男が始めから暴力をもつて向つて來た場合は論外でありましょうが、多くの例ではやはり女の方にも、男の注意をひき男の或る衝動を起させるような服装、舉動、表情、態度等が始めからあるのであります。つまり男に乘せられるような隙を自分で作つて、男の襲撃を挑發したものは女自身だとも考えられるのであります。しかし初めから計畫的に女性を誘惑しようと考えている男達は、最初にはその目的を隠して、たゞ深切にその女の爲めのみを思つて、近づくに、ひたすら甘言や贈物や、又芝居活動の見物などと、女の好きそうな所へさそい出して、女の歡心を買ひ、安心させ信用させた所で、そろ／＼と露骨にわがものにしようとしかけて參るのが例であります。女はそんな場合には、今迄いろいろ物を貰つたりして恩に着ている手前、手強く拒絶することができません。男の云うがまゝに従つて了い、つまり男の弄びものになつて了うのであります。男はやがてその女に飽きを感じますと、そのまゝ捨て、了うか、又その女を今度は醜業を営む場所へ賣笑婦として賣りこかしたりしまし

て、その利得は男がせしめて了います。女はたゞ泣くにも泣かれず、訴える所もなく、世間に對してももう正しい女として顔むけもならず、一生を日蔭の生活に墮して送るに至るような氣の毒な運命の者も、決して世に少なくはありません。その起りはつまり自分の、男性というものに對する認識の不足だつた所から、何等前途の危惧をも感じないで、輕卒に男の意に従つてその弄びものになつて了つたことは發するのであります。一人の男に輕卒に媚を興えるということは、つまりはあらゆる男性に對して媚を興えることとなるのであります。

賤業婦

しかし男性が斯く無責任に女を情愛の相手として弄ばうという衝動は、人間性として通有なものでありまして、有徳無徳を問はず男性としては誰にも多少なりとも存してはいるのであります。そこでこの男子の衝動に媚びてこれを迎えんがために、幾多の無智な婦人は金錢等を代償としまして性行爲の相手となり、これを以て生活の資として生じて來るようになりました。これを醜業とか賤業とか云い、娼妓、淫賣婦、賣笑婦、少しくむづかしく云つて性業婦人なども申します。物の價は

經濟學の原則によりまして、需要が多ければそれに應じて高くなります。容姿のよいもの、技能のある者、男に特異の満足を興えるもの（例えばたやすく男の意に従う可能性のないもの、社會的にもてはやされている藝人等）は一段と高價になります。而してこれらを仲介して、その男と女との双方から手数料をかすめて生計としている卑人もまたあるのであります。

男は自分の性愛の相手として弄んでいた若い女に飽きて來ますと、これを仲介者の手によつてながしかの金に代えて、その女の自由權を性業者に賣り渡すようなことがまた多く行われます。この「身の代金」はもちろん女自身が受領してこそ意味があるのであります。然るにそれを女の無智に乗じて悪い男が自分の食いのものに致して了うのであります。即ち女性は全く拾われた品物と同様に無價値のものとなり、二重の意味（性的に弄ばれ、且その上身體の自由を賣られる）において男の暴虐な支配のもとに屈辱を受け、その一生涯の自由と幸福と人間らしい誇りとを、皆一度に棄てて了わねばならぬことに立ち至らないとも限りません。

運命の岐路

斯ういふ運命の岐れ路の第一歩は、青春の血にかられ、尊い無垢のからだを、初めて出會つた、素性の分らない無責任な男に、心ならず委せて了つたその瞬間から始まるのであります。女は一度男に身を委せたならば最後、もう一生その男に頭が上らないということは、古い封建的代からの古い慣習しでありました。現代でも婦人のほこりとする志操が男を拒斥するほどに強くない限り、婦人はいつ迄も男子の愛慾の衝動の犠牲として、その涙を依然つゞけて行かなければなりません。

それほど男は愛慾に意地のきたないものと思つていて差支ありません。信頼の出来る老年の人や父兄師友が折紙をつけて紹介をして呉れ、特別の目的（修養、音楽、藝術の習得等のため）で交際をしている男子ならば、或はそんな性的野心を少しも懐かないで、清い交際をいつ迄も続け得られるかも知れませんが、大抵の場合には、氣心の知れない氣味の悪い男とは、親しく接近しない方が仕合せであります。妻子ある男とてもこの點では決して油断は出来ません。

眞の相愛

眞に結婚をして正式に夫婦関係に入つた男女にのみ、自由な情愛行爲が許されるのであります。こ

れはその結合の動機が性慾に伴う享樂のためではなく、少なくとも表面上はその一家の爲め後継者を得るといふのが目的で、本當の生殖のために両者が情愛結合に入つたものと認められるからであります。従つて兩者の間に種の混交することを避け、熱烈に義務の觀念を以て、その生れ出でた子供を後継者として育成し教育する務めを怠らしめないように、我が國の風習では嚴重に一夫一婦の制に法律上限られて居りまして、勝手に離婚は出来ないことになつています。

男が若し正しい妻以外に、他の女との間に關係を結ぶことを望みますならば、それは後継者を得るといふ目的以外、單に性的享樂のみを得ようとする低級な欲求のあるものとして、その男は、正しい男女關係の立場からは、世間から輕侮せられ批難せられるのを免れません。正しい結婚生活を偕老同穴の幾千代かけて久しい間送つて來た夫婦でありますならば、お互に異性の特質をよく理解し合い夫婦の間で何にもたとえ難いような楽しい相愛生活の中にひたることが出来るでありません。斯ういふ幸福な相愛關係だけでは、波瀾の多い人生に、人間證券のいかに陋劣なものであるかの實相を、遂に見ることが出来ないで、一生を過して了うであります。

人生の半面

人間は奔放な愛慾生活から眺めますときには、男も女も實に醜陋なものであります。お互にその醜陋の面を許し合い、道義や宗教でもつてこれを宥め合うことなしに、相互の本能生活を意のままに充たし合うときに、そこに始めて、本當の理想を捨てた人間性のありのまゝが見られるのであります。あらゆる世相、文學、小説、藝術は、この人間性をありのまゝに描き出し、そこに道義をはなれた人間の調和性を見出そうと致します。既に人間の理想の何たるかを知りぬいて、固く性道徳を守つて來た人々が、この人間性を描いた場面を見ますと、たゞ露骨な人性に對する憐愍と向上の希望とを感ずるだけでありましょう。しかもそれが所謂文學鑑賞上の趣味興會となるのでありますが、この人間性の描寫に共鳴し又これを模範として、自己の墮落に少しも介意しないような人を作り出すとは、恐らく文學藝術の眞髓とは云いかねるでありましょう。よく文學と道徳とは相反すると論ぜられますのは、この人性本能に關する點についての事でありまして、この意味から申しますれば、年若い、性道徳的理想のまだ固まらない、いわば性知識の不十分な少女達は、文學に近すかないのを以てむしろ賢

しとし安全なりと致すでありましょう。人生の喜劇を描寫したり、又喜劇を巧みに演出する文士俳優の中に、却つて眞面目な陰鬱な性格の者が多くありますように、不倫の戀、放埒な性慾を描寫する文學者が、必らずしもその人自らの性的放埒の者であるとは限りません。しかし又これに反して常に道を説き理想を高調する哲人が、必らずしも愛慾世界において淡い人達ばかりだとも云い得ません。つまりは本能生活は人生の一つの特殊な半面なのでありまして、その人の固苦しい晝間の勤勞生活と必らずしも兩立しないものでもないのであります。或人曰く「哲人も家庭に居れば子供の如し、女とのみ居れば獸の如し」と。言は奇矯でありますが決して誣言ではありませんまい。

道義を重んじ性的に純潔を守ろうとする無垢の女性は「男とは女にとびかゝる恐れのある危険な獣だ」と心得て、すべからずこれに近接しないよう警戒するのが安全であります。たゞし一度び男にとびかゝられて痛手を受けて了つた婦人は、もう爾後男を恐れるには及びません。そこから人間性の暗い半面が、いかにも人間らしく現實に展開されて行つて、この人生をいろ／＼の悲喜劇にいろどる、思いがけない新聞種や小説種が起つてくるのであります。女は男を知る機會が、偶然か必然か到來いたします迄は、あく迄男を研究しつゝこれを怖がつているのが、女性安全第一の方策なのであります。

す。性教育は斯くの如く教えています。

女性の特性

一般婦人の日常生活は多くは家庭内にばかり暮らして、一見非常に平凡なように考えられます。生涯を通じての心理的生理的變化を追究しますと、決して單純なものではありません。單に家庭の仕事が繁忙だとか閑散だとか云うのではなく、表面から見えない心理作用の上に、或は生理作用の上に、深い激動が絶えず婦人の一生を奥深い所で動揺せしめつゝあるのであります。

少女時代、即ち破瓜期（月經開始期）以前の女性におきましても、もちろん女性特有の性格上の特徴を認めることは出来ませぬけれども、先づ大體男兒とさほどの違いもなく、快活で愛くるしく元氣がよろしいのであります。しかし破瓜期近くなりますと、少女は少年よりも精神上では早熟の傾向が見られます。所謂ませた言動をするようになるのであります。この無邪氣な時期が過ぎて十三四歳となり、破瓜前期（十二三歳）から破瓜期（十四五歳）にはなりますと、女性の心理が一生涯のうちで一番大きな變化を起すのであります。最早單純な子供ではなくなると、そしてそれまでの習慣や又特に發

情の時期にあることをおし隠そうとする婦人特有な心理によりまして、表面上は今迄のように無邪氣そうにふるまおうと努めますけれども、その女性の心理に起つた大轉機は到底蔽いかくすことはできなくなつて參ります。

もちろん今迄の無邪氣さは突然に全く失われて了うのではなく、友人や家族に對しましては如何にも單純に無邪氣に話し合つていますけれども、ひそかに彼女の心と身との中に忍びよつて來た變化は、内部的に彼女を動かしまして、今迄の少女時代に殆ど存しなかつた夢見るようなあの感情や幻想やが、彼女の心をとりにこにいたすのであります。外界の事物に感じやすく又影響せられ易くなります。しかしまだ思想的に判斷力がしつかりして居りませんから、動作態度に自信がなく、他人から些細のことで誘惑せられ易い。唯瞬間的に起つては消える情緒のまゝに、動いて行こうとする輕卒さが屢々あります。しかしそういう誘惑されるような事故を起さないまでも漠然とした心的不安が、何ということなしに、折々起つて參り、急に寂寥の感じにつかれて、わけもなく涙ぐむというような事が多いのであります。色々な小説に讀みふけるのもこの時期であります。しかし誰でも皆そう云う不安動搖を起すものとは限らず、羨けにより又は個性により割合に活潑にすく／＼と成長して行き、

何の蹉跌もなく處女の時代を過して行くものもあります。とは云え、この時代特有の動搖や多感な感情は全く逃れる事はできません。甚だしいものは憂鬱症になつたり、又或はそれと全く反對に笑い易い浮わついた性質になつたり致します。

親友

この時代には何れの女學生も經驗するように、いわゆる「親友」をもちたがります。「親友」を選ばせる一つの理由は、今述べたような處女の心淋しさに對しまして、何となく力強い支持者を得たいと云ふ心持からであります。女性は色々な社會の風習上の關係から公然男性に近づくことは許されていませんし、又兩親や兄弟を相手では、あまりに平生接近しすぎているために、却つて不安な心持を打ち明けることが、おもはゆく感ぜられるのであります。そこで自ずと自分と同じ心持又は同じ境遇をもつている同志の友達や同郷の友達と、互に頼り合つて、この淋しさをお互に慰め合おうとするようになるのであります。而して「親友」をもたない少女は實に淋しい心持でこの時代を過さねばならないのに反し、よき「親友」を持ち得た少女が後日に至つて如何に樂しかつた思い出をこの華やか

な少女時代に殘すことでありましようか。しかしこのいわゆる「親友」なるものはまだ性的意識を完全に備えない少女時代において漠然たる淋しさから起るのであります。決してこれが後に述べるような同性愛の傾向として發展して行くものとは限りません。

化粧虚飾

一體に女性は幼少の頃から自分の身の廻りを飾つて喜ぶような本能があります。四、五歳の子供でも母親が冗談にその顔へ白粉をつけてやつたりしますと、その後母親の化粧をするのを見る度びに、自分にも化粧をしてくれとせがみます。又一度よそ行きの晴着をきせてやりますと、なか／＼それを脱ごうとせず、その後においても度々「きれいな着物をきせてくれ」といつてねだるものであります。こういう化粧を好む本能は年をとるに従つて段々と強くなつて参ります。普通男兒の兄弟と打ち混つて遊んでいる少女は、一向に身なり等に頓着しないものが多いようであります。處女の時代に入りますと、急に外飾に注意をし始めまして、「この着物では外出するのにもつともない」など云つて、一種異様な羞恥心を持ち始めます。一體婦人の羞恥心は、みだりに男子との交渉に入ることを

豫防する意味に於いて、處女時代から特に強く起つてくる自然の反應作用なのであります。そうしてこの羞恥心あるが故に男女の接近が阻害せられ、いわゆる性道徳が保たれ得ますので、非常に風教上結構なことなのであります。今述べた處女期において粗末な服装を恥じるような羞恥心は、時には羞恥以上の度外に發展しまして、自分ばかり不當に美しく裝飾したいという虚飾欲望となつて現われることがあるのであります。時としては無理算段をしたり悪事を働いてまでも、己が身を飾りたいというような欲求にとらわれます。これは必らずしも男性を誘惑しようとする自己意識からではなく、むしろ自分の感ずる色々な弱點、例えばきりやうが勝れて居らぬとか地位が劣つているとかいうような、いわゆるひげめを自覺するがために、却つて誇張的に外飾によつて、これを蔽おうとするのこともとであります。しかも自分と同等の境遇や地位だと思つて居つた知人が、自分よりも一層高價の身装をしていると感じました時には、女性は心中に堪え難い一種の怒りを感じるのであります。斯く他人におくれまい又他人より馬鹿にせられまいとする心理から、非常に世間の流行に氣をとられまして、流行と聞けば眞先にその服装や髪飾を變えなければ氣がすまず、狐の皮の襟巻を持たなければ恥づかしいから、用事があつても外出ができない」というほどに、變態的な羞恥心を感じるようになるもの

のもあるのであります。

愛慾の意識

一生を通じて少女時代ほど羞恥心の甚だしいことはありません。殊に自分から自分に感ずる所の衝動を外部に現わすまいと抑壓してあります場合には、性に關した事柄は一寸意識にのぼせただけでも、すぐに顔を赤くして恥じらい、見知らぬ男性か、又は男性ならずとも見知らぬ人に會つて話すような場合には、何とはなしに羞かしくて殆ど口をきくことすらもできないと云うようなこともあります。とにかくこの時代を通じて一番著しい特徴は、心緒の絶えず動搖していることでありまして、幼少時から處女期へかけて、その意識（即ち後に述べる戀愛感情）は、まだ少女の心理にはつきりと浮んでは來ませんけれど、しかも愛に關する事柄を非常に敏感に理解しまする能力は、少女といえども明かに持つているのであります。よく世間の親は、小學校へ通う頃の年配の少女に對し、まだ愛の事は理解する能力があるまいとの推測から、かなり不用意に女兒の前で愛情のことを口にしたりすることがあります。またこれらの少女がいろ／＼な雑誌や書物や繪畫から愛情のこゝろを見たり讀んだりす

るときは、大人が想像するよりも鋭敏にこれを少女は理解しているものであります。何等の刺戟を與えずにおいては、少女が自發的にその事をさとする様な事は恐らくありません。他から一寸誘導さえしますれば、まだ思春期の年齢に達しない子供でも理解する能力は十分に備えているのであります。

この愛の知識を得る機會が幼少時から豊富にありますれば、それにつれて心理的にも生理的にも、その發達は促進せられるわけであります。都會の娘が田舎の娘よりも情的に早熟であること、同じ都會の中でも下町の者が山の手の教養ある家庭の娘よりも早く春にめざめるといふ事實などは、決して體質や素質の關係のみで考うべきことではなく、その環境や又日常接觸する人々たちが、この娘等に對して幼少の時からおのずとその見聞によつて知識上の教育を施しているが故なのであります。映畫や演劇の如きものも、現代の都會の娘に對しては早期性愛教育機關として甚だ有效なものであることは云ふ迄ありません。漠然たるかゝる環境の教育のみに委ねておいて、都會の娘を早熟者として、却つて誤まれた危懼を感じられる人々は、須らく幼少の頃から、その娘達に對して正しい教育を系統的に施すだけの心掛がなければなりません。

春のめざめ

愛情本能は思春期（十四、五歳）においてめざめます。それは前にも述べた如く、男女ともこの時期においてその内部器官が成熟して、受胎が可能の状態となりますが故に、従つて自然の機能として、こゝに生殖上の行爲が要求せられるようになるためであります。しかし生殖の行われますにはこれに先立つて男女が性行爲を行う可能性がその器官の上に準備されなければなりません。その器官の發育は、必ずしも排卵現象（即ち月經）が起つて來ませんでも、それよりも相當長い以前から既に遂げられていたのであります。男女ともに、その強い羞恥心に打ち勝つて相互に愛の感情を導き出すがためには、先ず始めに何とはなしに、女兒は男兒に接近したくなり、男兒は女兒に接近したく思わせますような欲求が、心理的に双方に芽さして來なければなりません。これを「春のめざめ」と名づけます。

さすれば「春のめざめ」は女性の内部性器が成熟に向う時期よりも少しく早く起るのであります。月經の初潮期は我が國の統計によりますと平均滿十四歳八ヶ月となつていますが、いわゆる春のめざ

めの期はこれに數年先立つのであります。その心理的のめざめが起つてから後、本當の生理機能の完全に起りかける時期迄の間を「思春前期」と名づけ、これも平均十二歳以後とされていますが、下町の娘などでははるかにこの時期が早く參ることが多いのであります。

春のめざめは神経系統の自然の發達にもとづく本能的の現象でありますから、教育の力などで強いてこれを抑壓しようとしましたが、そのまゝその發現を止めることは到底できません。地中から崩えりする草木の芽ばえが、その柔かな双葉を以て、時には堅い岩間をもち破つて出てくるが如くに、春のめざめようとする時期に、しかもその芽ばえが生えかけて來た後には、如何に規則や説教でこれを抑止しようとしても、もう何物を以てしてもこれを抑えることは不可能なのであります。又幾歳の後迄も到底それを抑え通しておけるべきものでもありません。めざめぬ先ならばまだしも、春を知る頃になつてしまつた少年少女に對しまして、父兄や教師が威壓の力のみでこれを抑えようとするのは、笑うべきことの限りであります。あだかも走り出した機關車を素手で停めることの出來ないのと同じであります。唯これに對する處置は、走つている機關車を正しい軌道に導いて、目的の地に間違ひなく進ませるばかりであります。春にめざめた少年少女に對して正しい生理的知識を與え、愛

慾の生物學的の目的を自覺せしめ、又愛慾が倫理並びに社會關係において如何なる意義をもつかを知らしめ、一面には又愛の本能に盲目的に従うことが如何に恐るべき身體的の疾病又は己れの社會的破壊に至らせるものであるかという事實を知らしめ、所謂正しい性教育を施しまして、それで以て愛慾による一生の失策を豫防することを知らしめることに努めなければなりません。

エロチシズム

然るに現代の都會生活におきましては、大人の享樂のために存するかなり不作法ないろ／＼な情事が、何等教養の目的を懸念することなしに、少年少女の前にも展開せられ、映畫や演劇や雜誌新聞の記事や漫畫や、その他數限りない機關におきまして、人々は平然として情愛の事を口や筆に致し、又これを舉動にすることさえ段々と露骨になつて來るようであります。しかもこれはつまり成人の間の單なる享樂のためでありまして、子女の教養上に宜しくないという事は、大人は百も承知していますけれど、印刷や寫眞やいろ／＼便宜な方便が備わつていますために、子女に對する斟酌を失つて了い、大人の享樂の方向は益々現代世相をエロチシズムに墮落せしめつゝあるのであります。これにつきま

しては、又後に述べるつもりではありますが、とにかくこういう成人の喜ぶエロチシズムをそのまま不用意に見せつけられる少年少女たちは、いわば無邪氣なうちに知らず／＼愛の世界における邪道に誘惑をせられつゝあるようなものでありまして、社會の常識として情事に關する羞恥心が段々と減退してくるのはそのためであります。

交際のこと

それで當節では性の書物を公然電車の中でひもといっている令嬢もあり、聲高に人中で猥雑な話を交している青年もあります。斯く性についての羞恥心が世態と共に減退して参りますことによつて、男女の接近は益々容易となり、又その機會も繁くなり、品性上放埒な無恥な態度は、自然の勢いとして何等憚る所なく世態の上に擴がつて行くのであります。しかしそれでも尙處女期においては羞恥本能がなほ力強く残つて居ります。しかし現代男性の羞恥心が減退しますると共に、無恥な男性のために、處女の羞恥心はあらゆる機會にどし／＼と打ちひしがれて行くのであります。一度びこの羞恥心をフットした動機で失つて了つた處女は、もうその次からは今迄強かつた羞恥心を全く打ちすて、しま

い、その青年と同じように無軌道愛に墮して行くのであります。しかも斯ういう少女は他の無垢な少女をもまた自分と同じような無恥な生活に陥れようとして誘惑を致します。昔の家庭のように大切な娘を深窓に閉じこめて社會と接觸せしめないように致しますれば、少女はその羞恥心を破られることなく、いつ迄もおぼこなうぶな、しかも愛情に何等の知識もない状態で、生い育つて行き得るのであります。現代のように少女時代から娘を世間に解放し、讀物や興行物の刺戟に自由に曝らし、又スポーツやその他いろ／＼な會合で親しく若い男性とも接觸する機會を許してやりながら、それでも尙道德だけを固く守らせようとする今の教育家の企ては、可なり迂遠なものと云わなければなりません。唯學校においてのみ監督を嚴重に致しましても、女學生は一日十數時間の自由な校外の時間をもつています。従つて特にこれ等性の事に關する講座を設け、教育の上に相當な努力を致さない限り、少女を世間の公設の性愛教育機關に委ねておきましたのみでは、到底今の固陋な教育家や嚴肅な父兄達が欲するような、無垢な健全な成女を得るといふことは、あたかも濁流中において白布を洗おうと欲するようなものであります。洗おうとして却つて洗う前よりも一層よごれて了う惧れさえもなしとはいしません。

媚 態

、自然的に女子には既に處女期から異性をひきつけようとし、異性に好感を興えようとし、又異性から保護を受けようとする特別な態度や行爲が、おのずから現われて来るものなのであります。それについて第一には處女の媚態であります。これは必らずしも意識的に異性をひきつけようとする意圖からわざとするものではありません。若い女性は何人に對しても愛嬌を示し好感を興えるように自ずとふるまうものであります。はにかむものは却つてそのはにかみの姿態が異性には誘惑的だとさえいわれます。乙女心では決して他人に不快な心持を起させることを欲しません。他人が自分に對して怒つて居り恨んでいるという事を思うと、蔭で聞いたのでさえ堪え難い不快を感じるのであります。そういう場合には何とでもして謝まりたいと思ふほどでありましょう。そして他人から好感を持たれたいと願うのであります。誠に女の心は本能的に弱いものであります。

初 戀

このような弱い女心のうちに、一番最初に接近して参ります若い男子の姿は、唯それを見ただけで非常に頼もしく思うようになるものであります。殊に自分の到底持ち得ない強い力、巧みな技能、優れた智恵等を備えている者に對しましては、唯頼りになるといふ心持だけでなく、それを通り越して、己れの身をも心をも捧げつくして、その人の庇護の下に居りたいといふような心持を、おのずと起させるのであります。この場合にそれを「初戀」と名づけるのであります。

初戀は決して自覺した愛情に基くものではありません。しかし初戀をさづけられた男の態度如何によりましては、それは直ちに愛慾に變じ得る可能性はあるのであります。しかし眞の意味の初戀は唯々乙女の心持を豊富にするだけのものに過ぎないのであります。今まで「親友」にたより、父母兄弟にたより、唯自分の心身のかよわきまゝに、何事に對しても自信を持ち得なかつたがために、初めて接した異性に對して本能的に強い信頼の心を起し、その人に對する夢のような誇張した心持で、口には云われぬ一種のあこがれを感じるようになった心持、それが即ち戀心であります。

戀を知りそめてからは、今まで弱かつた處女の心は、急に頼りのある、未來のある、強いものとなるのであります。この戀心に誘なわれてする處女の言動は、いかに大膽に、又いかに想像に富んだ、

生きがいのあるものとなりますのでしようか、それはたゞ處女自身のみ回想にまかせるべきものでありましょう。

戀する者

初戀の相手となる異性は、處女が接した異性の中で初めて、自分の缺點を蔽うに足るほどの力強い優れた能力を備えていると感じられる男子でさえあればよろしいのです。それ故、あまり多くの異性に接する機會のなかつた處女にあつては、空想的に宗教上の人物や歴史上の人物に初戀をさしづけることもあります。又この處女期には交際の範圍が限られていて非常に見聞が狭いものでありますから、偶然最初に自分の前に現われて來た異性にいきなり戀をすることがあります。例えば自分の兄弟の友人とか、親戚の誰彼とか、日頃出入する教會の信者とか、云わば手近の者の中から選ばれるのであります。無論乙女が世間を遍歴して適當な戀の相手を探し廻る便宜をもつわけもありません。しかし男子の側では比較的交際の範圍も廣く、世間も廣くわたり歩けますから、男子から女子を選ぶ際には、可なりにそこに選擇の餘裕があるのであります。しかし女子にはこれがありません。それで處女によ

つて選ばれました男子の中には、既に戀の道に幾多の經驗をもつて慣れたものも少なくないでしょう。そこで初心な一本氣の處女は、初戀において早くも男子に弄ばれ、早くから異性に對する悪い印象を受け、又その不快な印象から異性全體に對して咀いの心をいだかせられて了う如き、不幸な戀語りも決して今迄に少なくはありませんでした。さりとして初戀は他人に相談して定めるべきものでもなく、いわば運命のくじ引きであります。

その初戀に破れまいとしますならば、處女期において既に戀の眞の意義を理解せしめるだけの知識が與えられなければなりません。愛の教育は春にめざめてから後の事、即ち或行爲や生殖の事に關する知識ばかりを教えるのが能ではありません。生物學的に或意識の眼ざめるに先立つて、また初戀に對する警戒線を張つておかねばなりません。このころのようにエロチシズムの毒氣が都會の凡ての層に濃くたゞよつて居る今日におきましては、殊更にその必要を痛切に感ずるのであります。

戀愛の本義

生活の本來の目的は男女相愛ということであります。この一般に愛と申します感情は人間ばかり

でなく、高等な生物が皆本能的に持つてゐるものでありまして、人間で云えば二人以上の個人が相互に親しみ合い助け合う心の傾向を指して云うのであります。しかし、愛情にもその濃淡や親しむ相互の者の間の夫々の關係によりまして、信愛とか友愛とか戀愛とか或は母性愛とか、ずつと廣い意味では愛國心、博愛心などという／＼の別が擧げられます。その中「友愛」というのは兄弟同胞の間の肉親の愛情を云い、性的の色彩はもつて居りません。戀愛というのは前にも述べました如く、同年配の成年男女相互の間に微妙な感情を欲します意味から、特別の意味で相親しむ愛情をいうのであります。これは元來男女を相近ずけてその愛するものを互に固く結ばしめようという自然の妙機に基きまして、青春の頃になりますと、誰でもおのずから異性に對して心をひかれるようになるのであります。若し一旦特殊の異性と親しんで語るような機會が與えられますと、お互に相手の者の性情をよく理解しようと努めまして、その間に段々と今迄單純であつた親愛の情が、特殊な戀愛へと變化してくるのであります。この戀愛の情の生ずるに至ります迄には、まず異性に對してあこがれの心持がおぼろ氣に現われて來ます。それが段々と發展して強くなり、何とはなしにその人がしたわしくなり、いわゆる思慕の情となるのであります。しかしそれ迄は餘程理性の力が手傳つていて、意識的に

又は無意識的に、その相手の性格なり智能なり地位なりを批判する餘裕をもつてゐるのであります。が、一歩進んで戀愛に入りますと、もう理性の監督をはなれて了います。全く相互の全性格が純感情のためにとらわれて、理性は全く盲目的となつてしまふことさえも決して稀ではありません。無論戀愛の起ります迄には、相互にその相手の性格なり容姿なりの上に自己の全人格を打ち込んでしまふ程、慕わしい長所や優秀點な認め合ふのでありますけれども、しかしその目のつけ所は必ずしも世間の人々の批判と一致するものではありません。即ち一般人から公平に申しますと、何一つ取得のない、少しも愛すべき程の長所を持たないような若者に對して、生命迄もさへ惜まないほどの熱愛を感じることも往々あり得るのであります。

相愛の法則

如何なる宿世の因縁あるものが、斯くも熱烈な戀愛に陥るのでありましようか。これについてオートー、ワイニンゲルは一個の法則を發表しました。氏によりますと理想的の全男性M、理想的の全女性Wを假定します。しかしこの世に今存在している男では決して完全に1なるMを具備するものは一人

もなく、三分の二はM、三分の一はWという如くに、幾分の女性性格を交えているものが甚だ多いので、女でも同様に純粹の1なるWを具えている女性は一人もなく、四分の三はW、四分の一はMという如くに、幾分の男性性格を交えているのが常であり、斯くて人々の性格は千態萬様、その個々により異なることその面の如しという風になつているのであります。而してワイニゲルは甲男と乙女とが熱烈な戀愛に陥るべき條件としまして、甲男のもつM分子と乙女のもつM分子とが、合せて丁度1になり、又乙女のもつW分子と甲男のもつW分子とが亦合せて丁度1になるような時に、お互が意氣相投合して初めて戀愛となるのだと説くのであります。即ち双方のもつ全性格値、即ちその特徴も缺點も引きくるめての全性格のMW値が、相合して始めてMもWも共に完全な値となるような組合せが理想的の戀の相手なのだといふのであります。例えば甲の持たない短所を乙がそれを補うだけに持ち、乙がすぐれていない點において甲がそれを補うだけに優れているというような甲乙兩人がありました場合に、生物自然の本能によつて、双方がしらすしらす相引き合い相慕ひ合つて、その間に熱情を生ずるに至るものであると申しておるのであります。無論世間には絶世とも云うべき美人が案外な醜男と戀愛に陥つたり、又弱々しい體格の持主である優男が非常に體格の偉大な巨大婦人に熱愛を感じ

するといふような例も往々あるのであります。精神的に云つても、夫婦共にすぐれた技能智力をもつてゐる者は、却つて琴瑟相和せないのが多く、智能のすぐれた才子の夫には、むしろ性格の堅固な愚妻がよく和合して行くといふような實例も、世間に少なくはありません。しかし果して戀愛にいつてもこゝろ原則が成り立つものかどうかは甚だ疑わしいのであります。

殊に前に述べました如く、初戀はむしろ自分に接近し得る境遇に在る人々の中から、最も親しみ易い最初の異性に對して偶然向けられる例が多く、又戀愛にしましても、例えば偶然に自分の危急の難を救つてくれた恩人に對して感謝の念から戀愛を感じるに至るとか、恩義を蒙つた主人の子供に對して長い間の親しみから戀愛を生むに至るとか、多少理智的の義理觀念の混合したような例も決して世に稀ではありません。殊に今迄境遇の悪かつたために他人の愛情に飢えていた薄倖な婦人などは、偶然に頼もしさを感じさせるような男に出會いますと、感謝の念が直ちに變じて戀愛になつてしまふ如き實例も決して稀ではありません。要するに戀愛の發生については、その當事者たる男女間の相對的のものでありまして、その因子としては無論年齢や容貌や性格や智能や、その他その人物に固有な身體的精神的の優秀なることが、相互の牽引力の根本をなすものでありましようけれども、又一面に境

遇や機會やその他の偶然的の關係も、亦無視することはできません。即ち一般に分數は分子分母の絶對値によつてその値がきまるのではなく、分母分子の相互的關係によつてきまるのと同じく、戀愛も亦特殊の方式によつて起るものではなくて、その兩人の相互關係に依つておのずからその値の定まるものと考へべきであります。

しかし従前の學者はいろいろと戀愛の法則を研究しまして、趣味の相合致したものが誰でも必ず戀愛に陥るといふことも云えませんが、さてワインゲルの立てた法則も亦無視することもできないと致して居ります。それと共に人間同士の間には又不可思議な理屈ぬきの道楽味があるのであります。これが戀は曲者として發動いたします。例えば女性は自分よりも地位も智力も低い男に對しまして、道樂的の戀愛を感じ易いといわれています。實際上流社會の婦人が自分よりも遙かに地位の低い書生とか、出入の職人とか、自動車運轉手とか云ふ如き者と屢々不義の關係を致し、中には心中や墮落沙汰に至るような例迄も決して乏しくないことは、この事實を裏書きするものであります。これは婦人が従前長い時代の間、しいたげられた生活におい込まれていた反動から、むしろ本能的に自分の優越感を味いつゝ征服的の戀愛をしようという一種の補償的欲求が手傳つてゐるのかも知れませ

ん。従つて長く女尊男卑の風習をつゞけて來た國々では、却つてこれに反する傾向の事實が見られるのであります。

戀愛の心理

とにかく若い似つかわしい男女の間に、清い美しい戀愛が成り立つたと假定致しまして、その戀愛の心理をこゝに解剖して見ましよう。戀愛とは、殊に女性におきましては、愛情と犠牲觀念とを混合しましたものであります。愛人の幸福のために全く個性的慾望を没却しまして、獻身的努力をおしまない状態を申すのであります。戀愛するものの常に眼中に置いてありますことは、たゞその相手の愛情を高め、これを永久に保持して失わないようにすることであり、最初は相手の愛情をゆり起させようがために、相手の注意を自分にひきつけ、自分をなるべく高く評價して貰おうとして、種々の媚態や理智の輝きや努力の誠實を示そうと致しますけれども、一旦その男の愛を得べき手がかりを獲得したと感知しました瞬間から、その相手の愛情を高めようがために、種々な技巧を自ら意識しつゝ行ふのであります。それには相手の性格や趣味をよく理解し、それに迎合するような化

粧、服装、態度をなすことに努め、又その歡心を買おうがために、種々な技能や知識の方面にも渾身の努力を致すのであります。又相手の高められた愛情を尙永く失わないようにするためには、あらゆる苦痛をも忍び、犠牲を拂うのも厭いません。自分の欲望や地位や所有物をすべて犠牲として投げ出して、少しも惜しいと思わない迄の心持になるのであります。しかも男のために全精神界を占有せられ、明け暮れその事ばかりを念頭におきますので、戀愛に陥つた女性は職務に従うこともせず、廣い友人との交際もうちすて、あらゆるものを惜みなく男に與えます。この點は男子の戀愛心理とは大いに異なる所であります。

男性の戀愛におきましては、女性ほど獻身的ではなく、自分の能力で社會的に得た所のものの大部分をさいて、愛する女性のためにさしあげることは決して惜みませんけれども、それはたゞ女性と接觸して居る瞬間だけのことで、明けても暮れてもその女性のことのみを念頭におき、職務をも地位をも棄て、かえりみないと云う如き態度は、本來男性的なものには決してないことであります。若しも戀愛に當りまして、男子であり乍ら女子に獻身的な愛をさしあげるような者があつたとしますれば、それはワイニングルに云わせますれば、むしろ女性的特質のWを多分に持つてゐる男子だと評するであり

ましよう。

女性の戀愛は右の如くに獻身的のものでありますから、男性から發動的に情死を迫られるようなことがありますれば、戀した女性は決してこれを拒むことは致しません。拒んだとすれば、その戀が女性にとつて全幅的でなかつたと云うに歸せられます。それ故處女は始めはたとえに云う「處女の如く」に臆病そのものでありますが、一旦戀愛に陥りますと、却つて男子よりも大膽不敵となり、世間體をも構わず、生命をも棄て、すべてをさしげて男子に頼つて參りますので、却つてこれを迷惑とする男子さえもあるほどであります。この戀愛によつて命までも打ち込んで獻身的になります心持は、結局は、女性が妊娠、分娩、産褥にわたる永い間の苦痛に堪え、時にはそのため生死の境にまでも彷徨せねばならないこともありますし、無事に分娩を果しました後にも、猶愛する人の子を育てるために無限の忍耐を必要とすることを、生物學的に豫測して、先ず盲目的に愛をさしあげる心理が作られたものと考えざるを得ません。現代人の如く段々と生理學を學んで來ますと、愛しつゝもなお妊娠や分娩の苦痛を知り、これを豫じめ厭ひまして、むしろ避妊を欲したり、育兒の苦勞を厭うて生んだ子を他人の養護に委託したり致します。そういう計畫を豫じめ愛に入つた時分から意識してもく

ろんでいる人も少なくありませんが、こういう理智と打算とに勝つた婦人は、眞實に熱烈な戀愛に陥ることは到底できないことのように私共には感ぜられるのであります。

戀愛至上

戀愛の喜びは人類のみのもつ特權であります。動物界にも性愛はありましよう。しかしその雌にも雄にも、その性愛の相手となるべき動物を、自ら好きこのんで選んだり拒絶したりする如きことはありません。人間におきましては、既に精神作用の著しい發達を遂げ、高等な趣味性を有しています。がために、いろ／＼嚴密な條件を冥々の中に考え合せ、相手の才識技能、容姿等その個體的特質について選擇を行い、特に意氣の投合した者の間にのみ、戀愛が成立するのであります。これは人類が社會的生活を営み、多くの人々に接する便宜を有していますこと、言語その他の方法で思想をお互ひに自由に發表し得ることによるものでありまして、即ち戀愛は人間にのみ特有な、精神的な感情の發現なのであります。しかし元來戀愛は外面上美しい精神的のよそおいをこらしているとは申し乍ら、なおその核心は本能的の衝動、即ち異性が互いに相近すこうとする衝動が、思想化したものに過

ぎないのであります。

しかし本能が精神化し思想化していろ／＼變形いたしますことは、生活に餘裕のある階級の人々には、あらゆる方面でその現象が認められるのであります。例えば食欲にしましても、動物ならば何でもそこにおかれたものを喜んで食べますが、人間ではいろ／＼と好き好みを致します。又なまの儘では食べずに、これを料理してたべます。料理法にもいろ／＼な理想化が行われ、通人の間では何々樓の鯛料理でなければ口に通せないとか、御飯はどういう炊き方をしたのでなければ到底食うに堪えないとか、いろ／＼食欲の上に遊戯が行われているのであります。結局本來の榮養の目的の上に必要な榮養價とか、ビタミンとか、原料の新鮮とか云うことは全く離れて、その潤色の方面に於いていろ／＼な理想化が行われるのであります。それと同様に愛慾にも段々餘裕が出来、いつでも相手の得られる便宜がありますために、いつしか趣味化理想化が行なわれて参りまして、上に述べた戀愛や、又いろ／＼な戀愛の變態や、その儀式因習などが加わつて來まして、純眞な愛慾ということから段々と離れて來たのであります。元來性愛は生殖を目的とすること云う迄ありませんが、戀愛の變態のものになりますと、この生殖という目的を離れ、時には全然生殖の可能性のない同性間の戀愛とか、

「マソキズム」「サチズム」というような病的なものさえも生じて來るのであります。

結局は戀愛によるのでなければ結婚の値打がないと云う如き、所謂戀愛至上主義を唱える人が出て來ましたことは、丁度食物の上で、通人がどこその何料理でなければ食えないといひ出したと同じく、極めて狭い趣味の上の遊戯に歸着して了うことであります。戀する人の相手を選択する標準は決して一様ではありません。美貌に戀する人もあり、美聲に戀する人もあり、又肥満した體格に戀する人もあり、勝れた學才に戀する人もあります。それは丁度西洋料理の好きな人もあり、饅飯の好きな人もあると同じで、本能の表現が精神的に興味性によつて左右せられるのであります。この變化性があればこそ、社會萬人がお互ひに衝突することもなく、自由に自分の趣味に合う戀をなし得るわけでありませぬ。時には三角關係だの四角關係だのと、戀する人の間の趣味の衝突が起らないでもありませんが、要するに戀愛は精神的遊戯の一種であり、戀愛至上主義は精神的遊戯の極致たる趣味の一つなのであります。

しかし生殖乃至劣等感情のみを目的として戀する者は、即ち榮養本位實質本位の辨當飯を食べて腹を充たすようなものであります。却つてそこに社會的にも經濟的にも、實利的な所が多いのであり

ます。社會の大多數の人々の結婚は、斯かる實利的因習的な愛の生活の方に重きをおいています。料理の立派な高價なものには却つて榮養價が乏しい如く、本當の熱烈な戀愛に基く結婚生活におきましては、餘りに愛慾本能が精神的にゆがめられましたためか、その夫婦の家庭生活、子供の教育等においては、カロリーの廻り方が少ないような矛盾の結果が見られるものであります。婦人の本來の使命としましては、斯かる遊戯に没頭していませんよりも、むしろ大きな社會的な立場から、理性にめざめた本能的の感情を善導して、これを社會的制約に適合するように、段々美しいものに改善して行くことの方がむしろ必要であると考えます。

嫁入前の危機

既に思春期に達して心理的にも生理的にも結婚生活に入るだけの準備ができ、つまり男が何となく戀しいような心持の出始めた頃の娘にとつて、常識として必要だと思われまする知識を列記して見ましょう。中には前に記した所と重複するものもありましたようけれど。

春のめざめは主として心理的に男性と交際して見たいような漠然たる欲求を以て始まつて來ます。

もつともその以前から月經の初潮はあるにしましても、これはたゞ受胎可能の排卵現象が開始したということを示すのみでありまして、大抵この頃にはまだ性の心理は漠然と男女關係についてのかすかな想像をなし得るほどの程度に止まり、まだその行爲に關する具體的の知識は殆ど得ては居りません。男こいしく思うのも、何となく男が頼りになるような心持がするだけのことで、本當は「親友」や家族の方を頼りにしているのです。たゞ男と交際したらば何か別の世界がそこに開けて來るかのようなあこがれを感じるばかりであります。無論男の醜惡な欲求の何たるかは詳しく知つて居りません。その折の初戀の心理は既に別項に述べておきましたが、その戀心がもう少し年をとつて参りますと、今度は女の方からある欲求を感じてくるようになるのであります。これには映畫、演劇、友人との對談、新聞雜誌の記事等がかなり強い暗示となるらしいのです。性のことは人の本能でありまして、誰からも教わらずとも、或年齢に達しますれば、その神経系の自然の發達によつて、おのずと體得し得るに至るものなのであります。しかし何か少しでも、これを暗示するような外界の示唆がありませんと、年の行かない間でも案外に氣敏くこれを了解し知得して了うものであります。そこで既に男戀しい心持を感じるに至りましたものは、もう既に戀愛に第一步をふみ出したものであります。若しそ

の娘が學校や學校外の交際關係から自由に男性と接近し得、又はそういう事の媒介をするような不良性の友人でももつています時には、容易に男性の遊び相手のお友達を見つけ出すものであります。婦人特異の羞恥心と内氣とから、始めは男性の前で口もきけなかつたような、いわゆる「處女」の如きおぼこ娘でも、一度男の態度が甘いと見てしましますと、かなりに大膽にふるまうように、氣を許すようになるものであり、そこへつけ込んで男性もまたこの娘を完全にわがものにしようと思ひつきます。娘の方も男が自分に敬意なり愛嬌なりと拂つていると見ますと、今の見覚え聞き覚えの好奇心から、男女關係の實際なるものを、事實よりも遙に魅惑的のものであるように幻想を逞しく致します。かつて何々團長と肩書した名刺をふり廻してカフェーで暴行をした少女がりましたが、これは家庭生活の健全性を缺いたことが導因となり、この好奇心の跳梁に身を委ねた不幸な女性なのであります。また或不幸な機會に處女を失つたカフェーの女給その他の人達は、實は始めに意識的に誇張的に媚態嬌態を示して男性を誘惑しようとした結果そなたのであります。斯かる無恥に陥つた女性の一群は「惡の花」といわれる如く、社會の機構をば歪曲して行き、遂には救い難い境遇に沈むに至るものであります。従つて斯かる女性は幸福な結婚生活に入ることは至難のことだといわれて居

ります。普通の女性にあつては決して積極的に斯ういう無恥な態度を示すことは萬々ありません。ここに處女の純粹性が存するのであります。

女性は心のうちでは發動的でありましても、態度の上では表面上あく迄も受動的なものでありますから、一旦過まつて男に虐げられることがありましても、女性はこれに反撥して男性に對しその責任を問うだけの強味をもつて居りません。そのために多くの女性は、一たびあやまちの道をたどるようになりましたならば、その後はその男性に對して全く無抵抗的に誘惑せられ、誘拐せられ、だまされると感知しつゝも強くこれに反抗することが出来なくなつて了うのであります。これは女が理智ににぶいためでもなく、又意志の弱いためでもありません。つまりは女が本能的に純粹であるがために、男性に對して反抗する勇氣の出ないように、素質的に出来上つてゐるからのことです。どんな氣強い又理智に勝つた男まさりの婦人でありましても、夫と許した特定の男の前では、涙と虚言以外、もう何の武器をも用いられなくなつて了うのであります。弱きものよ、その本當の名は「戀を知る女性」であります。

結婚の目的

結婚から家庭へ。それは當然過ぎるほど當然な人間の性生活の第一歩の問題であらねばなりません。結婚の風俗習慣に關しまする事は社會學の問題に屬しますので、こゝには詳しく論じませんが、夫婦生活の上から云つて、結婚とは如何なるものであるかを、まず論じて行きたいと思ひます。

結婚の目的は決して單二なものではありません。

結婚の使命の（第一）は、改めて云うまでもなく、男女がその愛の生活を完全に且つ靜穩に送らうがために、特定の男との間に約束を結び、その生涯の間その愛の生活を、共にその兩人のみで守り合ひ、決して他の男又は女と不純な交渉をもつことなく、その夫婦の間においてのみ本來の目的たる生殖の實を擧げて行こうと期するといふ點にあります。現在の一夫一婦の習俗が生じまするまでには、人類としては幾多の風習上の變遷を経て來たことでありましよう。今日でも未開人の間には、或は多夫一妻、或は一夫多妻、又或は多夫多妻等の習俗を持つてゐるものも稀ではないのであります。少なくとも文明國人にありましては、一夫一妻制を鐵則としてゐるのであります。この一夫一妻制は主

として生れてくる子女において、種の混合を避けるということがその主意なのであります。即ち夫婦間に生れて来た子供が本當にその夫婦間の子供であつて、決して他人の種の混じたものではないといふことを、確實に保證しますためには、徹底的に一夫一妻制が守られねばなりません。そのために夫婦間において性的放肆の行爲を禁止する種々な習俗的制裁が發達をして参りました。即ち姦通、殊に有夫姦の如きものに、殘虐なまでの刑罰を習俗的にも法律的にも科するようになりました事は、この意味によるものであります。

しかも男女が右のような特殊な目的を以て借老同穴の契りを結ぼうとするためには、既に他の男なり女なりと無責任な不純な交渉をもつたことのあるものでは、種の純潔を保證することが出来ずまい。そこでそういう意味から、新たに夫婦生活に入るべき嫁や婿には、全く無垢純潔なものを要求するといふことは、むしろ人間としての本能性とも云ふべき當然のことでありましょう。男子はその性的機能の上から云つて女子の如く受動的ではありませんから、實際上にはその結婚前においても放肆な行爲が或る程度まで看過せられることが屢々ありますけれども、その間に性病等に罹つたようなものがありましたならば、純潔な結婚生活に入るべき資格を失つたものと認めなければなりません。特に

女子におきましては花嫁となるべきものに對し、嚴重な處女性が要求せられますことは、單に男子の好奇心に基づく趣味からと云うばかりでなく、種の混合を避けようという目的から、もつとも大切な點と申さねばなりません。即ち現代の風俗におきましては、女性は結婚生活に入りますまで全く純潔に處女性を保持するといふことが何よりも重く要求せられるのであります。

家族制の習俗

(第二)の結婚の使命は、生理的な生活といふことを離れて、夫婦は社會的に人間生活の一單位をなすものだと思はれる點にあります。殊に從來の我が國のように家族制の習慣のある社會におきましては、夫婦の結婚によつて始めて「一家」が出来、この夫婦を中心として成り立つ「一家」が、即ち社會生活における完全な個々成員の單位とみなされるのであります。無論戸籍上には獨身者でも或は未婚者でも、それで「一家」をなすことは全然認められないではありませんけれども、それはむしろ變則と考へべきものでありましょう。一體男女はその體格においても性質においても、又能力においても、それ／＼異なつた特徴をもつてゐるものでありまして、男女それ／＼單獨では人間としての

凡ての務めを完全に果すことができません。男女が相合して一體同心となり、こゝに「一家」を構成しまする場合において、始めて人間としてのあらゆる能力を發揮することができるのであります。即ち夫は社會に出て政治、經濟、學術、實業、工業その他の國家的生産事業に従事し、妻は内にあつて家事一切を取り賄い、又子供その他の家族を養育し、かくて夫の社會的活動の精力の供給補給の場所として家庭を保持する責任を分つのであります。又社會生活におきましても、女性がそのやわらかい情性をもつて、人と人との間の和合を助け、男子がその強い理性をもつて人と人との權利義務を嚴正を保つて行くことによりまして、社會の秩序が圓滿に保ち得られるのであります。

斯くて夫婦は永久に相協力して一家を經營し、社會的の人間生活を圓滿にして行く上におきまして、重大な責任をもつものなのであります。それ故、夫婦で一家を組織した場合、その夫は一家の代表者となりますが、妻とても亦家政婦や女中とは異なり、立派な一個の人としての立場から、一家の經營上におきまして、夫を助けるといふような、むしろその代りとなつて家政の經營に任じ、夫婦の一方の云うた事、した事に對して、その配偶者はどこまでも社會的にその責任をわかたねばならないのであります。

家庭に於ける修養

結婚の（第三）の使命は、人として夫婦相互に理性を磨き情性を養い、以てお互いにその人格を完成せしめ合つて行くといふ任務にあります。人間の性格、趣味、氣質は、決して青春の頃において健全な發達を遂げて了つたわけのものではなく、又それは一生の間一定不變の固定的のものでもありません。それ故夫婦お互いに配偶者の性格の特質を察知し、お互いの氣質傾向をよくのみ込んで、それ／＼お互いに相和合するように、双方から自分の缺點を補い又は改め、双方の長所を發揮し合つて、兩人相合してこゝに理想的完全な人間性格を作り出す様にお互いに努力をつゞけて行かねばなりません、これを夫婦生活の修養と名付け、この修養あつてこそ、始めて結婚生活に入つた若夫婦が、まだお互いにしつ／＼と性格が合わず、何となくよそ／＼しい間にあつても、お互いに努力をつゞけてそれ／＼の性格を補い合い、本當に楽しい愛の家庭を築き上げるように致します。その間の相互の努力が、即ち夫婦生活の妙味でもあり又生命でもあるのであります。

始めから理解し合つて熱烈な戀愛から入つて來た新夫婦におきましては、却つてこゝろいふ妙味ある

努力が乏しく、遂にはお互いの缺點のみが目について段々堪えられなくなり、夫婦生活が破綻するに至るものもまた多いのでありますが、又一方には、毎日のように夫婦喧嘩をしながら、それでお互いがなつかしく、段々と仲のよい家庭になつて行くというものもあります。つまり夫婦喧嘩の間に段々と双方の缺點が理解せられ、これがよく了解せられ、且修養によつて矯められて行つて、夫婦生活の修養がしらすく行なわれるがためでありましょう。

結婚生活の特殊性

結婚の（第四）の使命は、家族制の行なわれる我國に獨得のものでありましょうけれども、夫婦は一家のあるじとして、その一家一族の中に起るべき一切の人事問題、經濟問題、對社會的問題等凡ての事柄に關しまして、責任を以て處理すべき任務が科せられているといふことであります。即ち夫婦は單に夫婦二人のみの性的生活或は修養生活をするというのみには止まりませんで、その一族全部の者に心を配つて、一族の繁榮を圖る上において特別な名譽と義務とを負わねばならないものであります。

以上の如く結婚生活というものは重大な使命を伴うものでありまして、唯單に愛の生活を營み、それによつて和樂を得るといふだけの意味において男女が結合するのは、これを必らずしも結婚とは申しません。いわゆる内縁の關係、なれ合い、私通、更に高尚な言葉で云いますと、共同生活とか、愛の巢とか、若き燕とか、いわゆる愛人、情人の關係などが即ちこれに當るのであります。斯ういう非徳義な關係の男女に對しては習俗的、法律的にも、何等今述べた（第二）（第三）（第四）の使命が負わされて居りませんから、お互いの性的生活に厭きの來た時には、又簡單に別れて了うことも亦差支えない事なのであります。しかし本當の結婚生活におきましては、單に氣紛れから別れるといふことは許されません。しかし結婚當事者の間には結婚の始めにいろ／＼な結婚の動機を考へることが出來ます。例えば妻の美貌を望み愛の生活を第一位において結婚したもので、妻が年をとつたり病氣をしたりして、その容姿が悪くなると、妻をかえたくなくなるかも知れません。又一家の家政に重きをおいて嫁をさがすものは、器量よりも經濟的能力に重きをおいて結婚するでありましょう。しかし結婚當初の目的と異なつた條件が起つて來たとしましても、正しい夫婦關係はその一方のみの趣味や都合や事情のみで、直ちに離合をはかるべきものではありません。もしそうなりますと社會的單位が頻繁に

移動する事によりまして、社會生活の上に幾多の不便が起つて來るでありましょう。

結婚の儀式

そこで新たに結婚生活に入ろうとする者に對しましては、お互いに嚴肅な心持で長い生涯に亘る堅い誓いを立てさせるようにしなければなりませんし、又そう云う強い覺悟を是非起させなければなりません。そこで結婚には先ず重大な儀禮による式典を擧げることが風俗となつていたのであります。結婚式の風俗は國々によつて異なりまして、一國の中でも地方により、又信奉する宗教により、又地位の相違や貧富の懸隔によりまして、必らずしも一樣ではありません。しかし大體の通則としましては、先ず新夫婦の双方の人物、家庭その他をよく知つてゐるものを媒酌人といひ、その媒酌人の斡旋によりまして、始めて双方の家の間に契約をいたすのであります。これは家と家との契約なのでありますから、本人同志よりもむしろその親や戸主相互間における承諾が必要でありまして、從來の法律はこれを要求していたのであります。今回民法の改正によりまして、成年以上の男女は親の承諾なくとも各自の立場で結婚することを許されることになりました。しかしやはり今後といえども多

くの男女は親その他家族の年長者の世話によつて結婚することが多いでありましょう。それは夫婦間の性的生活ばかりが結婚の目的ではなく、(第二)(第三)(第四)の使命に對する保證を新郎新婦の親たるべき者が相互的に約束するのであります。内縁關係や愛人關係では、媒酌する者はありません、それは單に個人としての男女を紹介すると云うに止まりまして、それ以上の責任は考えられて居らないのであります。

一旦媒酌人が出來ますと、今度は兩家の間に結納その他種々な風習による契約の證が交換せられ、次いで黄道吉日が選ばれまして、結婚式が擧げられるのであります。

この結婚式の主意は、夫婦相互間に個人的に夫婦間の前記四使命に對する個人的契約を嚴肅に決意させる機會なのであります。それにはその約束と堅固ならしめるための證人として、多くは出雲の神や大神宮その他いろ／＼な神々が招き出されます。そして兩方の家に屬するもつとも血縁の近い者が數名これに立ち會ひまして、共に家としての誓いをその神の前において立てるのであります。しかしこれは當今では大分形式的になつて來まして、唯形ちばかりの式に止まるものも少なくないようではあります。實際はなるべくこの意味を徹底いたします爲めに、媒酌人が新郎新婦の覺悟をかた

めさせるよう、演説の一つ位試みた方がよいかと思ひます。結婚式にはいろいろな習俗的な儀禮が伴ひ、本人のかための盃、親族のかための盃などと稱して、いかめしく行いますが、最後には酒宴となつて亂舞に終る如き悪弊も、地方によつてはないでもありません。媒酌人はこの結婚の式典の當日におきまして、少なくとも新夫婦が第一使命たる性的結合に入るべき所までの媒酌をして、それから先きは兩者の覺悟と修養とに末長く待つことに致すのがよろしいと思ひます。而して結婚式だけで、即ち親族の立會いだけで、兩人の覺悟がまだ不確實であると思われまする場合には、兩家の最も親しい交りのある先輩、友人、縁故者等をも招きまして、いわゆる披露の宴を催します。かくて新夫婦は多數の證人の前に立たされ、社會的に重大な責任あることを交々來會者から説き聞かされまして、こゝにその重大使命を感銘するのであります。しかしこれも今日では段々と形式に墮ちて參りました。今では新夫婦をそつちのけにして、唯兩家の虚榮のためにのみ、新夫婦とは何の縁故のないような人々までも多數に招待いたしましたして、たゞ見榮を張るといふような有様になつて來た傾向も、滿更見られないでもありません。これもなるべく本來の目的を自覺して、その悪弊を矯めるように、風俗を導いて行かねばならないことと存じます。

なおその次に新夫婦は一定の届書を戶籍役場に提出しまして、兩者の夫婦關係を國家的に法律的に認めて貰わねばなりません。これがやがて夫婦が一家の外部に對する(第四)の使命を怠つた時の證文になるのであります。

かくて夫婦は永遠の義務的同棲生活に入るのであります。性生活の見地から申しますと、結婚後における夫婦の關係は、その平常における相互の愛の生活の享樂の外に、やがて生れて來るべき子供の扶養、教育並びにこれらの子供の身分上の處置、殊にこれらの子供の將來の結婚等に關する處置の義務までが負わされるのであります。それについては又次々に述べてまいりましょう。

初 夜

婚儀の一部として結婚初夜の風習があります。それは結婚式を擧げた當夜、新郎と新婦と仲人立會いの上、いわゆる床入の盃をすませましてから、始めて性生活に入るのであります。これを以て仲人の役目がすんだことになるのであります。或外國の風習ではこの初夜において新婦が完全な處女性を有していたことをたしかめることも仲人の役目となつていまして、萬一その際處女性が疑われるよ

うなことがありますと、折角の婚約も破棄せられるに至るほどの不幸さえあるという事でもあります。しかしこの頃ではこんな機微に入つたことは儀式から除かれて了い、仲人は新郎新婦を式場から新宅へ送り込み、又は新婚旅行の汽車の旅に送り出してしまえますれば、それから先きの事は全く新郎新婦の自治に委せてしまうのであります。

この初夜の試みは、時として十分の知識を有して居らない學校出の若い女性や、深窓のお嬢さんなどにとりましては、非常な驚愕を興える大事件となることも往々ありまして、新夫に對して「失禮千萬」だと怒つて實家へ即刻憤然として歸つて了つた花嫁もありません。又結婚式は擧げたものの非常な恐怖、心痛又は羞恥のために、少しも婚儀が楽しい嬉しいものとならず、一夜を泣いて明したというようなものもあります。又新郎の方でも新婦の方でも、双方に知識の缺けているために、初夜の床盃を仲人のいうまゝに致しましたも、さてそれから兩人で何をなすべきか途方にくれまして、そのまゝ背中合せに眠つてしまつたというようなものもあります。これはまことに當代には珍らしい話であります。また一時結婚解消事件として世間話に上つた出來事のように、新郎も新婦もあまりにその知識があり過ぎていて、初夜に新郎の性病の既往歴のあつた告白に憤慨して、堅めの床をけとば

して實家へ歸り、即時その結婚の取消手續をさせたというような、理智に勝つた花嫁の實例もあるのがあります。

初夜の精神的衝撃から「ヒステリー」を起した女性、初夜のことから特殊な痙攣症を起してとんだ醫者騒ぎをした女性、どうしても初夜の契りを肯んじなかつた女性等、いろ／＼醫師に訴えられる女性の性知識の不足の實例を私共は経験いたして居ります。しかし女性として、初夜から物慣れていたのではこれも困りものです。衝撃をうける位、純潔無垢なのはむしろ誠に結構なことであります。しかしそれによつて神経病を起すほど無智無用意なことも亦甚だ困ります。両親が嫁入前に娘にそれだけの性教育を施しておくのが深切な處置でもありません。さもなくば一つの性教育の教材としてそれを豫め豫期させるだけの知識を興えておかねばならないと思ふのであります。

新婚の神祕

新郎又は新婦が再婚者に等しいような不純な戀愛の経験があつたものならばいざ知らず、本當の處女の初めての嫁入でありますならば、何等性行爲の経験がありませんのですから、始めからそれが快

樂となる筈はありません。しかし新婚後の數日間は男女の物珍らしさと愛情の新鮮さから、男女はとかく時として性の享樂にあまりにふけり過ぎて心身の疲瀆をかす如き危険もまた考えられるのであります。この意味から云いますと、あまり長時日に亘る蜜月旅行は却つて有害であるから、むしろ抑制せしめる方がよいという人さえもあるのであります。しかし斯く性生活を反復している間に女性はいつしか本當の性享樂を體得する機會を得るのであります。しかし新郎の方に神經衰弱があつたりして、時間的に行爲が合致しない時には、夫婦生活が數年間にも亘つてい乍ら（時として既に子供まで設けてい乍らも尙）、女性が本當の性享樂を味うに至らない例も屢々あるのであります。それが私共醫師の許へ自分から「不感症というのがこれではないか」と云つて相談に來れることがあるのであります。しかしよく診察問診して見ますと、それは夫たる男の方にその責を歸せねばならないことがあるのであります。男の方で女性をよく了解していないがために、女性が享樂を體験する機會が得られなかつたというに歸せられるのであります。これは受胎の上には大して差支えはないもので、こうした冷やかな婦人でも尙受胎妊娠することが少なくありません。初夜の事を離れて一般に情事にうとい不感症につきましては又後に述べましょう。

妻の任務

本書の目的から云いまして、先ず第一に夫婦生活における妻の義務から述べて参りましょう。その第一義は、風俗上から生じました貞操の義務がこれであります。元來處女という言葉は前にも述べました如く、處女という言葉と同じように「まだ主人を持たない娘」という意味であります。即ち自分の一生を義務づけるような特殊な關係を、まだ特定の男子との間に約束したことのない娘という意味なのであります。決して男子との性的關係のないことをのみ指して云うのではありません。だから狭い意味から申しますれば、既に不特定の男子との間に交渉がありましたも、未婚のものならば尙處女と云い得るかも知れません。しかしそれは理屈でありまして、前章に述べました如く夫婦間におきましては、原則的に種の混合を忌み嫌うものでありますから、結婚によつて結合した夫婦間においては、男女とも今迄純潔で、結婚により始めて愛の結合を経験するというのが、むしろ必要條件なのであります。殊に女子にあつては受身でありますから、結婚前に他の男子と愛の交渉が少しでもあつたということは、たとえ受胎に至らないまでも、決してこれを、何でもないとして看過することは

できませんのです。このことは個人的のみならず、社会的にもそう考えられているのであります。まして一旦結婚して嫁となり妻となつた後におきましては、嚴重に愛の生活においてその夫一人が守られねばなりません。夫以外の男性との交渉は、たとえ種の混合が不可能な場合にあるとしても、精神的に許されないことであります。これをひろく貞操と名づけています。

友愛と戀愛

志を同じくする者が相親しみ相協力して共に世の務めを全うし且世の楽しみを分とうとするのが友情であり友愛でありまして、そこには性慾的の欲求は少しも交つておりません。兄弟姉妹の間の親しみがこの友愛の最も典型的な例であります。これに對して年齢相近い男女の間では、世間に對する務めといふことを無視して、たゞお互いの間だけ親愛して相共に性的の精神的身體的の欲求を充たそうとするためにお互いに相近さこうとする自然の傾向があるのであります。これを性愛又は戀愛といふ言葉で呼んで居るのであります。男女の間にも何か趣味や事業の上で相共に力を分ち、事を一緒に致そうという動機から相近さく機會も多いのであります。男女が親しむときは、年齢等に特に

差のない限りおのずからそこに本能的に性愛がきざして參るのが例でありまして、眞の同胞等でない限りは、中々男女間に純な友愛のみで終始するということはないのであります。始めは男女お互いに尊敬しお互いの特質を理解し合つて、純眞な友愛を感じることもあります。ところが、その敬意や親しみはいつしか本能的に性愛に變つて行くのが通例でありまして、恰も榮養のための食事がいつしかうまいます。いとつて味覺の樂しみ食いになつて了うのと同じであります。従つて人間性としては少なくとも同年輩の男女の間には眞の意味の友愛というものは、始めの間だけのことで、友愛が深くなればいつしかそれは本能的に性愛の本能に移つて行つてしまふものであります。そして性愛でありながらお互いにそれが純潔な友愛であると考えつゝ相親しんでいる時こそ、本當にお互いの間に協力して事を進めて行く底力というものが惜しみなく發揮せられる時なのであります。即ちお互いが本能に驅られて知らず／＼満身の力を非自覺的にさ／＼げ合うからであります。同じ協力でも利害を打算して力を出し合うのは株式會社の經營のようなもので、一寸したはずみで仲の破れることもあります。性愛による協力は全く理性的の計畫を超越したものであり、惜しみなく力を出し合つてお互いが一體として生きて行こうという自然の努力のうちにその戀愛生活の樂しみが湧いて來るものなのであります。

眞の友愛は理智的におのずと流れ出すものでありまして、長くつきあうほどその味が深くもなり結合が強くなりません。竹馬の友はよしや長く別れていまして、會えばいつでもその深い強い友愛が保たれていることをめい／＼に自覺致します。趣味上の友達でも友愛の情は一度や二度の會合からではそう強くはなりません。もつとも長年名を知り合い又は書いたものや他人の評判等で、既に未見の時から親しみをもち合っていた人々の間では、一見舊知の如しというような感情もわいてくることもありましょうが、これは文人雅客などのような精神的交渉の廣く且深い人達の間に限ります。さもなくば中に立つ人の紹介などでお互いが短時日の間に深く知り合う機縁を持つた人達に限ることあります。これに對して戀愛は、俗に云う垣間見という如き些細な機會から今迄未知であつた男女の間にも忽然とその情の起ることがあります。それは性愛は精神的交渉によるよりも、むしろ顔貌や形體や容姿や服装や又物腰や談話のような外見的なものから、本能的に誘發されることが甚だ多いからであります。この一寸した機會の性愛的の接近が、段々長くつき合うにつれてお互いの精神的的特質をよく理解し敬慕するようになって、益々戀愛の情の強くなつて行くのは、つまりは戀愛に友愛が加わつたものでありまして、最も高尚な戀愛の形なのであります。夫婦間の愛情の如きは長い間の同棲協

力の生活の間におのずとお互いのすぐれた精神的特質を理解し尊敬し合うようになって、いわゆる友愛が益々深くなつて来て、そこで始めて永遠に離れられない固い結合が出来、偕老同穴の契りが成り立つに至るのであります。單なる戀愛ではこの相互の精神的の敬い合う所まで参りませんが、たゞ相共に自分たちの生活のみを楽しむという階段にいつ迄も止まつてゐるか、さもないと友愛に移り行くことが出来ないで戀愛の破綻が間もなく起つて了うのであります。

戀愛には理智的作用が基本となつていませんから、戀愛する者同志の間には深い責任感もなく、戀愛をつゞけなければならぬという努力もありません。これが結婚と違ふ所であります。感情に飽くか又は別の感情が交つてくれば、始めの戀愛の情はいつしかさめたり變つたり、他へ移つたり致します。友愛にも變動はありますが、それは決して一時的の浅い感情によるものではありません。一旦理解し合つた友情の間では、からかわれても侮辱せられても損害を與えられても、それは凡て笑つて過されるべきものであつて、決してそれを根にして感情の傷けられる筈はないのであります。侮辱を受けたから今日限り絶交だなどと云うのは、その人達の間には友愛すら成り立っていないかつた證據で、單なるつきあい、面識の間柄に過ぎなかつたものであります。戀愛も性慾のみによりますと、丁度このよう

な通り一邊のおつきあいか、遊女との交りのような浅薄なものになつて了います。そういうのは戀愛とは名づけられません。一寸したはずみに別れて全く忘れあい又憎みあうに至るものであります。しかしくらは仲がよくてもお互いの人格が相敬し合うのに値しないような人々同志の戀愛は、決して時と共に深入りして行くというふうなことはなく、いつでも一寸した感情のひよから離別の結果に至ることも少なくありません。それはもと性愛という生理的本能が、兩者をつなぐ最も力強い唯一のきづなであつたため、精神的の敬愛による結合が甚だ弱かつたのによるのであります。眞剣に戀愛を考ふる人は、いつも性慾を乗りこえた相互人格の敬愛という所まで進むだけの「戀愛の努力」がなければなりません。戀愛の域を通りこして早く晴れて夫婦になりたい。そして一生に亘つてお互いの人格を理解し、且助け合つて精神的に向上して行きたい。そう考えて永久の同棲生活を望むのが、即ち戀愛の向上であり本當の戀愛の完成であります。お互いの愛情のつゞく間だけを楽しんで、飽いたら別れようというような自然性愛的な生活では、少しも相互の精神的の向上努力がなく、お互の自然のままの感情の成り行きまかせてでありまして、これは本當の戀愛でもなく、人生の意義ある生活でもなく、たゞ性慾の遊戯に過ぎません。私共は戀愛は眞の友愛の情と結びついて始めて人生の本當の快樂

ともなり、お互の人格の向上ともなり、そこに人生の意義が味わわれるものだと考えて居ります。

浮薄な戀愛をいやしますのは、それが意義ある結合にならないからであります。痴情の果てなどと評せられて、やがて兩人とも悲しい腹立たしい結末に終ることが多い。それは戀愛した者同志の間に友愛と敬意を深めようという努力が缺けているからであり、それでは戀愛によつて新らしい生活を築いて行くという熱意をもつていないものであつて、單なる遊戯か冗談に外なりません。それも不眞面目な生活を送る人には一時の慰みとして差支えないことではありましようが、それならばそれで屋臺店でつまみぐいをするような軽い氣分ですべきことで、少なくともこちらの遊戯氣分によつて相手の純情をもてあそぶようなことは避けねばなりません。お互が承知の上の遊戯でなければなりません。そうすればいわゆる痴情の果ての悲劇などは起る筈がないからであります。

家族は一家という考えから理想に生き理想に結び合つているのであります。従つて理性が主體となり、お互いの感情はむしろ理性に引きずられて、情愛に溺れることはありません。同胞の間にはたとい男女間でも戀愛は起らず、純友愛のみで助け合うのであります。同胞間に性愛などがあつたら、それは理智の低い、生活の理想を持たない人のする邪行であります。然るに親子の間、特に母と子との

間には廣義の性愛の情が力強く存しています。これは男女間の戀愛とは違いますが、むしろ戀愛よりも強い力をもつて、しかも理想と結びついた特別の愛情なのでありまして、自分の生命をかけて子をかばうのであります。しかしこれも元々理智力の低い母などにおいては、純情のみに走つて、屢々戀愛と同様に、理智を忘れた盲愛に陥り、我が子を知らず／＼にそこなうに至る如き例も少なくありません。現代の少年の身體の練成を缺いて病弱なもの、性格が弱くて意志の乏しいもの、凡て母の無智な盲愛から子をかばい過ぎた結果でありまして、賢母といわれる人は十分に理智を働かせて子を愛した人のことでもあります。この母性愛も亦戀愛と同じく純感情的な本能によるものでありまして、やはり理智の指導を必要と致します。情が自然だからと云つて放任しておきますと、病弱兒や不良兒を作り出して由々しいことになります。いずれにせよ理智の指導を全然缺いた感情のみの力では。モーターのみ動いて舵のない自動車のように、先きへ走るだけで、正しい方向がとれませんから、いづれ障りにつかつて破壊するより外に運命はありません。人間の愛が動物の愛と異なつて、意義をもつという事は、つまり人間獨得の理智の力がその本能的生理的の愛情を指導して行動に目的を持たしめるといふ點を云うのであります。その最も進んだ愛の形がつまり友愛なのであります。

友愛は個人相互間の純眞な愛情でありまして、己れの勞力、損失、苦痛をも凡てさしげて、至高の目的への友人との協力の爲めに渾身の誠をつくすことの謂いでありまして、人間の社會的生活の間のみ見られる美しい精神の力であります。これが擴張されて一般の人類に愛が及んで参りますと、博愛となり人類愛となり、やがて神の愛にまで向上するのでありまして、宗教にいう神の愛はつまり人類全體を愛の對象とする友愛でありまして、至高至純、これにまさる理想はありません。愛情にも亦かくの如く戀愛から出發して幾多の階段的の發達があるのであります。

貞操

貞操は男尊女卑の社會的習慣から、男子が女子を専有するという觀念により、女子に強いて課せられるようになった義務でありまして、即ち女子を束縛する所の不公平な習慣だと論ずる人があるほどであります。又一家において男子が主人となり、その妻の生活を保證しこれを安全な庇護の下におきますがために、男子はその代償として女子に貞操を強いて求める権利がある、即ち貞操を破る女子はその夫に對する精神的並びに物質的の義務を怠り、結婚の誓約を破るものであるから、その夫によつ

て如何なる處罰を受くとも、やむを得ないという如くに論ずる人もあるのであります。しかし斯く單に權利義務的又は代償的に貞操を解釋するとはしましたらば、若しも夫に不身持があり、夫が妻に對する義務を怠りました場合には、妻は必らずしも貞操を持する必要はないという論議も成り立つてありましよう。實際斯かる論據から女性をその虐げられた貞操義務から解放しようという叫びの起つたこともありました。しかし貞操は實は生物學的に云つて、女性に附隨する特殊のもので、女性に本來具有せられている所の一心理作用であると私共は信じています。それは必らずしも社會的に交換條件として起つて來た風俗だとばかり云うことはできません。夫婦には生物的原則として生殖の任務があります。子を持つことを欲するのであります。子を欲します以上は、その子に對する父母双方の義務を平等にしてその愛情を同一にしなければなりません。そのためにはその子供が明かにその父の子であるという事をその父に認知せしめなければなりません。その手段としては、妻はどうしても自發的にいわゆる貞操の觀念をもたなければ、己れの生んだ子に對する家庭的の愛情を自然に温かにするということは不可能のことになるのであります。斯く考えて参りますれば貞操觀念は子を欲する妻として、又母として、生物學的にも當然持たなければならぬ觀念なのであります。必らずしも

社會的の風習から生じた代償的の義務と考えて了うことはできません。即ちその生殖機能の特異性に附隨した特殊自發的の本能なのであります。

それ故單に愛の結合を欲しても、子を生むことを欲しない婦人、或はその生殖機能の缺陷から全然子を持つ可能性のない婦人、或は強いて子を持つまいとして種々の手段を講ずる婦人等の間におきましては、本能的に既に貞操觀念を發すべき機縁が稀薄になるのを免れません。それ故男性との直接交渉をもちながらも子をもつことを欲しない賣笑婦、或はこれに類する婦人にありましては、貞操觀念のないものがむしろ當然なのであります。しかしこれは道德的に貞操觀念をみずから意識しつゝ無視するものではありませんで、本能的に哀れな習慣に基いて貞操觀念を發生しないものなのであります。それ故賣笑を業とした婦人、或はさほど極端でなくとも自由な男女交際により自由な愛の生活を送つて、少しも本當の家庭に對する憧憬をもつて居らない婦人たちにとりましては、結婚しても本能的に貞操觀念をもつことが出來ないということは、その心理の上から然るべきことなのであります。必らずしもそれは道義心の廢頹のみには限らないことであります。

産兒制限の心理

斯ういう貞操本能を始めから強く持つて居らない婦人、即ちワイニゲルのいわゆる娼婦型の性格の婦人が、結婚生活に入りましたような際には、妻としての第一使命たる愛の生活を享受する事にのみ注意を拂うのでありまして、しかも荷厄介になるべき子供を生むことを欲しないのも當然と思われるのであります。戀愛結婚による若い夫婦とか、又は遊蕩な男の享樂意識によつて身分の卑しい性業婦人が正妻に引き上げられたというような場合に、子を生むまいとの欲望を持つてゐるものが多いことを屢々見るのであります。子を欲しない傾向に伴つて近時問題となつてゐる避妊乃至産兒制限（受胎調節）の如きことが始めて意識に上つて來るのであります。元來社會問題として産兒制限が論ぜられるに至りました経路は、主として夫婦間にあまりに子供が多過ぎるときには、その一家の經濟の上に負擔を増して参りまして、夫婦の生活が極度に壓迫せられるようになるのみならず、その子女の教育の上にも又好もしくない影響が起つて参り、ひいてはそれが貧窮や犯罪や疾病やの發生を促がし、重大な社會問題ともなる恐れがあるという懸念から、斯ういう多産の夫婦の間に自發的人爲的に産兒數

の制限を行う方が有利だろうという意味におきまして、比較的安全簡易な避妊の方法が宣傳せられるに至つたわけであります。避妊が醫學的に無害に且簡單に行われる方法がまだ知られなかつた時代には、或は墮胎手術により、或は生れた子供の殺害により、いろ／＼慘酷な方法によりまして、この社會經濟問題が調節せられつゝあつたのであります。それに比べましては、現今の醫學的立場から行われる避妊、産兒制限乃至産兒調節の方法は、受胎を防止するのでありますから、極めて簡單で且有效であり、且少しも道義的良心に觸れることのない方法だと云われて居るのであります。純醫學的に申しますれば、悪い病氣の遺傳素因をもつてゐる夫婦の間に、不良又は病的の素質を先天性にもつてゐる子を生むことを避けるという目的から、又は母親が骨盤狹窄その他妊娠や分娩を危険とする種々な障礙をもつてゐます場合に、その萬一の危険を避けるという目的から、性行爲に當つて受胎を防ぐような用意をする方法を教えますことは、醫學上正しい合理的の處置だと認められてゐるのであります。しかし現在實際世間において、避妊方法の知識を有し且これを實行しつゝありますものは、斯ういう醫學上から避妊を必要とする人々よりも、むしろ愛の享樂を長く続けようと欲し、苦しい妊娠分娩を厭い、又うるさい子供を育て、行くことは却つて夫婦間の享樂を妨げるものだとして、享樂はし

でも生殖は避けようと考えている人々、つまり一般に廣く貞操觀念を重んじない人々の間に多く行われていたのであります。殊に上中流、知識階級等、避妊を經濟上必要としない人々の間に、却つて避妊が多く行われ、そのためには一層道德觀念が減退して行くという傾向が見られるのであります。文明先進國ではそのために國內の人口増加率が減じて行くようになったという事は、むしろ甚だ遺憾のことといわなければなりません。既に數名のよき子供をもつてゐる家庭で、經濟や教育をおもんばかる立場から、避妊を志すということは、あなたが咎めるべきことがらではないであります。ところが、まだ一人も子供のない家庭、しかも相當に教養あり資力のある家庭におきまして、なお一時の享樂又は偷安の心持から避妊的生活をつゞけて行くという如きことは、むしろ意味のない事でありまして、しかも後日に悔を残すことと思われれます。

社會道德と受胎制限

妊娠を厭うものは、妊娠の原因となる行爲を避けることが、最も完全な避妊の方法であるということとは云う迄もありません。絶対に避け得ないとしても、女性において排卵の時期即ち卵子が卵巢

から排出され、その卵子が輸卵管から子宮腔内を通つて體外へ排出されて了うまでの時期の間、受胎行爲を避けるという事も合理的の方法の一つであります。然るにこの受胎の可能性をもつてゐる時期、並びにその可能性の全くない時期を、實際上女性の身體に就いて檢知する方法は存在しません。専門醫家の統計的觀察の結果から推論致しますと、受胎可能の時期は、次期月經開始日の十九日前より十二日前に至る一週間に相當するとせられ、この期間だけ受胎行爲を避けますれば、その他の期間においては受胎の可能性は全くないと云われてゐます。しかしこれには幾多の例外もあり、又次期月經開始日が必ずしも確定的に豫知されるものでもありませんから、絶対安全境を見出すには相當困難を感じるのであります。しかも最近の學說では絶対安全なのは月經終了後僅か十日間位であつて次期月經の前はむしろ安全でないとの説もあるのであります。

受胎行爲を行ひつゝしかも最も安全に避妊する方法があるかと申しますと、その原理は第一には腔と子宮口との間を遮断するのが最も安全な方法であります。第二には精子が絶対に射入されないようにする方法であります。第三には腔内を完全に凡て洗い去つてしまう方法であります。第四には精子が子宮口に入らない前に藥物等の作用によつて、完全に受胎の能力のない状態にしてしまふとい

う方法であります。

その方法の詳細を説くことはこゝには省略いたしますが、常識として知っておくべきことだけを簡略に述べておきましょう。第一の子宮口と腔内腔とを遮断する目的で現在行われております方法は、ゴム製の子宮キャップ、ペッサリー、子宮頸管ピンなどを用いますこと、主として女性の側においてこれを扱うのであります。しかしゴム製品は時として破れていて目的を果さないこともあり、ピンは扱い方が悪いと子宮頸管粘膜に障害を與えることもあるのであります。なお注意すべきことはペッサリーを用いまして事後二十時間以内に腔内を洗滌してから後にこれを撤去しなければなりません。もし餘り早く洗滌もしないでペッサリーをとり去りますと、まだ精子が腔内に残つていてこれがうっかり受胎せしめることも往々あるのであります。第二の精子の射入をさせないという方法は、男子側でゴム製コンドム又は有機性の魚類の浮囊又は獸類の腸壁等から作られる薄膜等を用いる方法であります。これも時としてその膜が偶然に破綻することもあり得ますので絶対安全とは申せません。第三の洗滌法というのは特別な洗滌器具を用い、微温湯又は硼酸溶液などで丁寧に腔内を洗うのであります、その器具などはいろいろ便利なのが作られて賣り出されて居りますが、これは事

後直ちに行わなければ安全とは申せません。時経てから行つたのではその間に受胎してう可能性がないではありません。

第四の殺精方法には二法あります。甲は精製海綿の適度の大きさのものを用い、これにキニーネ劑や過酸化水素水などをしみ込ませて腔内深く挿入しておき、射出物をこの海綿内に吸収させて無力にして下さい、後にこれを取り出して洗ひ去る方法であります。乙は硼酸その他の藥品を含む脂製座藥又はその他の藥劑を豫め腔内に入れて體温によつて溶解させて、廣くその藥品を腔内に貯えておきますと、射入された精子を凡て殺して了うのであります、藥劑が行き渡つて居りませんと、往々目的を達しないことがあるのであります。こゝにいふ藥品といはしまして世上にいろいろのものが賣り出されております。即ち性病豫防の意味で性病病源體を殺菌する作用のある藥品は、大抵同時に殺精の效目もあるのでありますから、これを避妊に轉用することができるのであります。

その他種々醫學的の避妊方法は他にもありますけれども、右の原理だけ述べて、その實際の方法はこゝには省略いたしておきます。しかしこれらの本來の避妊法の正しい應用の範圍は、前に述べた特殊の遺傳的疾患有するもの、性病等感染の危険ある病をもつているもの等の場合に限り、醫師より

患者に忠告して施行せしむべきものでありまして、單に妊娠、分娩の苦惱を避けようがために避妊を企てる如きは、生物本來の使命から申しまして、又社會的道德の上から云いまして、決して廣くすゝめるべきことではないと思つてあります。従つて私共は避妊の實際的方法を指導しますことは醫師に委せまして、これは避妊の醫學的適應症あるものに對してのみ行うべきでありまして、一般通俗的にこれを宣傳しますことは、却つて種々な間違ひを起し弊害を伴うものではないかと考へてゐるのであります。

月經の生理

月經に關する生理的事柄を述べましょう。月經は婦人におきまして、その少女期から中年期の終りまで約三十年間に亘りまして、毎月々々、婦人の身體、精神並びに種々の生活現象を支配する重大な出來事であります。然るにも拘わらず、世間の多くの婦人は案外この月經發生の生理について無智な人が多く、むしろ無關心でいる人さえも決して少なくありません。前にも述べました如く、月經は婦人の内部性器が發育して卵巢から排卵現象が起ると同時に始まつて來ますもので、即ち昔から月經

の發現は即ち婦人の生殖能力を得たことの目標であるとせられ、これを以て女が一人前になつた證據と看做されて居りました。しかし多くの婦人では、月經をたゞとにかくにあるものと考へ、或は悪い血が下りるのだというような漠然たる考へで安心し、少しもこの月經時の衛生、或は月經と妊娠との關係等に就いての知識をもつておらない人が少なくないように見受けられます。

先ず月經は何によつて起るのでしようか。生半可の人は月經と排卵と密接な關係があつて、即ち排卵と同時に月經が起るのだから、月經の直後に受胎が起るといふように信じている者もあります。しかし事實はそうではなく、排卵が起りますと、その卵子を弾き出した濾泡のあとへ黃體なるものが發生し、この黃體の内分泌作用によつて排卵後數日經てから子宮腔の粘膜炎が段々に肥厚して參り、そこに多量の血液が灌注し、受精した胚子はその壁に固着して子宮内發育を遂げるために胎盤を作り出す準備の變化が起つて來るのであります。然るに、若しも排出せられた卵子が受胎する機會なしに子宮腔外に出て了いますと、折角卵子の受精を豫想して準備をととのえた粘膜炎は不要なものとなつて了います。そこで粘膜炎に増生した血管は破裂しましてちぎれて了い、粘膜炎自身は段々と退行し且剝離いたしまして、子宮壁からの出血と共に一緒に體外に排出せられて了うのであります。これが即ち

月經の現象なのであります。だから月經の起る頃には、既に卵子は子宮腔内には存在して居りません。排卵から月經開始までは凡そ十九日という計算であります。排出した卵子が輸卵管を通り子宮腔内を通過して排外せられるまでには凡そ一週間を要するものであります。この期間が即ち受胎の可能性をもつ時期なのであります。

それ故に月經によつて流出する血液は多量の粘液を交え、且つ子宮壁から剝落した粘膜組織をも交えています。その特徴としては空氣中へ出ても凝固しないことでもあります。月經は凡そ二十五日乃至三十五日の間隔を以て反復して起つて來るものであります。平均は二十八日目とされています。しかし月經は種々な神経作用、精神作用によつて影響せられるもので、心痛、苦慮、身心過勞等の原因によつて、或は遅れたり或は早くなつたり、種々な不順を來することが多いものであります。しかも月經は妊娠並びに授乳の期間中は一時閉止するものであります。普通には月經の停止を以つて、妊娠の第一に氣付く徴候とされています。かく妊娠と共に月經の停止しますのは、妊娠すればはや排卵現象も一時中止し、又従つて黄體の發生もなくなりますから、そのためにその内分泌も一時停止せられ、子宮粘膜の肥厚も起らず、又一方に子宮粘膜には既に胎盤を生じつゝありますので、新らしく粘

膜を肥厚させる必要もなくなります。従つて妊娠の終るまで月經現象は起らなくなるのであります。分娩の終ると共に又間もなく排卵現象が始まります。しかし授乳中は引きつゞき月經現象は起らないことが多いのであります。この期間といえども受胎する可能性はあるのであります。それ故授乳中には月經が起らないから受胎することがないと考えるのは誤りであります。俗に年兒と申しますのは、大抵授乳中まだ月經の起らない間に受胎したものであります。

月經症狀

月經中は黄體の内分泌の影響によりまして、全身の神経系統が過敏の状態となり、一時的にヒステリーのよ様な感情亢進の精神状態を起す人も稀ではありません。又月經の始まる前に當つて下腹部の疼痛とか、或は頭痛その他の症狀を起す人もまた稀ではありません。又月經期に限つて癲癇の發作を起すというような神経の病的状態をひき起すものも亦少なくないであります。従つて多くの婦人中には月經期中は身體及び精神のいろ／＼な方面に普通の時とは異なつた病的の症狀を示し、この期間中は他人と應接することもいやがり、亦勞作をすることも出來ないよ様な状態になつて、臥褥してしま

人も少なくないのであります。實際上婦人の精神状態はこの期に異常を呈し、いろ／＼外界の刺戟に對しまして精神の動搖を起し易くなりますので、従つてこの期には些細の動機から犯罪に陥り、殊に萬引などは月經中に我しらす意識の障礙中に行われることが多いと云われています。又婦人の自殺するものもその月經期に當るものが甚だ多いといふことは、以前からよく知られることであります。従つて神經質の素質のある人はなるべく月經期においてはその心身を安靜にし、外出や集會へ出て強い刺戟にさらされないよう、特に注意する事が肝要であります。

月經に関する迷信

昔の人は月經期中の婦人を「けがれたもの」として、丁度癩病患者か何かのように、一時別室又は別棟に住わせて、その間は家族も接近もしないで、ほうつておく習慣がありました。即ちそのけがれた期間の婦人は悪魔につかれたようなもので、その婦人に接近する者も皆けがれのそば杖を受けると考えられたものであります。しかし科學知識の進んでくると共に、そういう意味で月經期の婦人を嫌うような事は今では全くなくなりました。しかし今日でも多くの人は月經期中は性行爲を避け、又月

經期中の婦人も自分を汚れた不淨のもののように考えまして、なるべく外出、運動等を避け、神事などは遠慮するような傾向のありますのは、決して無意味なことではありません。即ち月經期中には婦人の内部性器全體に亘つて炎症性の反應状態が起つて居りますから、些細な局所の刺戟があると、これによつて種々な傳染や粘膜の障礙等をひき起す恐れもないとも云えませんので、それ故月經期間中性行爲を避けることは、その不慮の危険を避ける意味で結構なことでもありますし、又大抵月經中並びにその直後におきましたは、婦人は身體的にも特殊の疲勞状態にありますので、女性の側としましてはあまりに多く性衝動を起さない時期に當つても居るのであります。しかしこの期中經血が特に有毒であるとか不潔であるとかいふことは、少しも理由のないことであります。その意味から避けるのは迷信であります。宗教的には經血中に種々の魔法的な有毒成分が含まれているとせられ、種々なおまじないにこれが用いられるような妙な迷信もありますが、決してそういう特殊な不可思議な成分が經血中に含まれている筈はありません。

月經の處置

月經の處置として、月經期中身體を安靜にしなるべく臥床してその經過をまつことは、事なかれ主義の實地醫學から申七まして理想的のことではありましようけれど、現代の年若く活動的の女性にとりまして、到底行われるべきことではありません。そこで月經期間中といえども婦人は家事をとり外出をなす等の避け難い機會も亦少くはありません。従つてその月經の處置について亦知らなければならぬことが數多くあるのであります。それは既に常識的のことで、改めてこゝに説く必要もないと思ひますが、唯特に注意したい點は、腔内に種々の異物をつめて血液の流出を防ごうとする事は、不適當な處置ではないかも知れませんが、そのつめる物質に十分な注意を拂わない時には、それから細菌の感染或は化學的の刺戟等を受けまして、腔炎その他の病氣を起すこともあり、亦あまり長く詰め物をしておきますと、經血の滯滞によりこれが腔内で分解を起して有毒な物質を發生し、それが刺戟となつて炎症を起すこともあるという事實であります。又餘り堅く綿などをつめて壓迫による局所の循環障礙を起した例も往々あるのであります。それ故詰め物はなるべくならば腔内へは挿入せず、腔口の部に血液を吸収するような綿花のような物質をあてがうだけに止めて、腔粘膜に決して機械的或は化學的の刺戟を與えないようにすることが安全であります。

月經の衛生

月經期中の衛生とてなお特に注意すべき事は、今述べた如く月經期にはその神経系統の過敏となる影響から、その人の精神状態に種々な變調を呈しているということでありませう。單に怒りつぽくなつたり涙もろくなつたりする位のことならば、まず大して差支えはありませんが、中にはこの時期に非常に病的にセンチメンタルになつて、些細の失望や失敗から、自暴自棄的となり、思いつめた自殺行為等に出るものも決して少なくありませんし、又百貨店等で何か美しい品物を見て、欲しいなと思ふ瞬間に、その精神的刺戟によつて一時意識が混濁し、その間に思はず萬引を行つて了うという如きものも往々にあり、亦些細な感情的の原因から興奮をして暴行、傷害、放火等の犯罪行為に走つて了うような人もあるのであります。何時も何時もそうという譯でもありませんが、とにかく平生から月經時に精神變調を來すような癖のある人は、その時期において激しい心身の刺戟を及ぶ限り避けようように注意しなければならぬこともちろんであります。又卵巢や子宮の疾患をもつて居る人は、これによつて最も著しい影響を受けるのは月經であります。即ち卵巢の病氣により黃體の内分泌が減

じますれば月経が少なくなり、その反對に内分泌が病的に増せば月経が多くなるのであります。又子宮腔に内膜炎その他の疾患がありますと、排卵後の粘膜炎が完全に行われませず、これによつて月経時の苦痛やその他種々な月経異常を來すのであります。それ故月経の異常は子宮又は卵巢の疾患を豫報するものとして、これを決して輕視することなく、醫師に直ちに相談しなければなりません。しかし一面に月経は神經精神の作用によつても著しく影響を受けるものでありまして、例えば憂鬱症に罹つてゐる間は月経が一時停止すると云うようなこともあるのでありますから、月経の異常を以つて直ちに婦人科の病氣とのみ考えることも當を得たものではありません。

性病の慘害

性知識として重要なもの一つに性病のことがあります。しかし名は性病又は花柳病と云いますけれども、それは性機能に直接に關係のある病氣を云うものではありません。性病とは不純な機會に於いて直接當事者たる男女の間にその器官に病氣が感染して傳播する特殊の慢性局所性の傳染病の一群を指していうのであります。それ故性慾を基本として論じまする場合には、性病のことは附録のような

ものであります。けれども例えば食事を論じまする際に食物の營養價を考えると同時に胃腸の疾患をも考えねばならないと同じく、性慾現象と性病とは單に名前の上のみでなく、いろ／＼の方面において深い關係がありますから、これに關する知識をもつことも亦必要のことでありましょう。

性病としては梅毒、淋病、軟性下疳、第四性病（鼠蹊淋巴肉芽腫症）の四種が挙げられます。今はそれらの疾患の病源、症候、治療法等の實地醫學上のことを一々詳しく述べることは省略しておきますが、右の中梅毒は局所に疳瘡を生じ、又鼠蹊淋巴節に横痃を發し、後に病氣は段々全身器官にひるがかりまして、遂には腦をも侵すに至るものであります。淋病は主として尿道に化膿性炎症を來し、疼痛烈しく、且慢性になり易いものであります。軟性下疳及び第四性病は單に局所のみならず、症状は比較的軽いものであります。これらの性病は嚴に當事者間にのみ傳染するものでありまして、衣服や持物等から間接に傳染するような例は殆どありません。今日の文明諸國におきましては、各國とも非常な勢いで性病が國民間に傳播し、年々その病者數が増え行きます。我國終戦後には特に青年男女の間に急激に性病が増え、進駐軍まで熱心にその豫防治療に乗り出して居りますほどで、まことに寒心に堪えません。一方に性病豫防の知識を通俗的に各方面に宣傳し、又これに關する取締

規則等も公然政府から發布せられて居りますにも拘わらず、若い人々の間に性病に罹る者が甚だ多く、むしろこれを以て自慢にしている者さえもあるというに至りましては、如何に現代青年男女の放肆な性行爲が廣く不用意に行われつゝあるかの事實をあから様に物語るようなものでありまして、甚だ心痛に堪えない事であります。

性病の中でも殊に梅毒は、その罹病した本人に殆ど全身に亘る病的症狀をひき起すのみに止まらず、生殖腺を侵して、その子孫に迄も先天性梅毒をもつ子を産み出し、又娼妓の如き性業に従事する者は、廣く梅毒を他人に傳染させて世の中にこれを蔓延させて行く危険もあり、亦一旦梅毒に感染した患者は後年それが腦をも侵して、恐るべき精神病を發し、そのために家族を路頭に迷わせ、又他人に對して犯罪をしたり、社會に重大な迷惑をかけたります者も少なくないのであります。従つてこの梅毒は亡國病として社會醫學の上からも特に注意を拂われているものであります。

女性と性病

性病は純潔な女性が自然に感染するようなことは決してありません。必ずその性病を現に有する

男、例えば性病を有する遊蕩な夫によつて感染するのであります。性病を受けた女性がそれに氣付いて、直ちにその局所を治療して完全な効果を擧げますれば、害毒はそれだけに止まりますけれども、その未治の間に他の男性にこれをうつす恐れがあるのであります。それ故多くの男子に接觸することの絶對にない女性ならば、決して性病を蔓延せしめる危険はない筈であります。然るに性病は世間に著しく廣く蔓延しているという事實から想察しますと、性病はつまり多數の男子を客とする様な立場にある娼婦によつて傳播せられるのだと考へなければなりません。即ち事實上賣笑婦の如きものによつて蔓延されるのでありまして、決して良家の處女や妻等によつて蔓延される恐れは萬々ないのであります。それ故貞淑な家庭の夫人に向つて性病の知識を説きますことは、何等必要のないむだ事の上ではあります。世界各國の統計上。文明の進歩と共に性病の蔓延は益々甚だしくなり、青年男子はその結婚の前において、既に大多數のものが性病をもつて居るとさえ云われて居る今日におきまして、結婚により正しい新らしい生活を送らうとする處女にとつては、萬一新郎から性病の感染を受けるような事がありましたならば、妻一己の病氣としての苦痛のみならず、それが長く家庭の煩いともなり、又その夫婦の間に生れ來るべき子供の上にも、先天的に種々な病的障礙をもたらす原因ともな

り、つまり生涯に亘つての不幸の原泉ともなるものであります。それ故嫁入前の處女といえども、全然性病に關する豫備的知識なしに過ぐる事は危険千萬といわなければなりません。無垢の花嫁が新婚の當夜から、新郎の爲めに淋疾、梅毒等に感染させられ、早くも痛ましい祕密病に泣くものが決して世に少なくないという世相の事實を見ましては、醫師として涙なきを得ないのであります。中にも妻の子宮内膜炎は夫の慢性の淋毒に因るものが甚だ多いのであります。人前で淑女が何の氣もなく自分が子宮内膜炎に罹つて毎日婦人科の病院へ通つてゐるなどと、大つ平に話し合つて平然として居ますのをよく見聞致しますが、これはつまりその夫が淋病をもつてゐる道樂者である事を廣告してゐるよ
うなものであります。又反復して何回も流産をするのは、大抵梅毒によるものであります。然るに自分
分は流産の癖があるからと云つて、妊娠中にひたすら滋養をとり、安靜を守り神信心などをして子を
欲し乍ら、しかも梅毒の根本治療をする事に少しも氣付かないような婦人も、亦氣の毒な人と云わな
ければなりません。性病に關する十分な知識を持たない男が、酒色に溺れてその良心を麻痺させまし
た時、如何にその家庭に及ぼす害毒の恐るべき結果を生むに至るものかといふことは、蓋し想像する
だに慄然とする程であります。

性病の豫防

しかし處女としては性病の専門醫のような醫學上の知識をくわしく持つてゐる必要はありません。たゞ不品行な放埒な男子は性病の病源體の保持者として非常に危険な存在であるといふことに用心し
て、自らその害を受けないように、疑わしい男子との性行爲を避けるような心持をもつていさえすれ
ばよろしいのです。その如何なる人が果して性病を有するか否やの診断は醫師でない若い乙女が自ら
検査する能力はありますまいし、又肉眼でたやすく看破できるような疳瘡、横痃或は淋毒性尿道炎等
の徴候は現在持つて居りませんでも、なお肉眼の及ばない所にその病氣を慢性にもつてゐる者もある
のであります。

そこで性病の有無につきましては、つきり信用することの出来ない疑わしい男子を夫にもつてゐる場
合におきましては、如何にしてその感染を豫防し得ましようか若し男子側に周到な用意がありますれ
ば、コンドーム等の使用によつて傳染を避けることが出来るのであります。それだけの用意のない
時、よしや男子に性病があるとしても、女子側のみ注意によつて豫防をしようとする場合に

は、事後直ちに女性性器粘膜全部に亘る殺菌消毒的洗滌處置をするより外に良法はありません。その際の適當な消毒液としては過マンガン酸カリ千倍稀釋溶液などが最もよいとされて居り、その他種々な藥液が醫師から提供せられて居ります。しかし素人としてしまは、容易にそれを準備することは出来ずまい。それで準備に手数のかゝらないように、單に腔内を殺菌消毒するように、座藥に類するもの、特に硼酸や過酸化水素などを含有する藥劑で携帯に便なものが賣り出されて居ります。けれども、粘膜中その藥劑の行き互らない部分に感染しました時にはこの藥も何の効がありません。今日ではこれらの藥劑は腔内殺菌劑としてよりも却つて避妊の目的のために用いられることの方が多いうであります。前掲の結婚解消問題の如きは双方が醫師であつたために性病を却つて過敏に考へ過ぎ、理智的判断のみにとらわれて結婚を倫常的に考へるといふ餘裕を持たなかつたための事件なのであります。しかしこれは早く解消したからよいようなもの、若し既に結婚をして時を經、そこに夫婦協力して家庭を構成すべき重大な義務を發生した以後において、夫の性病を有することを知りましても、それは恐らく正常な離婚の理由にはなり得まいと思われまゝ。離婚によつて凡てを抛棄するよりも先きに、まずその性病の感染を防ぎ、又その完全な治療を要求し、而して後正しい結婚生活

に入ることに、お互に努力する可能性が残されている筈であります。

つまり性病は無智不用意な男女間の交渉において知らず／＼の間に廣く蔓延して行くのであります。そのために國民の體力、生殖力をそぎ、生れて來る子供の素質を不良にいたしますので、爲政家はその點を恐れて、その豫防を高調するのであります。感染した性病そのものに對しましては、早期から適當の治療法を施しますれば、それは決して不治な宿命的のものとは限りません。今述べた結婚解消事件の如きものには、花嫁が單に性病を恐れたという事以外に、新郎たるべき人の誠意を疑つた精神的の原因も含まれていたのであります。そういう結果となつたのであります。性、性病だけの立場から、この問題を批判することは恐らく當つていないと思われまゝ。

婦人は性病の知識として、たゞ單にその感染を恐れる事ばかりを知つて居るのではまだ不十分であります。それが適當な早期の治療法により比較的完全に治り得るものであるという事も亦知らねばなりません。又結婚によつて生じた夫婦間の關係は、單に性的結合という意味のみが凡てであるのではありませんので、その他に幾多の結婚生活の使命が存しているということも亦考へなければなりません。夫婦間の使命の重いことから申しますれば、性病の有無の如きは單に部分的の問題に過ぎないの

であります。

しかし何事も用心するにしくはありません。性病につきましては、放埒な享樂生活の上において、賤業を営む婦人と斯かる賤業婦に近づく放蕩な男子との間において、今日よりも尙もつと多く重大問題として眞面目に考えて貰わなければならないと共に、今後は決して正しい結婚生活の中に忌むべき性病を持ち込むことの絶對にないように、これは教養ある婦人に對してよりもむしろ思慮の浅い男子の方に、常識として要求せられなければならない事だと私共は信じています。

疾病の遺傳

性知識の内容としてこれからの時代の婦人に特に必要と思われることは、優生學に關する知識であります。正しい結婚による夫婦の使命が健全な生殖行爲であり子孫の繁榮にあると致しますれば、自分たち夫婦と自分たちの産む子供との間に、如何なる因果關係が存在しているかという事を知るのは當然に必要な知識に屬すると思います。

近來遺傳學の進歩によつて知り得た生物學上の知識によりますと、人類のみならず凡ての生物にお

きまして、その兩親の有する身心上の特質が一定の法則に従つてその間に生れる子供に遺傳するといふことであります。つまり兩親の特質如何が子女の性質を左右する重大な因子であるといふことが分つたのであります。例えば日本人と西洋人との間の混血兒を見ますと、身體上において日本人の特質と西洋人の特質とを混合して備えて居るのが分ります。例えばその毛の色、肌の色、虹彩の色、或は顔つき、言葉つき等の上から、一見して直ちにその子が純粹の西洋人でもなく、又純粹の日本人でもなく、その間の混血兒であるということが誰の目にもわかるのであります。同じ日本人同志の結婚におきまして、やはり同様に兩親の有する物質がそれ／＼別々に遺傳していることは明かであります。最も卑近な例で申しますれば、背の高い夫婦の間に出來た子供は背が高く、又親に近視眼や色盲がありますれば、子にもそういう物質が傳わります。又精神病、神経病、特に低能、癲癇、ヒステリイ等という生來性の神経性又精神上の疾患は、殆ど兩親からの遺傳的素因によつて生ずるものなのであります。(又親と同一の病氣が子に傳わるのでなくとも、大酒家の子供には低能者や癲癇者が多いとか、梅毒をもつ親の子には白痴、低能、聾啞等の者が甚だ多いというような事も、恐らく俗間誰しも知らぬ者はないほど著しい事實なのであります。)

學者はいろいろな實驗や統計的研究によりまして、これらの悪い素質の遺傳する關係をとり調べて遺傳の法則を研究し、又遺傳すべき素質と遺傳しない素質、又はその遺傳する道程如何、又その遺傳質をいろいろに變化させる方法如何等を種々の實驗で研究してその科學的の通則を發見したのであります。一方に悪い病氣や素質が遺傳するばかりでなく、親のもつ良い素質もまた遺傳致します。すぐれた智能や藝術、體質の如きものも亦遺傳するのであります。世間には代々すぐれた學者の出る家系とか、代々美術家や音樂家の出る家筋というものが知られているのであります。

遺傳の法則

これらの良惡ともに素質が遺傳をする場合を考えて見ますと、大體におきまして父及び母から遺傳する物質の分量は夫ろ平等であります。ゴルトンの法則によりますと、全體の心身素質の量の四分の一は父から、四分の一は母から遺傳し、又十六分の一は父の父から、十六分の一は父の母から、十六分の一は母の父から、十六分の一は母の母から遺傳するといふ風に、すうつと古い先祖からもそれぞれその血縁の遠いに従つて分量は少なくなつて参りますが（ n 代前の祖先からは $\frac{1}{2^n}$ ）、やはり多

少なりとも遺傳素質を受けているのであります。しかもその遺傳素質は良惡とも一般的に或世代には現われずに潜んでいまして、後の世代におきまして、それが或機會にひよいと現われるものもあります。例えば癩癩の如きは、一方の親に癩癩がありましてもその子には必らずしも現われません。しかしその子の配偶者の一方の親に癩癩でもありますときには、孫の代に至つてその病氣が現われて來るのであります。これを隔世遺傳と名けます。それ故親の性質が直接に子に傳つて居らないように思えましても、その次の世代になつてこれが現われて來る事もありますから、遺傳の法則は一代だけを調べて見たのでは本當には分りません。しかし動植物等では割合にその一代の期間が短いのですから、いろいろな實驗を試みる事が出来るのであります。例えば赤い花と白い花との双方の草を掛け合せて桃色の花を作つたり、大輪のもの同志を掛け合せて一層大きな輪のものを作つたり、そういう風に研究した遺傳律を利用しまして、朝顔や菊花の色々な變種が作り出されたのであります。實用的に今日迄にも斯ういう遺傳の法則を利用して、蠶や鶏や牛や馬やの飼育動物界におきましても、いろいろな品種の改良が企てられて來たのであります。

人間におきましては動植物の實驗のように勝手にいろいろの配偶を試みることは許されません。又従前長い年代の間しらすくに雜婚を重ねて來たのでありますから、今日において純粹な優良素質のみを備えたような人間を見出すことは殆どできない事なのであります。即ち智力や技能の方面ですぐれて居りましても、一面に品性の劣つていゝという遺傳素質が陰に存在しているといふ如くに、不純の例がむしろ多いのであります。しかしこの上ともに今後の人々が無思慮な輕卒な結婚をつゞけて行つて、不良な素質を多分にもつ子孫を段々と殖やして行きます事は、人類のため國家のため決して好ましいことではありません。現に世界各國の統計を見ますると、精神病者、神經病者、低能者、犯罪者、自殺者、その他奇人變人等いろいろの不良の素質を有している者が、年々に殖えて行く事實が認められるのであります。これは全く不良素質者同志の結婚が多く行われて、その遺傳によつて不良素質を有する子供が増加して行くためであると云われています。従つて優生學を説く學者の意見によりますれば、今後結婚をする人々がお互いにその配偶者の家系の遺傳素質やその現在の心身狀態等を

しらべまして、優秀素質者をお互いに選び合い、且お互いが現にもつ不良素質をそれ／＼消し合い埋め合うように致しまして、優良の質を次代から段々濃くして行くような適當な配偶者を探して婚姻を結び、その生れて來る子孫の上になるべく優良な素質のみを多量に傳えるように心がけて行きましたならば、何世代かの後には、現在あるような精神病者、低能者、犯罪者等が段々と減少して行つて跡を斷つて了い、優良素質者のみの社會が出來上ることであろうと想察せられるのであります。而して、現在著しい不良素質の者でその不良の遺傳因子を子に傳える恐れのある者には、その子を絶やして了うようにする。即ち受胎の行われないうちの優生手術を受けられるように、目下優生保護法という法律が施行せられているのであります。これは始め昭和十五年五月に、當時戰爭中で國民の體位を向上させる必要上の趣旨によりまして國民優生法として發布されましたもので、遺傳性の精神病者、精神薄弱者、惡質の病的性格者等は本人、家族又はそれを監督する地位にある人達の申告によりまして優生手術が施されるようになったのであります。その後昭和二十三年に改正せられました。しかし實際上の成績はあまり上がりませんので、これは早晩さういふ精神病者等に對しては國家の力で強制的に手術を行い得るようになって行くだろうと考えられます。この優生法のような趣旨の法律は

米國では一九〇八年以來その大多數の州で既に行われて居り、戦前の獨逸でも一九三三年以來強制手術を行うことに制定せられ相當の著しい実績を擧げていたことでもあります。なお世界各国ともこういう優生法を實施している國は他にも澤山あるのであります。

それほど法律の力でもつて強制的に致しませんでも、これから結婚をしようとする人々が、少く理性を働かせて結婚の本來の使命を考え、この優生學的知識によりましてその配偶者となるべき人の、單に容貌や財産ばかりを考えず、その家系の遺傳的素質等にも相當の注意を拂うようになりまして、敢然時流を抜いて、結婚による遺傳素質改良に心を向けることになりすならば、おのずと國民全體の素質を向上せしめるといふ結果を擧げます事は、決して不可能ではないと信じます。而してその目的のためには遺傳學者や民族衛生學者の努力によりまして、若い男女を指導する意味から優生學的結婚相談所の如きものが各地に設置せられるような機運に段々向つて行きつゝありますのは、まことに喜ばしいことでもあります。

配偶の選擇

従前の我が國の家族制の習慣に依りますると、息子や娘の配偶者を定めますには、双方の両親が互いにその相手の家の血統や地位、財産のことを取調べ、最も難のない似合いの者と認めました場合にその約束が成り立つのでありまして、單に若い者同志の淺薄な判断のみに委せますよりは、認識も豊富であり又感情にとらわれるようなことも少なく、優生學的に申せば、甚だ安全で結構のよう
に思われるのでありますけれども、若しもその両親たる者に正しい優生學上の知識が缺けて居ります
る時には、やはりその結果において十分の信頼は出來ないのであります。まして現代の世相の上から
云いますと、財産や地位を目的とする政略的の結婚が親と親との間に約束されることが多くありまし
て、若い夫婦をその犠牲とするような例が往々あるのでありますから、親の眼鏡が必らずしも正しい
ものとは云い兼ねます。そこで唯一つ正しいものは科學であります。科學の批判による公正な優生學
的結婚相談の機關を設けまして、皆がこれを利用するようになりますことは、將來の若い男女にとつ
て必らずや幸福を持ち來し、延いて國家の堅實なる繁榮の基となるであらうと思われまします。しかもそ
ういふ機關によりまして専門學者により精密な遺傳學的事實の教示を受けましますに先立ちまして、こ
れから嫁入るべき若い女性は、己れの家系の遺傳的特質、即ちそのすぐれた點と劣つてゐる點、並び

に自己に特有な素質上の優劣の特徴等をよくわきまえておき、その配偶者の選擇に當りましては、自分と同じような悪い素質をもつ者を夫にもつて、双方から一層不良素因を重ねることのないように、むしろ性質の相反する優劣の素質によりまして、お互いに弱點を消し合うよう、又出來得べくんば優良な素質を重ねて倍加致しまするように、選擇の標準をその點において考慮するだけの知識の用意が必要であらうと思つてあります。

血族結婚

従前から世間で血族結婚が忌まれますのは、單に道義的の立場から倫常の上で好ましくないと云う計りでなく、一面に血族間におきましては同じような遺傳素質がめい／＼に分布してはいますから、そのために悪い遺傳素質が一層この結婚によつて強められて行く危険のあることを慮つて、おのずとそういう習俗が生じて來たものでありましよう。わが國では従前職業の世襲制度がありまして、例えば古い時代の畫家の系圖などにおきまして、代々同じ親族の中で畫才のすぐれた者を選んで配偶せしめるような習慣により、漸次に畫才そのものを遺傳的に優良にするように心がけて來た制度が行われて

いたのであります。これは一面から、誠に結構なことではありましたが、單に一面の才能のみを見てその外の素質因子を一切考えなかつたために、その特殊の才能においてはすぐれてはいても、或は體質が弱くて早死したり、或はその性格がよくなかつたりという様な、いろ／＼な不良な隨伴素質を多く交えるという結果となりましたので、今日ではこの意味の血族結婚はあまり顧みられなくなつて了りました。むしろ「縁は遠い者の中から選べ」という様な諺さえあります位で、できれば血族結婚は避ける方がよいという風に考えられております。要するに良い草は榮えずに雜草ははびこると同じく、とかく良い性質の遺傳因子よりも悪い素質の因子の方が早く且強く家系を占めて了う傾向があるのでありますから、遺傳關係を考えます上には優良素質を促進するという方面よりも、むしろ不良素質を撲滅するという方に先ず重きをおくことが必要でありましよう。

母性愛

戀愛はいかに美しくとも、それはたゞ男女相近づいて、生殖力の効果を擧げさせる迄の生物學的手段というに過ぎません。一旦戀愛の結晶として、愛兒が母の胎内に宿り、又間もなく可愛い生命が

この世に新たに生れ出でまするや否や、母となりました女性の子に對する愛情は、全く意識をかけ離れまして、特別な母性愛に盲目的にとらわれて了うのであります。即ち自分の血肉を分け、自分の全身を流れていると同じ血液が新しく生れて來た者の體內にも流れているということを自覺しますると、即ち胎動を自分の子宮内に感じ始めますと、その時から女性は母親としての本能にめざめて參るのであります。それが分娩によつて身二つとなり、この世に自分の血を分けた新しい別の自分が生れ出ましたときには、今迄獻身的に夫に捧げていた心身の力は、新たに一層強く子供の方に向け換えられるのであります。この母性愛は本能的に生ずる力強い特殊の心的傾向でありまして、戀愛よりは多少は理性的でありましょう。戀愛がたゞ瞬間の楽しみをおうているのに反しまして、母はその子供が將來已等の後に已等に代るべきものといたしまして、これを美しい性格、輝かしい智能をそなた者につくり上げて行きたいと云う希望に満ちた欲求を持つのであります。従つて子供のためには、その愛人に對するよりも一層獻身的であり、一層純眞な、利害を超越した心持をもつものであります。婦人はその子供が夫と自分との二人の間に生れたものであり、子供をうむ迄の苦しみも、子供を育てて行く楽しみも、凡て夫と共に平等に相い分つべきものであるとの觀念から、子供に自分の愛をつく

すために、多少は夫に對して眞心をさへげることが減じたとしても、それは當然許されるべきことだと信じているのであります。戀愛の時には愛する男の名をそのまゝよんでいたものが、子供が生まれると、もう母親は夫に對してその名をそのまゝには呼びません。夫を呼ぶのに子供の名を代表として「花子のお父さん」とか「太郎のパパさん」とか云うようなまわりくどい呼び方をするようにするのであります。

たとえに云う「焼野の雉子、夜の鶴」。母性愛の至上無比な力は動物界にも見られると申します。動物の母性愛につきましても、今挙げた古くからの比喩の如きは、科學的にはむしろ無稽のことであるかも知れませんが、事實子をもつた母たる動物の性格には、その育養中には特別の變化が起り、子に危険を與えるものに對しまして、自分の命をかけても敵對することは、誰しも知つてゐる所であります。人におきましても同様に、否、人におきましては動物の如くに一時的ではなくて、一生變らず永續的に、母性愛を發露いたすのであります。子の飢を救おうためには母親は己れの食をもとらずに食をあさり、時には最も貴重な己れの生命を棄て、迄も己れの子をかばおうといたします。それは子が弱き者なるが故にこれを憐れむからではなく、己れの子なるが故に獻身的に本能的に愛するので

あります。純真な母性愛は決して他人の子にまで及ぶものではありません。戀愛中には愛する男にさざげきつていた己れの生命も、一旦子供が出来ますと、愛人のみにさげることが措しくなつて参ります。夫婦連れの心中や、母親の自殺などの場合に、甚だ屢々その子供が道連れにされますのは、いつも母親からの發意であり、又母親たるものの忍び得ざる母性愛から出るものなのであります。従つて哺乳、育児、殊にその子供が獨立生活を營むに至る迄の間、心からその發育、成長を樂しみ、且それを保護しようとして母が熱意をさげますのは、決して女性としての苦しい義務でもなく、又女性に負わされた宿命的の災難でもなく、むしろそれは樂しく輝かしい女性の母性愛本能より出する自然の流露に外ならないものであります。子をうんだ母が眞の母性愛を感じますならば、どうしてその子をその手から引き離して、他人の養育に委すことを肯んじましょうや。如何なる困難に耐え飢寒を忍びましても、自分の手で自分の子を育て、行きたいと願いますのは、誠に女性のいつわらない眞實の念願なのであります。

次には夫婦生活中のいろ／＼の病的障礙について簡単に述べて見ましょう。

女性の冷淡

若い夫婦同志の生活につきまして、折々私共は打ち明け話として、新婦の不感症の訴えを聞くことがありますし、又私共の診療所にも屢々「自分は不感症なのではないか」との疑いで若い夫人が心配して相談に來られることが少なくないのであります。一般に女性は性的快感を得る迄に要する時間が長いので、新婚の花嫁などはその性的經驗の乏しいため、この快感のどんなものかを知らないで過す人が甚だ多いのであります。そこへ新郎の方も又女の性的機構についての知識が乏しく、加うるに神経衰弱症などのために所謂早漏症的傾向などがありますと、いつ迄経つても新妻は自分の性的興奮を感知せずに過ぎて了います。従つて妻はむしろ性行爲をいやがるようになります。長い間妻が夫に對して性的の興奮を起すことがないという、夫は妻を性的不感症ではないのかと疑うようになりますし、妻も亦これは自分の側に原因のある所のいわゆる不感症なのではあるまいかと疑うようになります、かくして煩悶の結果醫師に相談に來るに至るのであります。

眞の不感症というのは陰粘膜の感覺障礙のために、本來ならば必らずあるべきものが脱落した疾病

をいいますので、これはヒステリー症などの一症候として來ることが往々あります。又女性はその愛の呼びかけがない場合には、精神的に男性に對して冷淡になりまして、單に受身になつてゐるだけでありまして、しかも女性自身はいつ迄も自分で性的興味を知ることがないものなのであります。これは強いられた性的行爲、或は女性が憂鬱症にかゝつてゐる際などに屢々經驗されることでありまして、これが屢々不感症と誤解されることもあります。しかしこれは實は女性が精神的にその相手たる男性を嫌つてゐる爲めに性感を生じないのであります。男性にもこれに類した現象が種々あります。例えば男性でも自分の氣に入らない女性や氣にいらぬ場合などには性行爲は不能でありまして、古い妻を厭つて遊里通いなどをするけしからぬ男性にはそういう原因のあるものもあり、女性にも亦これに相當する精神的の不感症があるわけであります。

然るに始めに述べました性的經驗の乏しい新夫婦等に往々見られる女性のいわゆる不感症というものの中には、本當の意味の不感症ではなくて、女性がまだ性的興味のわかないために、これを厭うような者が斯く誤認せられるのであるのであります。これは實際診療の結果、世間に甚だ多いことが分つたのであります。つまりこれに對しては罪は男性側にあるのであります。それには戀愛遊戯にふ

けり過ぎたためにそうなるものもありましょうし、又神經衰弱症や自慰の習慣等のためにいわゆる性的神經衰弱症を呈しているものによるものもあるであります。従つて斯ういう所謂不感症の例はあまりに熱愛に過ぎる愛人同志の關係とか、又學者、藝術家等の神經質肌の男を夫とする若妻に多いようであります。

それ故結婚に當りまして本當のうぶな處女をめぐつたような場合には、男性は豫じめ女性の性慾機構についての知識を十分に知りつくして、花嫁をおだやかに誘導し教育して、共に愛の生活の如何に嚴肅なるかを知ること努めねばならないのであります。それ故昔の物慣れた小父さん達は、嫁取り前の若い男には道樂をさせて、少しは娼婦から情界の表裏を習い覚えさせ、又女性についての知識を得させておかなければいけないといつたものであります。これが實行はともかくとして、誠に苦勞人の心遣いだといふべきであります。

家庭の悲事

實際に不感症を有する夫人、又は今述べた如き未だ人生の美を知らないうぶな若妻たちは、却つて

男子の意圖のみにくさを迷惑に感ずる位のものでありましようが、さりとて精神的に性感を厭つたからとて、これは決して妊娠を妨げることにはなりません。性感をもたないでも妊娠は當りまゑに致します。實際數人も子を擧げ同棲十數年間に亘つていて、しかもまだ一度も性感期に入ること知らなかつたというような不幸な婦人も折々は聞く所であります。斯く性感の美を體驗しない限り、妻は夫を全的に愛すべき所以を知る筈がありません。その妻は誠に冷たい一女性であるに相違ありません。而して遂にその相手たる男性はその冷やかな妻に心をひかれなくなり、妻も亦夫の性感をにくむのみでありますれば、家庭に琴瑟相和すべき機縁が生ずべくもありません。家庭悲劇、三角關係など、よく名流夫人などが、不思議に思われるような意外の戀の相手を求めて世間の視聽をあつめますのも、醫學的によく詮索してその眞因を考えて見ますと、その夫があまりに謹嚴に過ぎたり、或は神經質に過ぎたりして、少しも夫人の愛慾の動きを察知せず、長い間自分の性的知足のみを考えて少しも夫人に愛の何たるかを知らしめるほどの心遣いがなく、冷たい性生活を續けて來ましたものが、たまく夫人は物慣れた男を相手として始めて性感を味い、その體驗から夫に對する愛情を全く喪失して了うに至り、遂にいたましい家庭の悲劇を生むようになったというような例が存外に多いのであります。

夫が妻に對する愛を失うのにも、やはりこれに類する妻の冷淡症による場合がまた少なくないのであります。世間ではよく「夫婦間に既に數人の子を設け乍ら」といつて、斯ういう夫婦愛の破局を非難致しますけれども、これは未だ一面を知らないもの言であります。子の出來ることと性愛の極致とは全く別のことなのであります。甚だしいのはかつて論議されたことのある如く、強盜により無理に暴行をうけ唯一回の性行爲によつて受胎妊娠したというような不幸な處女もあるのであります。ヒステリー症等により神經性障礙としての不感症を有するものでありましたらば、醫療によつて、特に神經病専門醫の治療によつて治癒し得る可能性があるのであります。夫を嫌い意識的にその愛情發露を抑壓することによつて起る精神的な不感症に對しましては、夫との愛を再び熱烈に湧かしめる方法を講ずる以外、醫療上の良策はありません。

深い愛の交換

性生活は久遠の生命をもつものでありますけれど、性享樂は瞬間的のものに過ぎません。青春時の性的享樂を高めるためにはその都度性的興奮を高める技術を講じませんと、性享樂はおのずと興味を

失い、却つて索莫たる倦怠に化して了る恐れがあるのであります。戀をさゝやく若人が相會する度毎に、熱愛したり嫉妬したり、からかつたり欺したり、笑つたり泣いたり、いろ／＼氣分を自ら轉じますのも、つまり技巧によつて戀愛の感じをその都度清新にしようという試みに外なりません。

女性がいづも従順に、男性の云いなり次第に行動していきますと、男性はその徳をいとしがるよりも、その間柄の單調さに倦いて來て、やがてその戀もさめて行くのを免れません、昔から女郎の手管と申しまして、娼妓はその商賣意識からいろ／＼お客を欺す手段を心得、それを巧みに應用して、却つてお客の願慮を永くひくことに努めましたもので、こういう技巧を學ぶことが娼婦の勉強の一つであつたのであります。

よく夫婦間の倦怠期ということを申しますが、あれは夫か妻か或はその双方かが性愛技巧をわきまえていないために生ずることでありまして、妻よりも娼婦の方に愛着と興味とを覺える男の多いことは、性生活を人生の享樂と見る場合には屢々技巧の上から起り得ることでありましょう。女房と疊とは新らしいのがよいという、けしからぬ俗諺がありますが、つまり夫婦間の平凡な性生活では、それに慣れていかに享樂を失墜せしめるに至るかの事實をよく物語つていゝるものであります。

夫婦は度々夫婦喧嘩をする間柄ほど仲がよいと云われ、夫が度々長い旅をして家を不在にすることは却つて夫婦の間を親密にするなどと云われますのは、變化のために性の享樂感を強めることを證明するものであります。しかし四六時中少しも離れずに仲よくひつついて暮している夫婦でも、決して凡てが倦怠を來すものではありません。夫或は妻の一方に性愛の技巧を用いる用意さえあれば、外見上平凡單調なくらしをしている夫婦の間にも、日々に新たな技巧によつて、いつもいつも清新な強い愛情を交して行くことは容易なことなであります。女房が時々厚化粧したり、髪の結い方に新機軸を出して見たり、又時々思いがけない御馳走をこしらえて夫の歸宅を待ち受けて驚かして見たり、夫婦連れ立つて觀劇に出かけ席を列べて座つて見たり、他家の御嫁取りの仲介の世話をして見たりするのにも性愛の技巧となります。又時折は夫婦何れかが病氣をして深切な看病をして貰つたりするなども、少々心配で物入りだけれども、家庭生活の氣分を新らしくする助けになります。とにかくこういふ技巧は、時としてたくらまなくとも偶然の災難や失敗から、かもし出されることもありましようけれども、長い夫婦生活の間には、むしろ必要なことなのであります。今迄倦怠していた夫婦仲が子供の大病から急に再び熱烈に仲よくなつたとか、甚だしきは強盜に入られて、その時の妻の態度

から急に妻への感觸を新たにして夫婦仲が強烈になり、却つて強盜を恨まずにその被害を感謝したなどという實例を私共は聞いて居ります。夫婦間の痴話、やきもちや犬も食わぬとは申し乍ら、決して捨てたものではなく、夫婦喧嘩は仲裁に入つて却つて後から不足を云われることもないではありません。喧嘩も立派な性愛技巧なのであります。

魅力は技巧の變化

性的の技巧は以上のような精神的の愛情の上ばかりでなく、閨房の事についても幾多の學ぶべきことがあり、印度やアラビアには閨房技巧を事細かに説いた有名な古典が今日迄も傳えられ、各國語に翻譯されている位であり、我國でも幾多の春本がそのために編まれています。それをこゝには紹介は致しませんが、それほどそういう技巧が一般から關心をもたれ又研究せられていたことは事實であります。こういう書物はまことにけしからぬ存在で、風紀上許し難いものとも思われますが、昔は嫁入道具の一つとして荷物の中へ笑ひ本を入れてやつたと云う話して、その親心はつまり閨房技巧によつて夫婦間の生活の倦怠を防ごうという心遣いから起つたものとも解せられるのであります。

心よい名所の景色は一度見ますと後日何度でもこれを思い浮べて楽しみを反復することが出来まして、視覚や聽覺の記憶は、はつきりこれを知覺の上によみがえらせることができますのであります。しかし味覺や嗅覺の快感はその刺戟が現實から一旦去つて了いますと、再び同一の知覺を追想することが出来ません。たゞおいしかつたという莫然たる觀念上の記憶が残るばかりであります。そこで一度蒲燒のうま味を體驗した人が、その味を再現したいと思ふ時は、再びそのうまかつた同じ蒲燒をたべて見なければなりません。これが料理屋、菓子屋の繁昌する所以でありまして、これを複製品や代理品で間に合わせることは到底出来ません。しかしこういう味覺や嗅覺は度々同一のものを繰り返すうちに段々その刺戟に慣れて來て、いや氣がさして參り、間もなく興味や魅力を失つて了います。そこで轉々その刺戟の對象を變えては楽しみを新たに致すのであります。性愛もこれと似ていまして、同じ相手では間もなく魅力を失つてしまひ、「目についた女房いまでは鼻につき」ということになります。そこで現實なり空想の上なりで、その性愛の對象を轉々しないと、性的享樂の味がなくなりまゝす。菓子屋ならば轉々對象を變えても何の文句もありませんが、戀愛の相手や女房をそう轉々變えることは許されません。そこで同一の相手でありながら、氣持の上で違つた新しい刺戟を感じるよう

に、お互同志技巧に努めませぬと、戀愛に倦き夫婦の家庭生活に倦きる結果になり勝ちでありまして、そこから幾多の悲劇が作り出されることが屢々あります。

夫婦間の氣位

よく教養あり學識ある夫婦同志、上流名門の家庭などに、この家庭倦怠が起り、幾多の三角關係問題などの生ずることを聞きますのは、恐らく夫婦相互間の氣位が高くて、性愛技巧が足りないための結果であるらしく、又金のある男子が外妾をおいたり、娼婦や藝妓を引き上げて正妻に迎えたりすることの多いのは、つまりは性愛技巧を求めためからではないかと想察されるのであります。男子は女子の美しくしさを欲求しますが、たゞ人形のような、動きのない技巧のない美しくしさに満足致すものではありません。ズボラな道樂者の、社會的にはあんまり取得のない男が、澤山の女子に好かれることがあるのは、全く戀愛技巧に特殊のうでを持つているためでありましょう。愛の技術は必らずしも容姿や學識にのみよるものではなく、また別途の工夫を要するものであります。若い時女遊びなどして道樂した者は、身を固めてから却つて夫婦仲がよく、家庭が圓滿に行くなどと世間で云われた

であります。これは若い者に道樂を奨励するわけではありません。つまり結婚前に性愛技巧を學んでおくと、夫婦の間に倦怠期を來さすにすむ事實を裏書しているものに外なりません。特に物堅い貞操ある夫婦の家庭生活を守るためには、夫と妻との双方から性愛技巧の必要性があるという事は申す迄ありません。夫が道樂者だとか、妻が不貞だとか云つてお互いに責め合う前に、この夫婦間に性愛の技巧の行き届かなかつたことを氣付かなければならない筈であります。

女性ののろい

女性は感情に非常に鋭いものです。丁度若い頃に或男子に戀愛して、これが不幸にも失戀或は欺瞞等のいたましい破局に終りますと、その女性は男性全般に對して呪いの心持をもつようになり、あらゆる一般男性に對する精神的不感症を起し、少しも男子に對して性愛を發しないようにおのずとなつて了うのであります。しかして多くの人はその秘められた心的抑壓の原因を知りませんので、この婦人を「男嫌い」と評します。しかもこの男嫌いは絶對の男嫌いではなくて、いつか偶然に意氣相持合する男子に出會うことがあります。一般男性に對する精神的不感症は突然に解消しまして、特

定男性に對する油然たる熱愛を生じ、こゝに普通の夫婦生活を送るようになり得るものなのであります。

しかし今述べました女性の精神的不感症や又は經驗不足によるいわゆる不感症に類する婦人の冷淡症は、要するに婦人側の責任にのみ歸すべきものではありませんので、むしろ男子側で女性に關する知識が不足しているのによるものなのであります。これに對してはむしろ男子の性教育資料中に説くべきものであるかも知れません。少くとも女性の性知識の當面の問題ではありませんが、しかし若し自分がこうした「不感症」又は「いわゆる不感症」を有するがために、自分も不幸、夫も不幸、一家擧げてほがらかな氣分になれないというように感ぜられる婦人がありましたなら、さすがにこれを直接夫に相談することも致しにくいでありましょうが、まず適當な醫師に相談せられ、その醫師から夫たる人に相談をかけて貰つて、圓滿に家庭の和樂を圖ることが肝要だろふと思ふのであります。夫婦間の感情が第三者には表て向き何の不足もないように見えていても、こうした微妙な性的缺陷から、何という理由も第三者には分らずに、夫婦間がしつくりとうまく行かず、それが悲劇となり離婚の破局にまで立ち至りますような實例は、私共のしばしば經驗する所なのであります。

心身の活動力

人間の神經力、即ち身體的精神的の活動力なるものは、その性的内分泌腺の「ホルモン」の刺戟によつて保持せられることが甚だ多いのであります。殊に男性におきましては、愛慾の旺盛なものほど社會的活動の精力も亦熾烈であるのが常でありまして、「英雄色を好む」などという諺さえも行われています。それ故愛慾の減退、即ち俗にいう元氣のないということは、直接にその人の精神作業力、身體作業力にも影響するという迷信から、逆に愛慾を旺盛にする方法を講じましてこれによつてその活動力をも強めようと圖るようになり、そうした意味の藥劑や器具や、又手術による若返り法なども盛んに提唱せられたのであります。殊に動物の睾丸内分泌物そのものを注射したりなどしまして精力を補う方法などは、かなり熱心に行われたものであります。これに對し女性では、子供を生む度にその心身に衰えを増し、いわゆるふけて參ります。子を多く産むにつれ愛の刺戟の力も弱まつて行き、更年期以後になりますと、卵巢「ホルモン」の脱落のために、自發的の愛の發動は殆ど全く失われて了うのであります。その代り精神的に他人の情事に興味をもつようになり、これによつて愛の刺戟を

受けるらしいのです。しかし更年期後に卵巣機能脱落のために神経症状などを發しました者では、卵巣「ホルモン」の注射等によつてその症状の治ることがありますけれども、これによつて愛の刺戟が再び旺盛になるといふような事はないようであります。

女性にありましては、慾望の強盛な間は社會的活動力が強いというような關係は存在しませんが、少なくとも慾望の強いことは反射的に卵巣内分泌作用を高めるものだと考えられ、従つてこれによつて身體的の若々しい美しさを保持し得るものと考えられるのであります。子を持たない婦人はいつ迄も若々しい。子を産んでも自分で哺乳しないものは、やはり若々しさを失いません。藝妓などは職業上その美しさを何時迄も保持せねばなりません。實際彼等は絶えず色情的刺戟の間に住み、しかもいつも戀愛刺戟を受けていながら、世帯も持たず子も持たず、精力の消失がありませんから、そのためか年よりもはるかに若々しい容姿をいつ迄も保ち得るのであります。

それ故女性にありましては夫婦生活はつまり容姿のふけて行くことを意味し、子を持ち世帯を固め、男戀しい心持をすてゝ家庭の和樂に快くひたつていますと、早く老いの來るのを免れません。そこで次ぎには婦人の美しさに就いて少しく述べて見ましよう。

婦人の美容

婦人の美と云ふことは無論性の問題と直接の關係のあることではありませんけれど、男女間の愛の牽引の原動力として、美の要求は決して閑却することは出来ませんのです。殊に婦人の容姿の美は、性慾を自覺しない年齢の者にも婦人精神生活の最も重要な要素をなすものでありまして、病氣或はその他の原因から、その顔貌なり身體なりの美を失ひますことは、若い者にも老いた者にも、婦人としては最も堪え難い重大な打撃であります。顔に腫物が出來て容姿を悪くするだろうとの懸念から、若い身を以て自殺を圖つたといふような例も、世間には決して稀のことではありません。況んや戀愛の自覺あるもの、即ち己れの容姿美によつて優良な配偶者を得ようと欲し、又己れの美容によつて夫の愛をいつ迄もつなごうと欲する妻の如きは、改めて云う迄もなく、その美を資本として男子を誘惑しつゝ生計の資を得ている種々な性業婦人の如きに至りましては、美の喪失は直ちに資本の喪失となるのであります。これらの人々が己れの容姿の美に關心することは實に男子の想像以上のことでもあります。

女性の美は即ち男子の注目を引き、愛の結合に至らしめる動機を作ろうがために、非自覺的に自然から興えられました女性そのものの表出なのであります。戀愛生活に入る年齢即ち思春期からは、婦人は急激にその容姿美を加えて参り、處女期におきましては全く美の極致として、藝術家から辭を惜しまず禮讚される程、神の作つた最も崇高な美の要素を凡て身一つに備えているものであります。年を重ねるにつれて、その美の態様は多少變つては來ますが、生動の旺盛な時期には決してその美を全然失ふことはありません。或る若い婦人が愛人と別れまして、その男が自分の所へ歸つて來る日を期待しつゝ十年の月日を過しましたが、その間少しも若い容姿の美しさを失わなかつたというような逸話もあるのであります。

しかし婦人は結婚生活において子を生み夫の愛情を確實につかみ得たと信じますと共に、にわか
にその美を失うに至るのが常であります。これは自然の妙機として、媚を賣る必要がなくなりました
ために、その美さを保つべき機能を失墜するに至るがためであらうと考えられます。従つて子のない
婦人は比較的長く若々しさを保ちますし、又性の飽滿を得ないで、いつ迄も戀を戀しつゝ愛の世界
に活動している種類の婦人などでは、年にも似ず若々しい美しさを長く保ち得るものであります。そ
れ故經驗のある人は、その容姿の美しさに基いて、その婦人の愛情の動き並びに戀愛能力を推察する
ことが出来るといつてゐる程であります。

美の標準

しかし美の批判には一定の標準があるわけではなく、見る人の性質や趣味や又その時々感情によ
りまして甚だしい相違があるのであります。甲が美人だと云つて禮讚しましたが、乙がそれに賛成し
ない場合も多く、又一口に美人という中にも、天成の容貌の美しいものもあり、動作の優雅な者もあり、
全身の調和がとれて美しいというものもあります。又眼とか髪とか手とか肩の曲線とか、局所的部分
的の美點をとり上げて云うこともあります。

一般に世人の美の標準は時代によつても移り行くものであります。而かも同一の時代におきまし
ても、見る人の異なるによつて異なるものであります。必ずしも萬人が萬人皆美人と認めるものは
世に少ないものです。假りに美人の標準が一定のものであるとしましたならば、不幸にしてその標準
に合うように生れつかなかつた人は、一生浮かばれないことになつて了いますが、實際におきまして

は如何なる人にもその人に固有な美しい所は必ず存しているものなのであります。

天成の美貌につきましましてはこゝに述べる必要はありません。たゞ己れのもつている顔貌、容姿、動作等を及ぶ限り美しく表現するという努力は何人にも必要のことです。又これを美しく仕上げて行こうという努力は、教えずとも凡ての婦人に共通な本能として、力強く婦人の心理を支配しているものであります。

同じ人でも四季の中で春が一番美しく見られるものであります。それは自然の恵みによりまして、春には全身の血行が一番よくなり、従つて肌の色がつや／＼しく、皮下脂肪が豊かになり、表情も亦精神の活潑となるに伴つて何となくさわやかに見え、しかも情熱的に見えるのであります。現代では化粧の美よりも、むしろこの自然の美に對して人が正しい批判をするようになりました。今その表出の美に對しまして批判を致します際には、大抵次ぎの四つの點が標準となつてゐるように思われます。

均 齊 美

第一には均齊の美であります。つまり整つた顔や姿であります。誰でもその正面の寫眞をとつてこれを左右半分づゝを隠して見ますと、左右が全く別人のように違いますので、眞實の左右相似型の顔は先ず一人もないといつてもよい位であります。しかしその中にも均齊のとれた調和があり、これを全顔貌として見ますときに、左右の相異あいことなることが却つて均齊の要素となつてゐるのに氣付くとさえあるのであります。生花いけはなの美しさは即ち均齊の美であります。それは必ずしも左右相稱たるを要しません。現代婦人の髪飾り、西洋婦人の帽子などは、著しく左右不均齊なものが多いのであります。これが顔貌の不均齊と相映じて、かえつて魅惑的な美を生ずる要素となるものであります。

爽 快 美

第二は表情の上で愉快な満足をあらわすものほど美七いのであります。人の顔貌は生きてゐるものであります。瞬間毎にその精神内容を反映して表情は變化して已みません。陰鬱な容貌はたといそれが絶世の美人の泣き顔でありましても決して美しいものとは云えません。同一人の寫眞でも非常に

美しくうつる時と、然らざる時とありますのは、その時の精神内容により表情の變化があるからによるのであります。幼兒の寫眞が非常に人をひきつける魅力のありますのは、その容貌の良し悪しではなくて、その表情の無邪氣さがあるためであります。

理性美に眞愛美

第三に中年の婦人におきましては、若い婦人に見られない敬虔と理智との表情が深くその容貌にきざまれています。性的魅力となるべきはなやかな美しさが、愛慾の減退と共に段々失われて行くにつれまして、それに代る深い修養と澄んだ理智とが、おのずから中年婦人の容貌の上に純眞な心の光として品位を與えて來るのであります。これはわざとらしい氣取りによるものとは同じではありません。實際修養のない人は、とりつくりつていても、氣品があらわれないものであります。

第四には熱愛の表情であります。いかなる女性でも眞から愛を感じている時には、その愛の表情は化粧やわざとらしい作り顔には決して現われない特殊の魅力をもつものであります。しかしこの魅力を人爲的に誇張して、愛あるものの如くに愛の表情を現わすことを媚と呼び愛嬌と呼びます。この媚

態は男性を巧みに誘惑する職業にある特殊の悲しい階級の女性にとりましては、常に研究され又巧みに表現されるものであります。自然の眞愛の表情は、斯く誇張され虚飾されなくても、特別な魅力をもつていゝものであります。やたらに媚態をなす者は、すべての男子に輕々しく愛を捧げようとする女性の意志表示でありまして、貞操の上からはむしろ輕侮に値いするものであります。

表情はその人その時の刹那の精神を最も露骨に現わすものでありますから、表情によつて美を保とうとするものは、常にその精神を愛にみちた充實した緊張した状態に保持する修養をしなければなりません。如何に評判の高い美人でも、不謹慎な馬鹿話をして高笑いしている時の顔は決して美しいとは感ぜられません。女中は女中づらをしていますが、後に良家に嫁ぎますと間もなく立派な奥様の姿となります。即ち彼女の修養と心の態度とがこの表情をこのように變化させたのであります。

この點から見ますれば、美の養成は心の修養に歸着すると云つても宜しいであります。そうして婦人美の理想はこのような理想から生じた自然美にあるべきでありまして、娼婦などの人爲的化粧法による美は、單に男子の玩弄物たらしめるための誘惑、即ち繪畫の彩色のようなもので、決して人のもつ自然天眞の美ではないのであります。

季節と婦人

生物界を通じて人間以外の生物には、その生殖には一定の限られた時期があるのであります。植物において春季に萬花燦爛と美しく咲き競うとき、それがやがて植物の生殖機能の華やかな始まりなのであります。秋のみよりは即ちその成果であります。云いかえれば一年に一度の生殖を営むのであります。もつとも年一度とは云いながら、その種子の生ずる数は殆ど數えることの出来ないほど多いのを常と致します。動物におきましても同様で、大抵一年に一回又は二回の一定の生殖時期を有します。下等動物では四季の別なく生殖を営むものであります。高等な哺乳類、殊に人類に近しい高等のものにおきましても、大抵一年一度の起水期を有し、この時期において雌雄相求めて生殖行爲を行うのであります。その他の時期には感情の發動は全く起らないのであります。

人間におきましても同様に、その原始時代には一定の生殖時期があつたのかも知れませんが、段々社會的の生活を営み、男女の接觸が自由に行われ、又住居、衣服等の發達により氣候の影響も人為的に調節することが出来るようになりましてからは、その生殖には特別の時季を選ばず、四季何時

でも、生殖機能も感情發動も行われるようになって來たのであります。しかし大多數の草木や動物と同じく、人間の愛慾も春季において特に力強く發動する傾向のありますことは、この時季において生殖機能に關する生理作用が比較的亢進し、女性が男性の心をひきつけるその身體のうるわしさが、殊に春季から夏季へかけて自然と生々たる活氣を呈して來る事實に見ましても、うなずかれることとであります。しかのみならず社會統計の上から見ましても、私通、家出、誘拐等の性愛に關する事件が発生しますのも、春季において一番に多いようであります。

春と夏の婦人

冬季の間は婦人の肌もひび、あかぎれ、しもやけなどのため、その美しさを失い、辛うじて化粧によつて外観の美を保つに止まつていましたのに、段々春に近ずいて來ますと、水は未だぬるまじとも婦人の肌はおのずから滑らかとなり、血色もよくなり皮下脂肪も豐艶となつて來るのみならず、その精神も亦おのずから浮き立つて參りまして、何となしに神経が鋭くなり、又人々の交通も頻繁となつて、店頭は賑い、いろ／＼な會合の催しも急に繁くなつて參ります。春は心のときめく時、心の駒の

勇む時であります。日頃から神経質になやむ人は、かえつてその煩悶の強さに堪えられないで、神経衰弱様の症状を起し、春愁の悩みに囚われる程であります。いわんや健全な乙女がこの時期におけるその肌の美しさ、その心の輝やかしさはまた一しおであり、男子も亦青春の血がみなぎつて、身体も精神も潑刺として著しく活動的となるのであります。従つてこの時季に男女間に活潑な情感の動くことは自然のことであります。初めて性生活に入るもの、又は愛のあやしい歡喜を知るもの乃至は痴情に基くいろ／＼な事件や犯罪や、凡て人々の神経の刺戟性亢進と、内部にある性的衝動の動きとの交錯によりまして、春にはいろ／＼な人事の「ジャズ」がかなでられます。

そして夏に入りますと、人は外界の氣温や人事の刺戟に疲れて來まして、その神経系統は幾分遲鈍になり、物事に倦み易く倦き易く、忍耐の力を失つて參ります。人の精神生活は暑さのため腦の充血を來して注意散亂状態に陥り、何事にも興味を失い消化力も悪くなります。従つて婦人も平素の慎しみ深さを忘れますが、戀愛の如きも春よりは衰えて來ます。唯、筋肉のみは身内に溢れる血行のため一層その力を強めて來ますから、婦人は化粧を忘れ美食を忘れて、たゞ旅行に運動に、登山に、辛くも筋肉活動を求めて銷夏を欲するのであります。人々は極めて無遠慮となり且無謀となり、又道徳

心をも失つて、男女ともその品性のみにくきを表わすようになります。

秋と冬の婦人

秋季に入つて氣候が冷やかになるにつれまして今迄ゆるんでいた神経の力は再びひき締り、丁度春季の對照として、秋季は欲樂の後につゞく精神的緊張の時期に當るのであります。春に狂つた心は秋に又再び正しい道に歸つて來ます。夏の間ゆるんでいた精神の活力も回復し、再び新しい刺戟を求めようになります。しかしそれは春のような浮き／＼したものではありません。婦人の心持も謹嚴になり眞面目となります。春にかもされた情界の感動も秋に入りますと共に反省せられるものであります。

冬季は自然の寒氣のため神経作用は消極的となり、生々した生活機能は失われ、次いで來るべき春の新生に備えるために一時力は内に貯えられ、神経もその刺戟性を減じ、誘惑に會いましても容易にそれに陥ることがありません。従つて婦人の肉體の美もおのずと凋落するのを免かれませんが、斯く一年間を通じまして性的衝動の發動の上に律動的の變化が存しますけれども、都會の文化人

にありましては、冬季に神経の萎縮するのを人為的に矯めて、この人生をなるべく愉快にいたしまするために、家の室内には温かい空気をたゞよわせ、身體の血行を盛んにするためには、酒をくみ肉食をとりまします。官能をそゝるためには化粧と服装と香氣と燈火とを華やかにいたし、これによつて幸くも神経作用の沈滞をふるい起そうと致すのであります。

婦人の心身には春季のような自然の魅力が缺けていますから、それを補うために化粧美、服装美に細心の注意をそゝぎ、社交とか藝術とかで心持を浮き立たせ、人為的に種々の媚態嬌態を作ろうとします。心ある人々から婦人のけばくしい虚飾が最も苦々しく思われますのは、この冬季であります。春は婦人の自然美の發揮せられる時期でありまして、如何なる人工的美粧も、この自然の美しさに對しては及ぶべくもありません。殊に無邪氣な活潑な少女の春の姿は、最も生々した好ましきであります。また秋は靜かな精神的な理智的な美しさがその姿の上にもあらわれまして、優雅な趣きが認められますけれども、冬の婦人は、自然に備わる魅惑的な美しさは全く失せて、たゞ人為的な華々しい化粧ばかりがその表面的の美しさを保つのみでありますから、これはたゞ都會の社交的の婦人のみが持ち得、また感じ得る特殊な不自然な美しさに過ぎません。

更 年 期

美しい華やかな壯年期を過ぎてやがて女性は更年期に入ります。御承知の如く婦人は四十五歳乃至五十歳位の間に漸次卵巢の排卵機能が衰退し、その間に月経は不順となり且甚だ少なくなり、遂に月経が閉止するに至ります。これを經盡期と名づけますが、その時期は人により多少の相違があります。けれども大抵は初老期に相當するのであります。またこの時期には卵巢の内分沁作用が減退するために、單に月経閉止の現象のみならず、全身の神経系統並びに體質等の上にも著明な變化を起して來るものであります。即ち卵巢の「ホルモン」は身體及び精神の若々しさを保持する機能を持つてゐるものである事は前に述べましたが、その機能が脱落するために、經盡期になりますと、婦人の身體には急にその皮下脂肪が減少して來まして、しわがより、肌の色艶が失われて血色が悪くなり、いわゆる若々しさを失うのみならず、毛髪もまたつやくしい濡羽色を失つて灰色又は白色となり、その他種々の内臓機能においてもすべて老衰現象を發呈して來るものであります。

精神神経系統においても亦變調が起り、經盡期におきましては、大抵の婦人は神經過敏となり、苦

勞症となり、精神的の勞作によつて疲れ易く、些細なことにも怒つたり恨んだり心配したりなど、感情を動かし易く、殊にこの年配には初老期憂鬱症と名づける病氣を發することが比較的多いのであります。従前から神経質で、若い時分から苦勞症のために神経を無理して使つた人は、殊にこの憂鬱症に陥り易いと云われています。この初老期憂鬱症は治癒が甚だ困難なのみならず、他の慢性の精神病に移行することも多いのですから、注意を要するものであります。斯ういふ病氣の起りますのもつまりは卵巢「ホルモン」の脱落が主要な原因であるかと考えられ、斯ういふ症状の特別に強い人に對しては、卵巢の製劑などを注射又は内服で與えましてその内分泌の不足を補いますと、幾分症狀が緩和することがあります。

いわゆる老婆心

しかし斯ういふ精神病にかゝる迄に至りませんでも、更年期の婦人はその神経系統が甚だしく刺戟的となりますから、些細のことからカッとのぼせて、傷害、放火等の犯罪行為に陥り易くなり、婦人の一生中、青春期に次いでこの時期は最も精神感動の激しい時期とせられているのであります。のみ

ならずこの頃になりますと、婦人の感情の生活はもう終りに近ずき、従つて情的の事柄に對する正しい道義的批判力を失ひまして、羞恥心が薄らいで來、いわゆる厚顏無恥となるのであります。そこで青春期にある男女を使喚して種々の不道德なことをさせるような事を比較的平然と行い、又は斯ういふ事に對して非常な興味をもつ者が多くなります。

一般に愛慾はその發動の旺盛な時に、これを満足させることの出來ないような不自由な状態におかれていました者は、その欲求の抑壓によつて一種の神経過敏の状態に陥り、いわゆる「老嬢」に見られる特別な心理状態を呈し、他人の情事關係について、甚だしい嫉妬的な感情を起し、これを妨害することに興味をもつような傾向が起つて來るものであります。それに反して若い頃から愛的生活に満足するような幸福な状態にあつた者、即ち花柳界の放肆な人々とか、又は情的生活を圓滿に終つてみずからの内部の刺戟を強く感じないようなつた更年期以後の婦人などにありましては、むしろ性的のことには無恥の状態となり、他人が性道德を固く保持しようとするような事を、むしろ下らないことのように思ふのであります。それで一方には男女のなかだちをすることなどに興味をもつて來まして、他人の縁談などの世話を非常に熱心に行うようになります。即ち更年期以後の婦人は性的のこ

とに對しては超然とはなりません、むしろ他人の情事に世話をやいてこれを自分の意のままに左右しようとするような心持をもつに至ることが、甚だ興味のあることだと思ひます。これがいわゆる「老婆心」と名づける心理であります。

老年期

しかし更年期が過ぎて卵巢の内分泌が更に減退するにつれ、年を重ねて行く間に段々とその性格は女性の優柔を失つて参りまして、むしろ男性に近づくように變化して参ります。例えば身體におきましても、老年になりますと、男のように鬚が生えて來たり、骨格も逞ましく肩が怒つて來、その氣性もまた男性的に荒くなり、従前ものやさしく深切であつた性質にくらべまして、如何にも殘忍冷淡になり、しかも一方には前に述べた如く他人の情愛生活に對する特殊な嫉妬心の様なものも手傳つて参りまして、即ち老人に特有な姑根性或は鬼婆根性とも名づくべき特別な心理状態を生ずるに至るのであります。姑根性というのは若い夫婦の圓滿な性生活に對する老人特有な意地の悪い嫉妬から生ずるものであります、無論これは意識的にわざとやる行動ではないにしても、甚だ家庭生活にと

つては不愉快な現象であります。しかしそれは人間性としてはやむを得ない心的變化の結果であります。

男子では女性に特有な經盡期に相當する内分泌急激減退の時期を有しませんから、老人期になりましても、さほど急激に精神の變調を示すことはありませんし、又睾丸の内分泌の減退によりまして男はむしろ男性的傾向を失つて來まして、女性的な優柔ささえ加わつて参りまして、いわゆる「好々爺」の性格をあらわすようになるものが比較的多い位であります。こういう事例を以て見ましても、内部性器の内分泌作用と、その人間の性慾の力のみならず、その一般精神生活並びに性格との間に如何に重大な密接な關係が存在するかということが推察出來るのであります。或る學者は男性にして優柔不斷、その性格が女性のような者に對しましては、男性「ホルモン」を含む睾丸の「エキス」劑を注射によつて與えますと、その性格を意志強固なものに改めることができるかと主張しているのですが、これは一概に信用はできないにしても、そういう臟器療法の可能性は有り得ることと思われれます。

離婚

我が國の統計によりますと、近年一年間の結婚届出数は約五十萬件、即ち人口百五六十人に對して約一件の割合に當るのであります。これに對して離婚届出数は一年間に五萬件餘で、即ち結婚數の凡そ一割に當ります。無論これは表て向きのものみの統計でありますから、正式に届出でない内縁關係の離合につきましては、如何程に上りまするか、その數字は分りません。しかし大約十組の新夫婦が出来ると共に一組の夫婦關係が破れて行くと考えるのが普通でありまして、折角若い男女が性的使命を自覺して結婚生活に入り乍ら、一方にその多くが破鏡の嘆きを見るに至りますことは、誠に痛ましいことに相違ありません。

離婚を當事者の心理的問題として考えます時には、その原因は凡そ左の五種類となります。

- (一) 結婚生活そのもの、又は現在のまゝの結婚生活をつゞけて行くことが、經濟的關係において許されず、又自己の心身に對して苦痛である如き場合、即ち家計上の破綻であります。
- (二) 經濟的關係からではなく、主として趣味、嗜好、性格等を異にします上から、お互いに同棲す

ることが甚だ不快であり、そのために離婚を望むに至りますもので、即ち家庭和樂上の破綻であります。

- (三) 因襲的の家族制度の立場から、夫婦間に到底子の出来ないということとを理由として離婚しようと思ふもの。

- (四) 經濟や趣味の上では格別の故障はありませんでも、愛の生活の上で夫婦の何れかに缺陷を有するもの。

- (五) 夫婦の何れか一方が第三の異性に對して新たに戀愛を生じ、現在の夫婦關係を斷とうとするもの。

大體以上の五種類に分け得るかと思ひます。しかし前にも述べました如く、内縁や愛人關係ならばいざ知らず、正式の夫婦關係は決して性愛の生活のみを唯一の目的とするものでない以上、(四)、(五)の原因から直ちに離婚しようとする如きは少しく早計に失すると思ひます。單純な戀愛關係、内縁關係、愛人關係の如き場合ならば、元來が愛の結合だけが主な目的なのでありますから、その不和を理由として離れることは少しも差支ないことでしようけれど、正式に結婚した夫婦關係におきましては

特殊な夫婦間の倫理的責任が有している筈であります。出来るだけお互いが努力して双方の性格を理解し合い、又經濟を助け合い、及ぶ限り夫婦生活の缺陷を修正してこれを存続しようと努めますのが本來の建前でありましょう。

中には愛の不平等のために夫婦が相離れて別々に生活していながら、尙且つ社會的には離婚を取えたくない人もあります。否、むしろ世上に問題となつた名流家庭の破綻に至つたいろ／＼な理由を調査して見ますと、今日相當な教養をもつている人々でも、割合に夫婦関係においてこの相互の努力が乏しく、離れ／＼の心持で、無理な或はやり放した生活をつゞけているような人々が、案外に多いことが解るのであります。即ち不幸な破婚にまでは至りませんが、じつとお互いに倦怠した生活を辛抱し合つて、毎日味氣ない生活を送つている人々が、決して少なくはないことが想像せられるのであります。一般に家庭生活を明るくし夫婦関係をなごやかに致しますものは、決して愛情のみでもなく、又あきらめでもありません。それはお互いの理想に生きようとする不斷の努力でなければなりません。

夫婦の倦怠期

一般に戀愛結婚におきましては當初から愛の関係のみに重きがおかれていきますから、それ以外のことの努力が乏しく、従つて間もなく夫婦間の倦怠が生じて来るのをどうしても免れません。とにかくに夫婦関係はそのまゝ放任しておいても永久に同じ熱心さでつゞけられて行くという筈のものではありません。結婚後五年或は十年という所が最も苦しい夫婦生活の倦怠期だと云われています。

従來の家族制度の生活では、新嫁に對しまして、夫の性格や家業等にその心持を適合させるように努力を強いる風習になつていましたのですから、初めの五年間位はむしろ苦勞の中にあつたゞしく過ぎてしまふのであります。それから後子供でも出来ると段々家庭の妙味がわいて参ります。しかしこういう事のない場合、自然のまゝに放任しておいては、どうしても倦怠に陥るのを免かれませぬ。幸いにして大抵は子供が家庭に新しい活氣と明るさを添えることになりしますので、辛くも倦怠による家庭の悲劇を免かれて行けるのであります。子供の一人もないさみしい家庭で、しかも夫婦間に努力と忍耐とが缺けていましたならば、必らずやこの倦怠期に際して、離婚か或は離婚とまでは

行かなくとも、何か悲劇的な現象の起るのを免かれないのがむしろ自然でありましょう。

離婚者の統計を見ますと、結婚より離婚に至る迄の経過年数は、五年未満の者が都會で五割、田舎で六割に上つています。五年以上の者が都會で五割、田舎では四割に當つています。結局比較的早く離婚に至る者が田舎の方に多いのは、強制的な家族結婚或は政略的な結婚等で、本人の愛を無視して夫婦生活に入らせられたものが多いという結果でありましょう。又五年以上になつて離婚するものが都會の方に多いのは、今云つた戀愛結婚の夫婦間の倦怠や經濟關係の逼迫が原因となるのが多いためであろうと察せられます。

夫婦間の不和の因

しかし「子なきが故に去る」という昔し思想は、あまりに家族本位の因習にとられ過ぎていて、婦人の人格を全然認めないものと云わねばなりません。斯かる現象は我が國においても將來段段減少して行くことと思われれます。又愛の生活の不調和のみの理由から離婚を望むのは、夫婦生活に特有な社會的使命を全然没却したものでありまして、斯かる夫婦の間には今迄にも實際上眞の生活の

眞剣味が缺けていたことは云う迄もありません。

しかし夫婦生活の基礎は何と云つても愛の生活に重きをおかれることは云う迄もなく、子供は授かりものでありますが、子がないとしてもその愛の關係は是てることはできません。それ故この生理上の不調和が暗々裡に夫婦間の心持を離間する原因となり得べきことは實際上少なくないことでありまして、夫婦何れか一方の生理的缺陷、疾病、戀愛技巧の缺如等に因るものもあり、又精神的に愛情の缺乏や、配偶者の性格や處遇に對する不満等のある場合にも、その夫婦生活は、他の方面で如何に努力をしましても、決してしつくりとうまく行くべきものではありません。夫婦生活をしていながら愛の不和不満が持續する場合に、我が國では男に對しては「外婆」をおくという如き策が社會的に許容されていましたが、この風習の惡習たることは無論であります。中には家庭が不和であり又は不和になりつゝありながら、夫婦が互いに性知識の不十分なために、何故に仲よくなれないのか、その理由を諒解しないで過しているような者もあります。それをよく醫者の側から診察して見ますと、婦人科又は泌尿器科の領分の病氣によることもあり、又神経性の病氣によることもあり、或は精神科の領分即ち非自覺的の潜在意識作用によつて不和なのであつて、精神分析術によつて始めてその理由がわか

るという様なこともあるのであります。

何れにせよ、これらに對して醫師が早くその原因を發見し醫學的治療をなすことによりまして、夫婦間の愛の不和が治つたという出雲の神様以上の大手柄を醫師が擧げたという例も實際上少なくないのでありますから、事實上性的不和を主要な原因として離婚を望む場合には、まず離婚に進む前に適當な醫師に一應相談することが、一つの離婚緩和の對策となる場合もあるだろうと思われるのであります。

獨身婦人の精神病

いわゆる禁斷の生活はつまり草木より美しい花を奪つて了うのと同じことでもあります。哲學的の立場からはトルストイの唱えるような絶対禁慾ということにも特殊の意義がありましようけれども、一般の人間にとりましては、むしろ生理的並びに社會的現象としてその愛慾を合理的に満たすということとは、身體の健康の上から云いまして、社會の秩序の上から云いまして、望ましいことなのであります。まして今日の種々の社會現象は、大にせよ小にせよ、すべて多少は性生活と關係をもたない

ものはない位であります。

しかしそれでも女性にとりまして、社會的習慣の上から絶対に性的禁斷の要求せられる條件が二三あるのであります。その第一は結婚生活に入る迄の若い人々でありまして、その處女性を守ろうがために、公けには絶対禁斷の生活を送ることが要求せられています。この時期に猥りに性の生活に入つた者は、新らしい正しい結婚生活に入るに當りまして、それだけの批判を受けることを甘んじなければなりません。第二には結婚生活を送つていた者がその夫の死亡後、未亡人として夫の家に座している間は、習俗的貞操觀念のために性的禁斷の生活を守らなければならないことになっています。いわゆる「後家を立てる」のであります。第三には妻としてその夫の病氣中又は不在中を守る間も、嚴重な性的禁斷が要求せられていることは云うまでもありません。しかしこれらは何れも醫學上生理上の必要から起つた禁斷ではなくして、道義上から習慣的に生じたものであります。その合理性を信ずると否とに拘わらず、世間はこれら未婚者、未亡人、人妻の愛情生活を嚴重に監視しているのであります。従つて思想的に解放された心持をもつてゐる婦人でも、こういう場合、世間的には心ならずも禁斷を強いられることが多いのであります。

婦人の禁断生活は屢々婦人の種々な神経病の原因となり得るように世人から考えられて居り、婦人の獨身生活や職業的自活問題が斯うした立場から議論せられることが少なくないのであります。又一面にこの病氣になるということが、禁断生活を破つた者の辯解として、婦人に禁断生活の行われ難い弱味のある特殊の點として世間から認容せられるようなこともあるのであります。

一般に婦人禁断生活の結果として起つて来る病的徴候とはどんなものかと申しまするに、二十四、五歳以下の未婚の男女でまだ性經驗がなく、性的衝動の少ないものにおきましては、絶對的禁断を持續しても何等身體的に害はありません。しかしそれでも餘り長く二十五歳以上迄もつゞけますと、男子では全身の刺激性亢進、作業嫌厭、その他の神経症狀を起して參り、殊に體質的に神経病的の者は、これが昂じて強迫觀念症や憂鬱症や苦悶症或は知覺症等を起すに至るものであります。女性では男子よりも割合によく禁断に堪え得るものではありませんけれども、しかし神経質の者では往々いろいろな神経症狀をあらわすに至る者が決して少なくないといわれています。

老嬢の心理

老嬢の心理が特殊のものであるように世人に思われているようではありますが、これは決して絶對禁断の生理的結果としてそうなるものではありません。良縁なくして婚期を空しく過して了つたについては、何か自分の側に容姿の不備とか境遇の不幸とか、いろいろよんどころない事情があつたにせよ、この事から幸福な結婚生活に入つた人々の身の上を羨ましがり、一方に自分の愛の刺戟を感じるにつけて、これを強いて抑壓するによつて来る神経衰弱性の症狀も手傳い、これらが相俟つて自己劣等感（俗に云うひがみ根性）、他人の幸福な夫婦生活に對する嫉妬心、これを妨害しようとする復讐心、世を呪う心持等を生ずるに至るのは、已むないことでありまして、つまり老嬢心理は境遇によつてかもされたものに外なりません。従つて婚期を逸して相當の年配まで未婚のまま、職業的生活に没頭している婦人でも、妙齡の頃から一度も夫婦生活の體驗がなく、愛の關係について少しも外界からの強い刺戟を感じることもなく、又自ら強いて愛慾の動きを抑壓するような必要もなしに過して來た人達は、幾歳になつてもやはり女性特有のやさしい處女性を保持し、少しも老嬢心理として考えられるようなひがんだ心理を起すようなことはありません。單に未婚のままに婚期を逸した人々を目して皆異常の性格をもつものゝ如くに解するのは當を得ません。

同性愛の感傷性

前に思春前期の少女時代の「親友」について述べたことがありますが、概して女學生時代が長期に亘つてつゞきますと、嚴重な父兄教師の監督のために自由に男性と交遊することは許されず、又そういう機會もない。然るに一方精神上には漸次愛の心理の發達によつて特異の戀慕憧憬を求める心持が起つて参ります。これが相合して女性特有の同情や感傷性と相俟つて「親友」の關係が多少色濃くなつて來まして、こゝに同性愛を構成するに至るのであります。これが世間にいわゆる女學生或は女工などの間に見られる同性愛なるものゝ真相でありまして、たゞこれらの者の經驗の狭い所から、年頃の者同志が特に仲よくなり、お互いに身の上を相談し合い、その一方の者に不遇の事件や或は結婚話などが持ち上つて別れなければならぬようなことになりますると、一時的の感傷性から「いつそ二人で死にましようよ」などという相談になり、これが直ちに實行に移されるのであります。しかしこの相互の間に、狹義の性的關係などは毫も認められないのがむしろ多いのであります。

それ故若い女同志の心中だとか出奔だとかいうことは、決してこれを變態性慾的現象と即斷すること

とは當りません。男性同志の親しい友人間の信愛關係では、何かその一方に不幸な事件が起つても、お互の感情亢進が淡いから、これに同情はしましても、共に死のうなどという相談には立ち至らないものです。女性ではその持前の感傷性からとかく斯ういう死の道連の如き現象を起し易く、それが表面上同性愛の如くに誤認せられるのに過ぎません。しかし「親友」關係の何れか一方の者が年長であるときは事情が變化いたします。

レスビアの愛

しかし或女性におきましては妙齡に達しても男性に對する性的愛慕の情が少しも自然に起つて來ませんで、むしろ男性に對しては近づくことさえもいやで、同性の者と一生相共に暮らしていただきたい心持のみが起り、「私は一生お嫁なんかに行かないで、家にいて母様と一緒にいましょう」などと云い、友達同志「お互にお嫁に行かないで長く仲よくしていきましょう」などと約束を致します。斯くていつ迄も眞の異性に對する愛慕を感じることはない現象は、往々深窓に育つた女性などに見られることでありまして、これを變態心理現象としての同性愛的傾向と呼ぶのであります。しかしこれも精

神の變質的症狀として起つて來ますものよりも、むしろ愛の心理の未分化又は未發達のために一時的にそういう傾向を示すのでありまして、やがてその女性の眼界が廣くなり、多少なりとも男性との交際の機會が開けて來ますにつれ、又は親の強制などで澁々結婚生活へ入るにつれ、間もなく通常の異性愛がめざめて來、何の支障もない夫婦生活を送るようになりますものが比々皆然りなのであります。

たゞ特別の精神變質的の病的素質をもつてゐる人に限りましては、強いられて結婚生活へ入つて後迄も、いつ迄も異性を嫌い、自分から相手となるべき同性の者を探し求めて、それとのみ親しもうとするものが往々あります。これが眞の狹義の同性愛なのでありまして、昔レスビアの女詩人サッフオーがこの傾向を極度に示したという云い傳えから、これを「レスビアの愛」又は「サッフオーイズム」と名付けています。

斯ういふ眞の同性愛は一種の精神病的現象と考へべきものでありまして、その人の幼少時の特異の生活經驗に基いて醸成されたものとせられ、今日精神病専門醫の精神分析療法その他の特殊精神療法により治療の方法が講ぜられています。治療によりまして、これを正常の状態にもち來すことは必ら

ずしも不可能のことではありません。

結 び

以上で女性に特有な性的生活に關する重要な知識の輪廓をどうか描き終つたと考えます。もちろん僅かの紙幅の中に凡ての問題を網羅することは不可能のことでありまして、精密な個々の知識は別にそれ／＼の専門的の記述によつて得ていただきたいと思ひます。私共はたゞ現代有識階級と自任するいわゆる文字ある婦人でありながら、なお自分の生理的、心理的、社會的の特殊な特徴と立場とを理解せず、性的問題の批判に當つてとかく得手勝手な、自分の特別な境遇のみを基準として意見を立てゝいるような人々が案外に多く、本當に人間としての性の本質についての知識に乏しいと感ぜられるような例に屢々遭遇致しますので、これを遺憾に思ひまして、幾分なりとも啓蒙的の效があれば幸いだと思ひまして、醫學的立場からの性知識通俗講座をこゝに試みた次第であります。この外に男女一般生理及び心理上の相違を詳述し、これに基いて婦人の職業問題、「スポーツ」問題、一般婦人の社會問題、並びに今後の女性の社會發展上の覺悟等に論及し、延いては婦人に特有な身體病、神

經病、精神病等を述べまして、その方面からの婦人の特異性によつて婦人の社會問題に對する批評を
 試みたいと思つたのでありましたが、これらにつきましてはいづれ醫學上より見た婦人社會問題とし
 まして、將來の好機に更に執筆して見たいと存じて、こゝに擱筆致します。

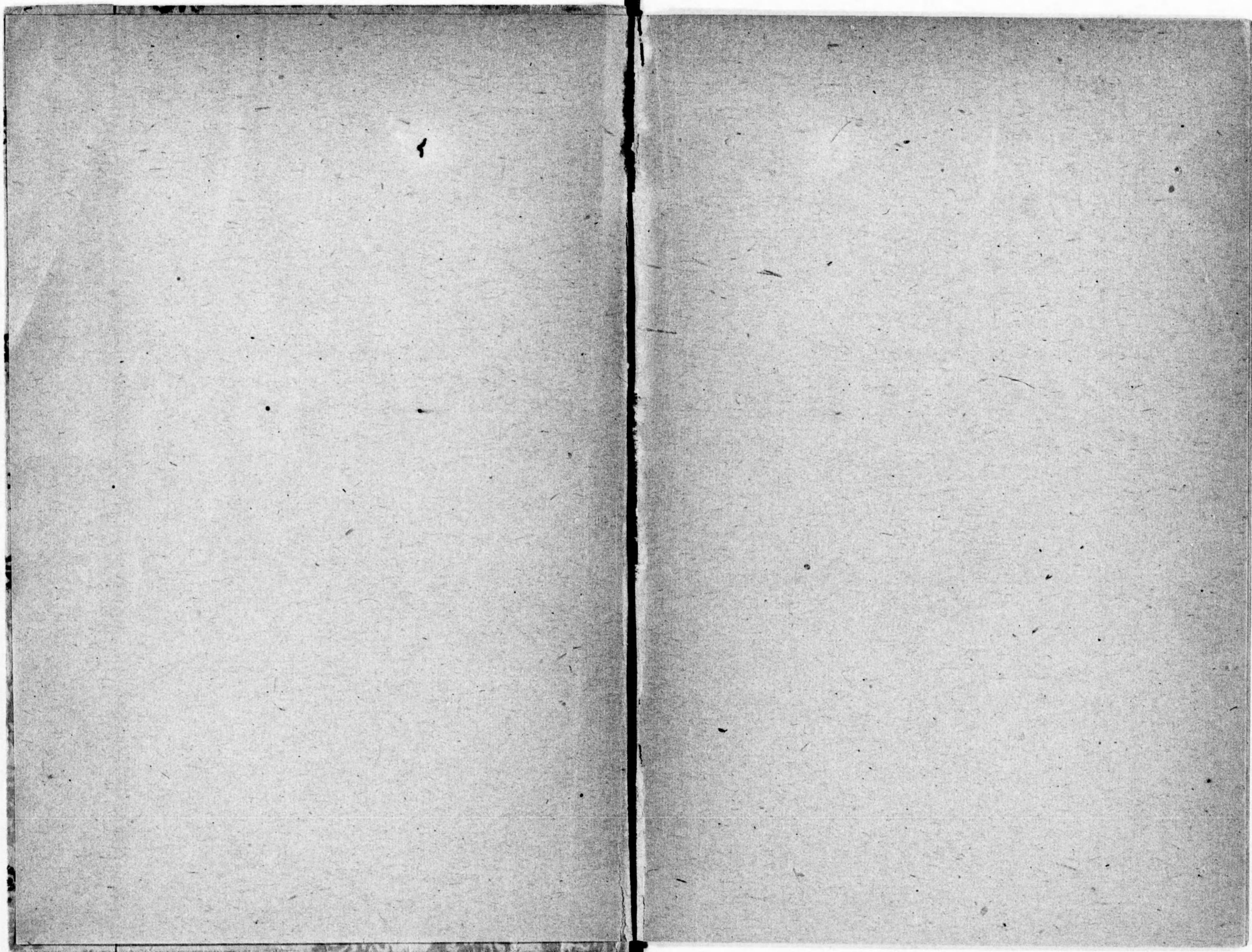
割當事務庁
 讓渡圖書



昭和二十三年十一月十日印刷
 昭和二十三年十一月十五日發行

定價百拾圓

著者 杉田直樹
 發行者 小林庸三
 印刷者 小島順三郎
 印刷所 株式會社秀英社
東京都千代田區神田小川町二ノ一二
 發行所 日本學藝社
東京都世田谷區玉川等々力町
 二丁目一六七六番地
 振替口座東京一九五一〇七



終

